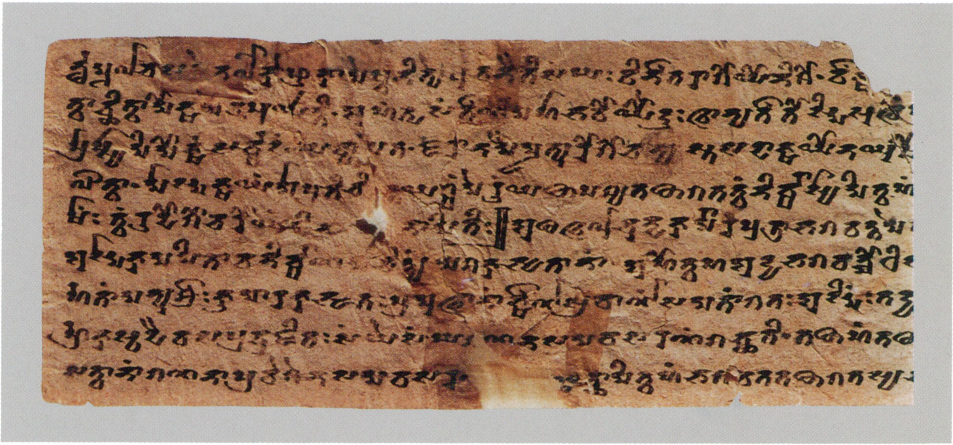
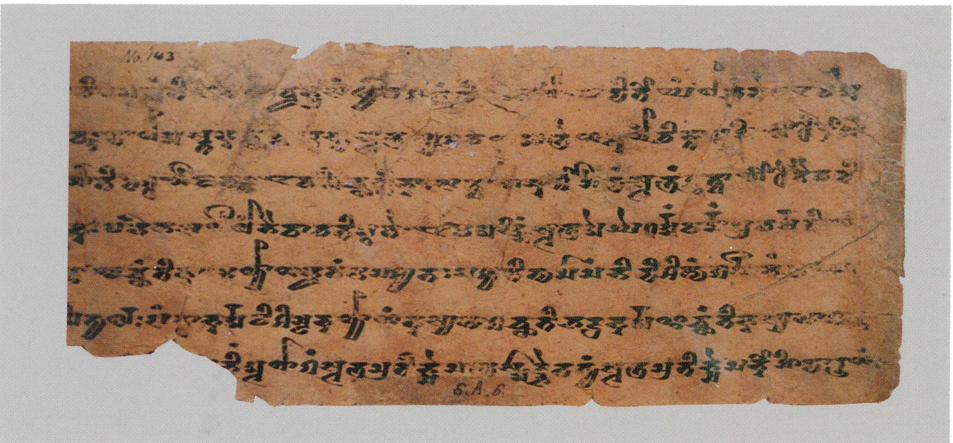




Manuscript A-3, Recto, Hoernle Collection



Manuscript B-2, 3, 4, Verso (left), Stein Collection



Manuscript C-4, Recto(right), Hoernle Collection

STUDIA TIBETICA No. 14

インド省図書館所蔵

中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集

——スタイン・ヘルンレ・コレクション——

松田和信著

財団法人 東洋文庫

1988

STUDIA TIBETICA No. 14

Sanskrit Fragments of the
Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra

A Study of the Central Asian Documents
in the Stein/Hoernle Collection
of the India Office Library, London

Kazunobu MATSUDA

in collaboration with
Dr. G. M. Bongard-Levin

TOYO BUNKO · TOKYO · 1988

まえがき

昨年の10月から11月にかけて、東洋文庫の主宰する調査団の一員として、私はロンドンの旧インド省図書館 (India Office Library and Records, 現在は大英図書館の一部門) における文献調査に従事した。調査団は昭和61年度文部省科学研究費補助金 (海外学術調査種目) によって組織されたもので、研究課題は「スタイン蒐集敦煌文献現地総合調査」(研究代表者: 榎一雄) であった。調査はチベット語文献を中心に行われ、東洋文庫チベット研究委員会が現在刊行中の『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』(既刊10分冊) の完成に向けての最終調査がその主目的であったが、同図書館が所蔵するスタインとヘルンレ蒐集の梵語文献の調査も加えられ、専ら私がそれを担当した。本書は、その際に私によって発見・証定された中央アジア出土の梵文写本断簡類の中から、特に貴重な大乘の『大般涅槃経』の断簡を選んで、そのすべてを写真と共に紹介し、『涅槃経』研究の原典資料として提供することを目的としたものである。

話は昨年の春に遡る。私は京都に来られたソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所のG. M. ボンガード=レヴィン博士と『涅槃経』の中亜写本について意見を交換する機会を持った。博士は私に『涅槃経』のレニングラード写本の断簡六葉の研究を含む博士の新著を下さり、私は東京へ向かう博士に東洋文庫にあるスタイン・ヘルンレ写本のマイクロフィルムを見るように薦めた。そして私も、手許に取り寄せながらも放置したままになっていたマイクロフィルムからの焼付写真をあらためて調べてみた。するとその中にレニングラード写本第二葉の失われた部分を発見したのである。一葉が切断され右側はロンドンに、左側はレニングラードに保存されていたのである。私は直ちに私の発見を博士に伝えたが、博士も東洋文庫で写真を閲覧し、私と同じ発見をしたとのことで、その後、東京の国際仏教学研究社から出た博士の『涅槃経』研究の英語版にはこの発見が補遺として付け加えられている。しかし、その時の私には『涅槃経』の未知の断簡が他にもあるように思われた。東洋文庫にあるフィルムもスタイン・ヘルンレ写本を網羅したもののように思えなかった。実際に写本を調査する必要性を痛切に感じた。またこれをきっかけに博士と手紙をやりとりするうちに、博士から我々が今後発見するかもしれない新断簡について共同研究しようとの申し出を受けた。そしてこのような状況下で私はロンドンへ向かうことになった。調査期間中に私はスタインとヘルンレの全写本を閲覧したが、はからずも『涅槃経』の新たな断簡は、私の眼の前に次から次へと、あたかも写本の方から声を掛けて来るかのようにその姿を現わしたのであった。レニングラード写本第三、第六葉の失われた部分も新たに見出された。

本書には、A・B・Cの三種の写本に分かれる15葉を構成する21枚の『涅槃経』の断簡、A写本に属するが、別な經典の3枚、そしてA写本7枚、C写本2枚の未証定断簡9枚の計33枚の断

簡を収めた。これらは本書において初めて学界に公開されるものである。さらに、渡辺海旭博士によって証定されているヘルンレ写本中の一葉も改めて本書に収録した。これはA写本に属するが、これまでは片面の写真しか公開されていなかった。

当初の予定では、断簡の写真とローマ字転写に加え、既証定断簡すべての対応漢訳、チベット語訳、和訳を出版する予定であったが、整理に時間がかかり、かつ出版を急いだため各写本の代表的断簡についてのみそれを行うに止めざるをえなかった。貴重な資料を私の許に秘蔵するよりも一刻も早く公表し研究に資すべきであると考えた次第である。どうかローマ字転写と写真の提示をもって今回は御容赦願いたい。

今回の調査と本書の出版にあたっては、メンバーに加わることを薦めて下さり、調査旅行中は御迷惑ばかりおかけした名古屋大学の山口瑞鳳教授、および出版を引受けて下さった東洋文庫当局にまずもってお礼申し上げたい。また五週間にわたる調査の間、常に私を励まし助言下さった東洋文庫チベット研究委員会の木村隆徳氏、東京大学の田中公明助手、東洋文庫チベット研究室の福田洋一氏にもお礼申し上げたい。特に福田洋一氏には調査の出発から本書の出版に至るまで様々にお世話いただいた。さらに早稲田大学の高崎直道教授、国際仏教学研究所の湯山明博士、徳島大学の戸田宏文教授からは『涅槃経』や中亜写本の取扱いについて種々御教示いただいた。

我々の調査はインド省図書館の十分な協力の下で行なわれた。写真撮影や専用の一室の提供など、我々に様々な便宜を計って下さった図書館当局の方々、さらに実際に作業を手伝って下さった図書館の方々に心からお礼申し上げたい。彼等の協力なくしては本書も生まれなかつたにちがいない。

本書に収めた写真については、調査期間中に私自身が撮影した写真をインド省図書館の正式許可を得て出版するものである。何分写真にはまったくの素人が撮ったものであるので、一部見苦しい点があることをお許しいただきたい。持参した機材の都合で大きな断簡は左右分けて撮らざるをえなかった。

なお、ボンガード＝レヴィン博士の申し出については、時間的都合から本書には間に合わなかったが、写本探索のきっかけを作って下さった博士に感謝するとともに、今後の共同研究への期待も込めて博士の名前を本書の英文タイトルページに留めた。

このように本書は多くの方々の協力に負っている。これらの方々へのお礼も込めて、今後は、本書では一部しか果たせなかつた各断簡の対応漢訳とチベット語訳の提示を含む、より完全なテキスト作成を自らの努めとしてゆきたいと思っている。

昭和62年11月25日

松田和信

* 本書は昭和61年度文部省科学研究費補助金〈海外学術調査〉による研究成果の一部である。

なお私はすでに次のような報告を公けにしている。

- (1) 「ロンドン・インド省図書館の一室から——スタイン・ヘルンレ中亞梵語写本を調査して——」
『大谷大学真宗総合研究所研究所報』No. 16, 1987年3月 pp. 13-15.
- (2) 「中央アジア出土『首楞嚴三昧經』梵文写本残葉——インド省図書館の知られざるヘルンレ・コレクション——」『仏教学セミナー』46号, 1987年10月 pp. 34-48.
- (3) “New Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the Stein / Hoernle Collection: A Preliminary Report”, *The Eastern Buddhist*, Vol. XX-2 (Autumn 1987), pp. 105-114.

Acknowledgements

In October of last year, I was sent to London by the Toyo Bunko (Oriental Library), Tokyo, as a member of a research team to study the Central Asian documents in the India Office Library and Records. My assignment was to examine the Sanskrit documents collected by M. A. Stein and A. F. R. Hoernle earlier in this century. In this book, with the permission of the India Office Library to use the photographs reproduced herein, I have published my findings related to the new Sanskrit fragments of the *Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra* which I discovered and identified at that time. Prior discovery of one folio of the *Mahāparinirvāṇasūtra* had been made from the Hoernle collection and a study of it was published by F. W. Thomas in 1916. These fragments, comprising three manuscript groups, also include sūtras other than the *Mahāparinirvāṇasūtra*, which I have identified as well.

Our research was undertaken with the full support of the India Office Library. Our work was greatly facilitated by Mr. B. C. Bloomfield, Mr. S. Green and Mr. M. O'Keefe of the Library Administrative Office who arranged for the photography services and for the exclusive use of a seminar room during our five-week tour of research. Throughout our stay, we received the constant assistance of Mr. Michael Maher, Miss Margaret Willson and Miss Kumiko Matsuoka who worked alongside with us. Without their help and cooperation our work would not have been possible and this book would never have seen publication.

I wish to acknowledge my debt of gratitude to Dr. G. M. Bongard-Levin of the Institute of Oriental Studies, The Academy of Sciences, Moscow, for his kind advice regarding the fragments of the *Mahāparinirvāṇasūtra* in Leningrad. I was later able to determine that the Leningrad and London fragments derived from the same manuscripts. It is in hope of future cooperation in this important area of study that I have named him as a collaborator on this work.

Also I wish to thank my friend, Mr. Wayne Yokoyama, for his assistance in preparation of the English portions of the manuscript, and for his advice on the book design.

November 25, 1987

Kazunobu Matsuda
Kyoto

目 次 (Table of Contents)

まえがき

Acknowledgements

略号 (List of Abbreviations)..... xi

参考文献 (Bibliography) xi

ローマ字転写について..... xiv

解題 (Introduction)

1. スタイン写本とヘルソレ写本..... 1

2. 『涅槃経』の諸文献 9

3. 新たな梵文断簡.....17

文献対照 (A Typical Sampling of the Fragments)

1. A写本 (A-3, A-4) 持律者について30

2. B写本 (B-2, B-3, B-4) 盛者必衰のことわり.....35

3. C写本 (C-4) 一闍提について45

A Guide for the English Reader.....53

A Chart of the Identified Fragments57

The Fragments Transcribed

1. Identified Fragments63

2. Unidentified Fragments75

Plates (I-XXIII)

略号 (List of Abbreviations)

- ABS **Aṣṭabuddhahasūtra*
- ABS (Ch. 1) 『八吉祥神呪経』支謙訳, 大正 No. 427 (卷14, pp. 72-73)
- ABS (Ch. 2) 『八陽神呪経』竺法護訳, 大正 No. 428 (卷14, pp. 73-74)
- ABS (Ch. 3) 『八部佛名経』瞿曇般若流支訳, 大正 No. 429 (卷14, pp. 74-75)
- ABS (Ch. 4) 『八吉祥経』僧伽婆羅訳, 大正 No. 430 (卷14, p. 75)
- ABS (Ch. 5) 『八佛名號経』闍那崛多訳, 大正 No. 431 (卷14, pp. 76-77)
- ABS (Tib. P) Tibetan Tr. of the ABS, Peking ed., No. 937 ('U 18a7-22a5)
- ABS (Tib. D) Tibetan Tr. of the ABS, sDe dge ed., No. 271 (Ya 17a3-21a8)
- MMPS *Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra*
- MMPS (Ch. 6) 『大般泥洹経』6卷 (「六卷泥洹経」) 法顕訳, 大正 No. 376 (卷12, pp. 858-899)
- MMPS (Ch. 40) 『大般涅槃経』40卷 (「北本」) 曇無讖訳, 大正 No. 374 (卷12, pp. 365-604)
- MMPS (Ch. 36) 『大般涅槃経』36卷 (「南本」) 大正 No. 375 (卷12, pp. 605-852)
- MMPS (Tib. P) Tibetan Tr. of the MMPS, Peking ed., No. 788 (Tu 1-156b8)
- MMPS (Tib. D) Tibetan Tr. of the MMPS, sDe dge ed., No. 120 (Tha 1-151a4)
- SVSS *Sarvavaipulyasaṃgrahasūtra*
- SVSS (Ch. 1) 『濟諸方等學経』竺法護訳, 大正 No. 274 (卷9, pp. 374-379)
- SVSS (Ch. 2) 『大乘方廣總持経』毘尼多流支訳, 大正 No. 275 (卷9, pp. 379-381)
- SVSS (Tib. P) Tibetan Tr. of the SVSS, Peking ed., No. 893 (Tshu 187a2-199a6)
- SVSS (Tib. D) Tibetan Tr. of the SVSS, sDe dge ed., No. 227 (Dza 177a3-188b7)

参考文献 (Bibliography)

- Bendall, C. (ed.)
(1897-1902) *Çikshāsamuccaya (Bibliotheca Buddhica I)*, Rep. Tokyo, 1977.
- Bongard-Levin, G. N.
(1986) *New Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra (Central Asian Manuscript Collection at Leningrad)*, Tokyo.
- Bongard-Levin, G. M. and Vorobyova-Desyatovskaya, M. I.
(1985) *Pamyatniki indiiskoi pismennosti iz Tsentralnoi Azii, I (=Bibliotheca Buddhica XXXIII)*, Moscow.
(1986) *Indian Texts from Central Asia (Leningrad Manuscript Collection)*, Tokyo.
- Conze, E.
(1950) "Preliminary Note on a Prajñāpāramitā-Manuscript," *Journal of the Royal Asiatic Society (=JRAS)* 1950, pp. 32-36.
- Goshima, K.
(1983) *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama*, Kyoto.

Hoernle, A. F. R.

(1893-1912) *The Bower Manuscript*, 3 vols., Calcutta.

(1893) "Weber Manuscripts—Another Collection of Ancient Manuscripts from Central Asia," *Journal of the Asiatic Society of Bengal* (=JASB), vol. LXII, part I, pp. 1-40.

(1897) "Three Further Collections of Ancient Manuscripts from Central Asia," JASB, vol. LXVI, part I-4, pp. 1-48.

(1899) "A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia: Part I," Extra-Number to JASB 1899, xxxii+110 pp.

(1901) "A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia: Part II," Extra-Number 1 to JASB 1901, pp. 1-55.

(1901a) "Facsimile Reproduction of Weber Mss., Part IX and Macartney Mss. Set I with Roman Transliteration and Indexes," Extra-Number 1 to JASB 1901, Appendix, pp. 1-31.

(1916) *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*, vol. I, Oxford.

Johnston, E. H. (ed.)

(1950) *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna.

Poussin, L. de la V.

(1911-3) "Documents Sanscrits de la Seconde Collection M. A. Stein," *JRAS* 1911, pp. 759-777, pp. 1063-1079, 1912, pp. 355-377, 1913, pp. 569-580.

(1913) "Nouveaux Fragments de la Collection Stein," *JRAS* 1913, pp. 843-855.

Sander, L.

(1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*, Wiesbaden.

(1983) "Buddhist Sanskrit Manuscripts from Chinese Turkestan: Eighty Years of Research Work," *Prajñā-Bharati* 1983, pp. 1-18.

(1986) "Brāhmī Scripts on the Eastern Silk Road," *Studien zur Indologie und Iranistik*, Heft 11/12, pp. 159-192.

Stein, M. A.

(1907) *Ancient Khotan*, 2 vols., Oxford.

(1921) *Serindia*, 5 vols., Oxford.

(1928) *Inner Most Asia*, 4 vols., Oxford.

Toda, H.

(1981) *Saddharmapūṇḍarikasūtra: Central Asian Manuscripts*, Tokushima.

Yuyama, A.

(1981) *Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra*, I. *Koyasan Manuscript*, Tokyo.

井ノ口泰淳

(1975) 「出土仏典の種々相」(『アジア仏教史・中国篇V』(校成出版社)所収, pp. 199-274)

宇井伯壽

(1959) 『宝性論研究』(岩波書店)

- 金子芳夫
 (1986-7) 「チベット文大般涅槃経テキスト (I-1)」(『中央学術研究所紀要』第15号, pp. 28-49)
 「同 (I-2)」(同第16号, pp. 3-26)
- 久野芳隆
 (1938) 「西域出土佛教梵本とその聖典史論上の地位 (上)——大宝積経と雑阿含経の原典——」
 (『仏教研究』第2巻第3号)
- 真田有美
 (1963) 「スタイン氏将来中央アジア梵文仏典資料について」(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』
 第2集, pp. 16-26)
- 高楠順次郎
 (1917) 「宝性院所蔵の梵本」(『高野山時報』第82号, pp. 14-16)
- 高崎直道
 (1974) 『如来蔵思想の形成』(春秋社)
 (1987) 「大乘の大般涅槃経梵文断簡について——ボンガード=レヴィン教授の近業によせ
 て——」(『仏教学』22号, pp. 1-20)
- 塚本啓祥
 (1987) 「梵文法華経写本の研究」(『法華文化研究』13号, pp. 39-106)
- 戸田宏文
 (1979) 「梵文法華経写本研究ノート」(『印度学仏教学研究』第27巻2号, pp. 926-921)
- 平川 彰
 (1962) 「ヨーロッパの中央アジア仏教写本」(『印度学仏教学研究』第10巻1号, pp. 314-323)
- 布施浩岳
 (1942) 『涅槃宗の研究』前篇 (叢文閣)
- 本田義英
 (1949) 『西域出土梵本法華経』(梵本法華経刊行会, 京都)
- 松本史朗
 (1986) 「縁起について——私の如来蔵思想批判——」(『駒大沢学仏教学部論集』第17号,
 pp. 437-494)
 (1986 a) 「如来蔵思想は仏教にあらず」(『印度学仏教学研究』第35巻1号, pp. 375-370)
- 水谷幸正
 (1960) 「大乘涅槃経經典群にあらわれたる危機思想」(『仏教大学研究紀要』第37号, pp. 19-46)
 (1961) 「一闍提攷」(『仏教大学研究紀要』第40号, pp. 63-107)
- 山田龍城
 (1959) 『梵語仏典の諸文献』(平楽寺書店)
- 湯山 明
 (1984) 「中央アジアの梵語仏典」(『東洋学術研究』第23巻1号, pp. 68-92)
- 芳村修基
 (1974) 『インド大乘仏教思想研究』(百華苑)
- 渡辺海旭
 (1909) 「大般涅槃経梵文断片」(『宗教界』第5巻3号, 『壺月全集』上巻所収, pp. 570-585)

ローマ字転写について

1. 本書において取り上げた断簡34枚の中で、証定された断簡25枚については、「一覧表 (A Chart of the Identified Fragments)」を作成し、各断簡が一葉のどの部分に相当するかを示した。
2. 同一葉に属する複数の断簡については、「一覧表」に沿って、一葉単位でローマ字転写した。
3. 未証定断簡は表 (Recto) 裏 (Verso) 不明のため、任意の面を仮に a 面, b 面とした。
4. 「文献対照」に取り上げた断簡は巻末の「ローマ字転写 (The Fragments Transcribed)」には含まれていない。「文献対照」の方を見ていただきたい。
5. ローマ字転写には次の記号を用いた。
〔 〕 破損した文字 () 復元・想定された文字 + 失われた文字 .. 判読不能文字
・ 判読不能の文字要素 /// 写本の破れ目 * Virāma ○ 綴じ穴 (!) Sic

解 題

1. スタイン写本とヘルンレ写本

前世紀の終りから今世紀の初頭にかけて、各国の探検隊は競って中央アジアへ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘し、さまざまな言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰った。¹⁾ その中で、イギリスのスタイン (M. A. Stein, 1862-1943) の三次にわたる中央アジア探検の齎した文献類は、有名な敦煌文書を含んで世界に一大センセーションを巻き起こした。

スタイン蒐集文献のうち、主として漢文、ウイグル語、ソグド語文献は大英博物館 (British Museum) に、梵語、チベット語、コータン語、クッチャ語 (トカラ語B) 文献はインド省図書館 (India Office Library and Records) に分散して収められたが、1972年に大英博物館から大英図書館 (British Library) が独立したのに伴い、博物館のスタイン文献は大英図書館の東洋部 (Department of Oriental Manuscripts and Printed Books) に移管され、現在は博物館から少し離れた東洋部の建物に移されている。従って、有名な敦煌の漢文文献も現在はこちらにある。一方、インド省図書館も、1982年になってイギリス外務省の管轄を離れ、大英図書館の一部門に組み入れられたので、保存されている場所は異なるが、形式上は現在すべてのスタイン蒐集文献が大英図書館所蔵ということになっている。なお博物館の北に現在建設中の大英図書館本部が完成する1992年には、東洋部もインド省図書館もその中に移るとのことであるので、ゆくゆくはスタイン蒐集文献は一ヶ所に集まることになる。

ところで、遺跡を掘り返したのは正規の探検隊だけではなかった。スタインの探検と前後して、イギリスのインド学者ヘルンレ (A. F. R. Hoernle, 1841-1918) はインドにあって、さまざまなルートを通じて中央アジア出土の古文献を蒐集しつつあった。ヘルンレ蒐集の文献は、そのほとんどが土地の人間が金目あてに掘り出し、商人や駐在領事等を通して最終的にヘルンレの許に届けられたものである。これらは梵文、コータン語、クッチャ語文献が主で、その大部分はインド省図書館に保存されている。

これらのコレクションは、いかなる言語の文献であってもかけがえのないものであるが、特に仏教文献学にとっては、梵文写本の持つ価値は大きい。ほとんどが断簡で、それも一葉が完全に回収されるものは数えるほどしかないが、たとえわずかな断簡であっても、すでに失われ

1) 中央アジア出土文献の中で、特に梵語文献については、井ノ口泰淳 (1975)、湯山明 (1984)、Sander (1983) に要領良くまとめられている。また、あまり知られていないレニングラードの写本については、Bongard-Levin & Vorobyova-Desyatovskaya (1986) 参照。

た原典の一部とあれば、それが持つ意味は決して小さくない。

インド省図書館のスタイン写本 インド省図書館では、スタイン・コレクションとヘルンレ・コレクションのうち、梵語、コータン語、クッチャ語写本がひとまとめにされて保存されている。またこれらは一応、整理されたものと半整理状のものに分けることができる。前者は、写本断簡を一枚ないし十数枚づつ、35 cm×45 cm 程度の大きさのガラスあるいはアクリルのプレートに収めて、さらにそのプレートを数枚ないし数十枚単位で48個の木箱に収めて保存されている。後者は、写本断簡を数枚づつビニールケースに入れて束ね、2個のダンボール箱に入れたもの、さらに大型の断簡で、横長のペーパーホルダーに収めたものである。48個の木箱の写本については、梵文写本とコータン語写本が1から45までの番号を付した45個の木箱に収められ、さらに45個の木箱とは別にクッチャ語写本が3つの木箱に収められている。コータン語とクッチャ語写本については本書では触れないが、これらはすべて整理されて木箱に収められているので、半整理状のものは梵文写本だけを含んでいる。

番号の付いた45個の木箱のうち、Box 1-13, Box 15-22, Box 35-40 の計27箱にはコータン語写本を収めている。従って、残り18箱がスタインとヘルンレの梵文写本コレクションということになるが、この中でスタイン写本は次の7箱である。

- Box 30: Plate I~Plate V
- Box 31: Plate VI~Plate X
- Box 32: Plate XI~Plate XIV
- Box 41: Plate SS. 1~Plate SS. 25
- Box 42: Plate SS. 26~Plate SS. 50
- Box 43: Plate SS. 51~Plate SS. 70
- Box 45: Plate SS. 71~Plate SS. 115

Box 30, 31, 32 の三箱は14枚のプレートを含み、敦煌の藏経洞で発見された貝葉本『一万八千頌般若』(Ch. 0079a) の断簡69葉を収める。この写本についてはコンゼが調査しているが、ギルギット写本の大乗系典籍に特有の丸形グプタ文字と全く同一書体で書かれた注目すべき写本である²⁾。Box 41, 42, 43, 45 の四箱には、SS. (Stein Sanskrit) 1 から SS.115 の番号のついた115枚のプレートを収める。これには種々雑多な写本断簡が含まれる。また、一葉以外すべて紙本である³⁾。本書で取り上げる『大乘涅槃経』の断簡でスタイン写本に属するものはこ

2) Conze (1950).

3) 唯一の貝葉写本の断簡 (Ch.0079b) は、Box 41 の Plate SS.1 に収められている。Ch. の番号が付けられているので、敦煌の藏経洞から出たものである。Stein (1921) vol. III, p. 1450 参照。この一葉は Poussin (1911-3) pp. 1077-1079 に片面の写真付きでローマ字転写されている。なお、両面の写真は Stein (1921) vol. IV, Plate CXLII に出ている。プサンには証定できていないが、

の中から見い出された。なお、SS. 113 から SS. 115 の三枚のプレートは、その『涅槃経』の断簡を取り出し、私が新たに作成したものである。これについては後で触れる。従って私が調査する以前には、SS. 112 までのプレートがあったわけである。スタイン写本には、これ以外にペーパーホルダーに収められたものがあるが、私の調べた限りでは『法華経』の断簡二葉⁴⁾だけである。インド省図書館にあるスタイン写本はこれだけで、次に述べるヘルンレ写本に比べると、以外に少ない。

インド省図書館のヘルンレ写本 ヘルンレのもとに届けられた写本のうち、その初期、恐らく1900年以前に蒐集された写本はヘルンレ写本とは呼ばれず、写本の所有者、あるいは届けた人の名前を取ってパワー (Bower) 写本、ウェーバー (Weber) 写本、マッカートニー (Macartney) 写本、ゴッドフレー (Godfrey) 写本などと呼ばれ⁵⁾、ヘルンレによる調査終了後、オックスフォード大学のボドリアン図書館 (Bodleian Library) と大英図書館の東洋部に移されているが、これらは量的には多くない。ここで取り上げるヘルンレ写本とは、恐らく1900年以降に蒐集され、最後までヘルンレの手許に残されたものを呼び、これらの写本はすべてインド省図書館に保存されている⁷⁾。

インド省図書館でのヘルンレ写本は、木箱に入った整理済みのもの、および半整理状のものよりなるが、まず45個の木箱からコータン語写本27箱とスタイン写本7箱を除いた次の11箱がヘルンレ写本である。

- Box 14: Plate No. 1~8, 8枚のプレートに30葉の断簡。
 - Box 23: Plate No. 9~17, 9枚のプレートに41葉の断簡。
 - Box 24: Plate No. 18~26, 9枚のプレートに114葉の断簡。
 - Box 25: Plate No. 27~31, 5枚のプレートに33葉の断簡。
-
- Box 28: Plate P. 1~P. 9, 9枚のプレートにヘルンレ既出版断簡。
 - Box 29: Plate P. I~P. II, 2枚のプレートに『法華経』カシュガル本4葉。

これは『宝積経』「弥勒菩薩所問会第四十二」の断簡である (大正 vol. 11, 629a-b)。これに付いている葉番号をブサンは一応292と読んでいるが、これによっても、この断簡は「弥勒菩薩所問会」の単独經典の一部ではなく巨大な『宝積経』の一部である可能性が高い。貝葉本、つまりインドから輸入されたものなので、『宝積経』の成立を考える上でも重要な断簡である。

- 4) Kha. i. 24 の二葉。この二葉は本田義英 (1949) pp. 1-2 に写真が出ているが、後述の東洋文庫にあるマイクロフィルムには写っていない。ローマ字転写は Toda (1981) pp. 265-268。
- 5) Hoernle (1893-1912) (1893) (1897) (1899) (1901) (1901a)。ヘルンレは、これらの写本を詳しく紹介しているが、この中には『涅槃経』の断簡は存在しない。
- 6) マッカートニー写本の一部は大英博物館内の大英図書館展示室にギルギット写本などと共に展示されている。
- 7) インド省図書館のヘルンレ写本の中にもマッカートニーによって届けられたものが沢山あるが、それらはマッカートニー写本とは呼ばないで、あくまでヘルンレ写本と呼ぶ。間違えないようにしていただきたい。

- Box 26: Plate 2a~2i, 計9枚のプレートに『般若経』断簡。
- Box 27: Plate 2j~2l, 計3枚のプレートに『般若経』断簡 (Box 26の続き)
Plate 3a~3c, 4a~4c, 6枚のプレートに『法華経』の断簡。
- Box 33, 34: プレート数不明, 『般若経』の巨大な断簡と破片。
- Box 44: Plate SH. 1~SH. 22, 内容不明。

箱の番号もばらばらで、プレート番号も箱ごとにまちまちであるが、上記のように、これらは一応三つのグループに分けることができる。まず、Box 14 から Box 25 の四箱に含まれる31枚のプレートは、連続した番号が付けられ、正形グプタ文字 (Upright Gupta Brāhmi) で書かれた大小約 200 葉の断簡を収める。この四箱に収められた断簡は、ヘルンレ写本中の白眉とでも言えるもので、数々の重要な断簡を含んでいる。次の Box 28, 29 の二箱には、後で触れるが、各国の研究者を動員して解読がなされ、ヘルンレによって編集、出版された断簡が収められている。第三のグループ、Box 26 から Box 44 の五箱の写本については、いずれも能書体グプタ文字 (Calligraphic Upright Gupta Brāhmi) で書かれた、小さな破片から、巨大なものに至る、恐らく 200 葉以上の断簡よりなり、Box 44 に入っている写本は内容不明であるが、それ以外の箱のプレートには『般若経』あるいは『法華経』とのラベルが貼られている。このうち『法華経』については、湯山明博士によってフィルムが将来され、戸田宏文教授によってテキストが発表されたが、他の部分については、恐らく研究されていないのではないかとと思われる。ただ、能書体グプタ文字の写本については、今回の調査は十分でなく、遺憾ながら、プレート数さえ不明な箱があることをおことわりしておきたい。¹⁰⁾

さらにヘルンレ写本には、二つのダンボール箱および若干のペーパーホルダーに入った半整理状の断簡がある。ダンボール箱には、数葉ずつの断簡を入れた大学ノート大のビニールケースが束ねられて入っている。最初の箱には、Fol. 116 から Fol. 160 という番号の付いた45ケースが、第二の箱には、Fol. 161 から Fol. 208 という番号の付いた48ケースが収められている。これが Fol. 116 から始まっているのは、それ以前の番号の付いたケースがあるのではなく、後述のマイクロフィルムのフレーム番号を不完全な形で引き摺っているからにすぎない。これらの断簡は、全体では恐らく 300 葉はあろうが、正形グプタ文字、能書体グプタ文字、さらに斜形グプタ文字 (Slanting Gupta Brāhmi) で書かれた断簡を含み、ヘルンレ写本中の斜形グプタ文字によるもの、つまりトルファン写本のほとんどはこの中に含まれている。またペーパーホルダーには、プレートに収まらないような、幅が 50 cm 以上はあるような巨大な断

8) Hoernle (1916). 後述「カタログと写本の公刊」参照。

9) Toda (1981) pp. 299-317, 戸田宏文 (1979)。

10) Box 33, 34 については、私の調査ノートにプレート数が記されていない。恐らく、一見しただけで、ありふれた『般若経』の断簡であることが分かったので、ろくにノートも取らないまま、書庫へ返却してしまったようである。

1. スタイン写本とヘルンレ写本

簡を収める。これは数は少ない。正形および能書体グプタ文字の両方の断簡があるが、私が見たところ、内容からこれらはいずれも『般若経』のようであった。なお、ヘルンレ写本はすべて紙本で、貝葉本は存在しない。

マイクロフィルム 東洋文庫には、インド省図書館のスタイン・ヘルンレ梵文写本コレクションのマイクロフィルムが将来¹¹⁾されている。これまでは、このマイクロフィルムは、インド省図書館のスタイン・ヘルンレ写本を網羅しているように思われて来たが、実際に写本を調査した結果、マイクロフィルムには種々の問題点があることが判明した。少し複雑になるが、この点について説明しておきたい。

まず、マイクロフィルムでは、212フレームの写本が裏表424コマのフィルムに収められ、1フレームには多いもので十数葉の写本断簡が写っている。またマイクロフィルムの最初には、収録写本のリストが付いている。リストは写本を収めるフレーム番号を挙げているが、1フレームは裏表2コマのフィルムに写っているので、フレーム番号を二倍したものが、探す写本のあるフィルムのコマ番号ということになる。そのうち、1から85、208から212フレームがスタイン写本で、これ以外はヘルンレ写本である。ただしヘルンレ写本部分にはコータン語文献も沢山紛れ込んでいる。このフィルムが作成されたのは1950年で、その当時、写本はまだプレートに入れられてはいなかった。フィルムは白い紙の上に並べた写本を直接撮影している。

このマイクロフィルムを現在のインド省図書館にある写本と照合すると、スタイン写本については、写本はほぼフィルムのフレームの順序で、Box 41のPlate SS.1からBox 45のPlate SS.87に収められている。ヘルンレ写本については、紛れ込んだコータン語文献は分離されてコータン語の木箱に、梵語文献は、ヘルンレ既出版分がプレートに入れられてBox 28, 29に収められ、他はまだ二つのダンボール箱およびペーパーホルダーに入れられたままである。ダンボール箱の写本は、マイクロフィルムのフレーム番号に沿ってビニールケースに収められている。そして奇妙なことにマイクロフィルムに写っている写本はこれですべてである。スタイン写本では、Box 30-32の『一万八千頌般若』、Box 45のPlate SS.88以降の写本、およびペーパーホルダーの写本、ヘルンレ写本では、Box 28, 29以外の木箱の写本は、マイクロフィルムには全く写っていない。図書館の説明では、マイクロフィルム未収のスタイン写本のうち、Box 45のSS.88以降のプレートが作成されたのは数年前のことで、それまでは未整理文献として仕舞い込まれたままになっていたとのことであった。しかし、ヘルンレ写本については、マイクロフィルム未収木箱のプレートは見るからに古いもので、フィルム作

11) 東洋文庫マイクロフィルム『旧印度省図書館蔵梵文断片』(V-5-E-5)。なお、山田龍城(1959) p. 5、および井ノ口泰淳(1975) p. 230では、このマイクロフィルムはすべてスタイン写本であるかのように書かれているが、正確ではない。

成当時はすでにそれがあつたはずであるが、何故フィルムに写っていないのか分からない。フィルム撮影時には、これらの木箱のプレートはまとめてだれかに貸し出されていたのであろうか。インド省図書館では、マイクロフィルムのオリジナル・フィルムはすでに廃棄され、残念ながら今は当時の事情を知る人もいない。ヘルンレ写本については、結局二つのダンボール箱、若干のペーパーホルダー、および既出版の木箱の写本しかマイクロフィルムには写っていなかったことになる。マイクロフィルム未収分の写本、特に、Box 14, 23—25 の四箱に含まれる正形グプタ文字の写本断簡は、そのごく一部を除いて全く学界に紹介されておらず、¹²⁾ しかもその中には数々の重要な断簡が含まれている。本書に収めた『涅槃経』の断簡のうち、ヘルンレ写本に属するもののほとんどはこの中から見い出された。また『法華経』の断簡も多く見い出され、中には章末の奥付けを含んだものまであり、一目でそれと判る。しかしこれも今まで全く報告されていない。¹³⁾ 恐らくこれらは、ヘルンレの手を離れてから忘れられ、何らかの事情でマイクロフィルムにも収録されないまま、インド省図書館の奥深く眠り続けて来たのであろう。

大英図書館東洋部のスタイン写本 スタイン蒐集文献に含まれる梵語文献は、原則としてインド省図書館に収められたはずであるが、例外的にその一部は大英図書館の東洋部にも保存されている。東洋部では、スタイン梵語コレクションのうち、有名な『法華経』カンシュガル本の片割れなどは独立した番号 (Or. 9613) で登録されているが、それ以外の大部分の写本は Or. 8212 という登録番号でまとめられている。Or. 8212 は、例えば、敦煌の漢文文献が一括して Or. 8210 の番号で登録されているように、それ以外の様々な言語で書かれた雑多なスタイン中亜文献(ただし若干の漢文文献を含む)に一括して付けられた登録番号で、その内部はさらに細かい番号に分かれている。このうち1番 (Or. 8212/1) から195番 (Or. 8212/195) まではきれいに整理され、インド省図書館のフィルムとは別に、東洋文庫にもマイクロフィルムが来て¹⁴⁾ いる。この中、1番から73番、103、164、165、174番は梵文写本である。スタイン蒐集の梵文写本が Or. 8212 の中にも含まれていることは、不思議なことに、我国の梵文写本の研究者にはほとんど知られていない。¹⁵⁾ なお、Or. 8212 は195番に尽きるのではなく、私は東洋部でこれ

12) この中の写本で既発表のものは、私の知る限り、久野芳隆(1938)で紹介された「迦葉品」の断簡だけである。博士はこの断簡を F.W. Thomas から見せてもらったと言う (p. 71)。これは偈を含まない「迦葉品」の古形を伝える重要断簡であるが、博士は葉番号を文字に読み誤るという信じられないようなミスをしている。この断簡には三桁の葉番号があり、「迦葉品」の単独写本の一部であったとは思われない。注3で示した『宝積経』「弥勒菩薩所問会」の断簡と同様の問題にここでも留意せねばならない。

13) 調査期間中だけでも、正形グプタ文字で書かれた新たな断簡6枚をたやすく見つけることができた。この6枚は、本田義英(1949)にもまったく収録されていない。私は、これを写真に撮って持ち帰ったが、近々、戸田宏文教授によって出版される予定(『徳島大学教養部倫理学科紀要』XV, 1988)。

14) 東洋文庫マイクロフィルム『大英博物館蔵中亜文献』(V-5-E-6)。

15) 例えば、塚本啓祥(1987)にリストアップされている『法華経』のスタイン写本の中で、所在不明

の1927番まで閲覧することができた。このうち1361番から1927番は、ビニールケースに入れて束ねられただけの未整理文献ではあるが、多くの梵語文献を含んでいる。スタインの原番号のない小さな断簡が多いが、中にはほぼ原形をとどめているものもある。ただこれらの未整理部分については、東洋部でもまだマイクロフィルムは作成されていない。今回の調査は、インド省図書館の写本が主で、東洋部の写本は十分に調査できなかったが、私の見た限りでは、Or. 8212 には『涅槃経』の断簡は存在しないように思えた。なお、かつて平川彰博士が報告された大英博物館のスタイン写本は Or. 8212 に含まれる梵語文献のことである。¹⁶⁾

カタログと写本の公刊 スタイン写本については、ヘルンレを始めとする研究者の協力によってカタログが作成され、探検報告書に掲載されている。¹⁷⁾ このカタログは、スタイン写本を見る時に多大の便宜を与えてくれる。一方ヘルンレは、自ら蒐集・研究した写本のうち、パワー写本、ウェーバー写本、マッカートニー写本、ゴッドフリー写本については、詳細を発表しているが、¹⁸⁾ 肝腎のヘルンレ写本自体については目録を公表しなかった。しかしヘルンレは、ヨーロッパ各国の研究者の協力を得て、スタインの持ち返った写本、およびヘルンレ写本の公刊に着手した。それが1916年に出た『東トルキスタン出土仏教文献写本』の第一巻である。¹⁹⁾ ヘルンレは続いて第二巻に取り掛かり、その原稿もほぼ完成したが、ヘルンレの死によって、残念ながら今日に至るまで出版されていない。インド省図書館には、その原稿が、他のヘルンレのノートと共に Mss. EUR. D. 723 という登録番号で保存されている。ヘルンレは、第二巻では *An Ancient Medical MS from Eastern Turkestan* というタイトルでラヴィグプタの医学書 *Siddhasāra* のコータン語訳写本 (Ch. ii. 003) を出版するつもりであった。²⁰⁾ ヘルンレにもう少し時間が残っていたなら、マイクロフィルム未収の数々の重要な断簡も出版されていたかもしれない。²¹⁾ あるいは、もしヘルンレが自分の写本についてもカタログを公表していたなら、状況

とされる Kha. i. 66, Kha. i. 74b, Kha. i. 213, Kha. i. 303b, F. xii. 9 などはこの中に含まれ、しかも73番までにあるので、東洋文庫のマイクロフィルムから見る事ができる。

16) 平川彰 (1962) pp. 319-320 参照。なお博士が「サンスクリットの般若経七十四種」(p. 319 下) と述べるのは正確ではない。「般若経を含む七十四種 (正確には七十三種)」と言うべきである。これは Or. 8212/1-73 のことである。博士はインド省図書館の写本のマイクロフィルムを東京大学の印度哲学研究室に将来したと言うが (p. 320 下)、斎藤明氏に探していただいたところ、現在も確かに研究室にあるとのことであった。これは東洋文庫にあるものと同一フィルムである。

17) 第1次探検 (1900-1901) の文献については、Stein (1907) vol. I, pp. 288-303, 438-442, 第2次探検 (1906-1908) の文献については、Stein (1921) vol. III, pp. 1432-1459, 第3次探検 (1913-1916) の文献については、Stein (1928) vol. I, pp. 1017-1031 参照。

18) 注5参照。

19) Hoernle (1916). 前述のように、この中に出版された写本のうち、ヘルンレ写本に属するものの大部分は Box 28, 29 に収められ、マイクロフィルムにも写っている。

20) この写本は、その後別人によって出版されたので、原稿はもはや歴史的価値しかないのかもしれない。cf. R. E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khotan* (Tokyo, 1979) pp. 46-48.

21) ヘルンレ写本はごく一部が出版されただけであるが、スタイン写本については、例えば、Poussin

は違っていたかもしれない。実際に写本を見るまで、我々は、多くの写本がマイクロフィルム未収のまま眠っていることなど、まったく知らなかったのであるから。しかもそれは、実にスタイン写本よりも多かったのである。

スタイン写本の行方 このようにヘルンレ写本にはカタログもないが、しかしその所在ははっきりしている。ではスタイン写本については、報告書所載のカタログに出ているものはすべて現存しているのだろうか。インド省図書館にあるものと大英図書館東洋部の Or. 8212 等に含まれるものを併せれば、カタログ所載写本を網羅することになるのだろうか。インド省図書館のスタイン写本については、マイクロフィルムに付いているリストがあり、また Or. 8212 の 195 番までについては東洋部に謄写版刷りの目録がある²²⁾ので、如何なる文献が含まれるかは一目瞭然である。しかしこれがスタイン写本のすべてではない。これ以外にも、インド省図書館のスタイン写本では、前述のようにマイクロフィルム未収の写本があり、東洋部でもマイクロフィルムが作成されていない未整理部分の断簡がある。インド省図書館の写本については、書庫に入って確認したが、私の調査したもの以外には存在しない。ところが、これと東洋部で私が閲覧した写本を足しても、カタログ所載の全写本に達しない。なお不明写本がある。この部分は一体どこへ行ってしまったのであろうか。私が見ていない Or. 8212 の未整理部分にあるのであろうか。あるいは、すでに失われてしまったのであろうか。残念ながら、現時点ではその辺の事情は不明である。

コレクションの内容 中央アジア出土の梵文写本は、その出土地によって大きく二種に分けることができる。タクラマカン砂漠を挟んで北側、即ち天山南路のトルファン近辺で蒐集されたものと、南側、つまり西域南道のコータン近辺で蒐集されたものである。これは、出土写本の書体からも区別され、前者は斜形グプタ文字、後者は正形グプタ文字および能書体グプタ文字で書かれている²³⁾。ただし例外も多く、特にインドからその土地へ輸入されたものやごく古い時代の写本はこの限りではない。また書かれている内容からも、前者は小乗系典籍、つまり阿含・律が主で、後者は大乘経典が主であることが分かっている。

スタイン・ヘルンレ両コレクションの写本群の内容については、スタイン写本は西域南道で蒐集された大乘経典、つまり正形グプタ文字および能書体グプタ文字で書かれた写本のみで、

(1911-3) (1913) などにある程度は出版されている。

22) *Preliminary List of Manuscripts in Languages of Central Asia and Sanskrit from the Collections Made by Sir M. Aurel Stein, K. C. I. E.* この目録の複写に際し、東洋部のブラウン女史の手を煩わせた。

23) 中央アジア写本に見られる文字の概略と変遷を知るには、Sander (1968) の要約とも言える Sander (1986) が、多くの図版を用いて最も分かり易い。ただし、書体名はまったく新たに命名されている。

2. 『涅槃經』の諸文献

ヘルンレ写本も西域南道の大乗經典が主であるが、ヘルンレ写本にはスタイン写本にはない斜形グプタ文字で書かれたトルファン写本もかなり含まれている。スタイン・ヘルンレ写本は、他のコレクション、例えばドイツ探検隊将来のコレクションに比べると量的には少ないかもしれない。しかし、主として西域南道で蒐集されたこともあって、スタイン・ヘルンレ写本には多くの大乗經典が含まれている。しかも多くの断簡が研究者を待ちつつ眠っているのである。ただし、現在のインド省図書館にはコレクションについての目録もカードもないので、来館者が個々の必要とする写本断簡を請求しても、それがどの箱のどのプレートにあるかの検索は困難である。コレクションを順番に見てゆくより外はないのである。なお私は、インド省図書館にあるスタイン・ヘルンレの全写本の新たなマイクロフィルムの作成を依頼しておいたので、そのうちに東洋文庫にも届くはずである。いずれ日本においても、全写本を自由に見ることができるようになる。

2. 『涅槃經』の諸文献

『大般涅槃經 (*Mahāparinirvāṇasūtra*)』と呼ばれる經典は、大きく分けて二種知られている。ひとつは『長阿含 (*Dirgha-āgama*)』の一部を構成する小乗の『涅槃經』、もうひとつは、同じ仏陀最後の旅路を題材にしながらも、仏陀の死から翻って仏身常住、悉有仏性、闍提成仏へと展開する大乗のそれである。本書で扱う『涅槃經』は、後者、大乗の『涅槃經』を指している。『涅槃經』を彩る大胆な諸思想——一見して非仏教的な——について、それを仏教史上に打ち立てられた高度な思想的帰結と見て高く評価するか、あるいは本来の仏教が持つ批判的精神を捨て、インド的融和主義の土壌に埋没した思想的墮落の極と見て断罪するか、『涅槃經』に対する評価は現在大きく揺れているように見える²⁴⁾。果たして『涅槃經』ひいては如来蔵思想は仏教の精華なのか、仏教とは無縁のものなのか。遺憾ながら現在の私にはそれはまだ判断できない。本書ではシルクロードの砂の中から蘇った『涅槃經』にかんする新知見を紹介するに止めねばならない。まず、既に知られている文献をまとめておく。

漢訳 西暦417年から418年にかけて、東晋の建康において法顕はインドから持ち帰った『涅槃經』の梵本を仏陀跋陀羅と共に『大般泥洹經』六卷(大正 No. 376)として訳した。これが「六卷泥洹經」と言われるものである。またほぼ同じ頃、西暦414年から421年にかけて、北涼の姑

24) 肯定的評価は枚挙に暇がないので、ここでは否定的評価の代表として、直接『涅槃經』に対するものではないが、松本史朗(1986)(1986a)を挙げたい。松本氏の論文は、仏教という批判的精神を相手にしていても、我々の研究が如何に大勢に流され易いものであるかを教えてくれる。

蔵において曇無讖は『大般涅槃經』四十卷（大正 No. 374）を訳出した。これは次の「南本」に対して「北本」と言われる。「北本」のうち前十巻が「六卷泥洹經」に対応し、十一巻以降は「北本」における増広である。この増広部分は、果たして背後に梵文原典を持つのか、中国における創作なのかははっきりしない。「北本」全四十巻の伝訳については、種々の経緯が伝えられているがここでは触れない。²⁵⁾「北本」は江南に伝えられ、慧敞、慧観、謝靈運によって「六卷泥洹經」に基づいて章構成が改められ、字句を修正して三十六巻本とされる。これが「南本」（大正 No. 375）である。またこれらとは別に仏陀入滅後の荼毘や遺骨分配を記した『大般涅槃經後分』二巻（大正 No. 377）があるが、これは明らかに中国における創作である。三種の漢訳のうち、「南本」は中国における再編集本であるので、本書では、漢訳については「六卷泥洹經」（略号：Ch. 6）と「北本」（略号：Ch. 40）を用いる。

チベット語訳 『涅槃經』のチベット語訳については、梵本から訳されたもの（北京版 No. 788, デルゲ版 No. 120）と、漢訳「北本」および『大般涅槃經後分』から重訳されたもの（北京版 No. 787, デルゲ版 No. 119）との二種がある。梵本翻訳本は九世紀初頭²⁶⁾に、重訳本は十一世紀に訳されている。梵本翻訳本は、漢訳で言うと「六卷泥洹經」の全体、つまり「北本」前十巻と対応する。本書で言うチベット語訳とは梵本翻訳本のみを指し、複雑になるので重訳本については考慮しないことにする。頁数は北京版（Tib. P）とデルゲ版（Tib. D）の該当部分を示す。

既証定の梵文断簡 1908年、我国の渡辺海旭博士は、イギリスのトーマス（F. W. Thomas）が調査したヘルンレ写本に含まれる大乘經典の断簡十一葉の中から、143. SA. 4 という登録番号の付いた、ほぼ原形を留める一葉を『涅槃經』の「如来性品」に証定した。もはや地上からは失われてしまったと思われていた原典の一部が再び姿を現わした一瞬である。その翌年、渡辺博士はこの一葉のローマ字転写を漢訳と共に発表した²⁸⁾が、その中で博士は「宛も雲間に足跡を没した金龍の鱗片が、僅に一枚地上に落ちた様なもの²⁹⁾」と、おおいなる興奮をもってこの

25) 「北本」伝訳の事情、および現存しない智猛訳などについては、布施浩岳（1942），pp. 1-191 に詳しい。

26) Yuyama (1981) pp. 11-12 参照。Jinamitra, Jñānagarbha, Devacandra によって訳されたもので、13巻よりなる。『デンカルマ』（824年成立，cf. 山口瑞鳳「デンカルマ824年成立説」『成田山仏教研究所紀要』第9号，pp. 1-61, 1985）に記載されている。「芳村目録」No. 79, 「ラルー目録」No. 80。なお、金子芳夫氏がチベット語訳『涅槃經』の校訂テキストを出版し始めている。金子芳夫（1986-7）。金子氏は、モンゴル語訳も資料として用いている。なお、氏は梵本翻訳本を「全13章の構成」と言うが（pt. I, p. 29），13巻の誤り。

27) 『大谷大学図書館蔵西藏大蔵経甘殊爾勘同目録』（京都，1931）p. 287, 注2参照。訳者にアティージャ（Atiśa）の同時代人が加わっている。

28) 渡辺海旭（1909）。

29) *ibid.*, p. 573.

2. 『涅槃經』の諸文献

「珍中の珍」たる一葉を賛嘆している。さらに渡辺博士は『涅槃經』以外の断簡も証定したが、³⁰⁾ それを受け、トーマスはヘルンレに協力して十一葉すべてのテキストを1916年に出版した。

しかし、原典の発見はこれに尽きたのではなかった。次の断簡は意外な所から現われた。トーマスがヘルンレ写本十一葉を出版した同じ1916年、高野山宝寿院の聖教を調査していた高楠順次郎博士は、元宝性院門跡所蔵の文献中に、軸装された全く破損のない梵文写本の断簡一葉を見出した。³¹⁾ これは『涅槃經』「如来性品」の冒頭に証定される断簡であった。高楠博士は、断簡の写真を出版し、³²⁾ ローマ字転写を『大正大藏經』所収『涅槃經』「北本」の末尾に付け加えた(巻12, p. 604)。「高野山写本」の名で呼ばれるこの一葉は、その後は研究がされないままであったが、高楠博士の証定から70年近く経った1984年に湯山明博士によって詳細な研究が発表された。³³⁾

さらに次の重要な発見はレニングラードにあるペトロフスキー蒐集写本中から齎された。しかも一挙に六葉のまとまった断簡が発見される。レニングラード写本中に『涅槃經』の断簡が発見されたとのニュースは以前から断片的に伝えられ、いくつかの報告も発表されていたが、³⁴⁾ その詳細は長い間不明であった。そしてやっと1985年になって、ソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所のボンガード=レヴィン (G. M. Bongard-Levin) 博士は、前任者の仕事を引き継いで、³⁵⁾ 六葉すべてを写真と共に出版した。ただちに高崎直道博士はボンガード=レヴィン博士の研究を紹介し、この中の最後の第六葉について、漢訳とチベット語訳を対照させて破損箇所を復元し、³⁶⁾ テキストと和訳を発表した。なおこの六葉のうち、破損のないものは一葉だけで、他の五葉は一葉の半分程度のものから九割方残っているものまでさまざまである。

従って、本書に先立っては、『涅槃經』の断簡は全部で八葉知られていることになるが、八葉はすべて紙に書かれた写本である。また、書体、サイズ、行数からすると、八葉は三種の写本に分かれる。まず、渡辺博士が証定したヘルンレ写本 143. SA. 4 とレニングラード写本の第五葉以外の計六葉は同一写本から出たものである。そしてこの六葉に、これとは別な写本に

30) Hoernle (1916) pp. 85-138. 『涅槃經』については、pp. 93-97.

31) 高楠順次郎 (1917).

32) 『大日本史料』(東京帝国大学文学部史料編纂掛編集)第六編ノ十九, p. 608. 「高野山写本」は、この他にも種々の展覧会の図録等に写真が掲げられているようであるが、現在入手可能なものとして、『梵字貴重資料集成』図版編(東京美術, 1980) p. 20 を挙げるに止める。

33) Yuyama (1981). なお、ここまでで紹介した梵文資料については、山田龍城 (1959), p. 95 にまとめて紹介されている。

34) Bongard-Levin & Vorobyova-Desyatovskaya (1986) 所載 Tables の『涅槃經』の項に示される諸論文を参照していただきたい。私自身これらの論文のすべてを手許に持っているわけではないが、同じような報告が繰返しなされている。

35) Bongard-Levin & Vorobyova-Desyatovskaya (1985) pp. 37-64, Bongard-Levin (1986).

36) 高崎直道 (1987). なお、p. 7 に高崎博士が記すレニングラード写本六葉についての漢訳対応頁の行数は、ボンガード=レヴィン博士のものをそのまま用いているため、ほとんど間違っている。正確な行数は後述対応表参照。

属するレニングラード写本の第五葉を加えた七葉は、中央アジアの同一地点から出土したものである。レニングラード写本は、本書で紹介するインド省図書館のスタイン写本とヘルンレ写本にとって重要な意味を持つが、出土地や写本の分類など、詳しくは後で述べよう。次に、高野山写本一葉はこれらとは全く別な写本に属し、文字はギルギット写本のプロト・シャーラー文字 (Proto Śāradā = Gilgit / Bāmiyan Type II) に似た書体で書かれてはいるが、用紙の形状からすると、恐らく中国でインドあるいは中央アジアから来た写本の一部を臨写したもののようである。³⁷⁾ なお、これら三種の写本の年代については、確実なことは何も言えない。十世紀以前の写本であることは間違いないであろうが、果たして六世紀、七世紀に遡るかどうか、書体のみによる年代判定には常に危険がつきまとう。³⁸⁾

『宝性論』の引用 なお、写本によって回収される梵文とは別に、『宝性論』には『涅槃經』の比較的長い一節が引用され、さらに『涅槃經』の取意の文と見られるいくつかの文章が存在することが知られている。³⁹⁾ これは写本からの原文回収とは性格が異なるので、ここでは引用の存在があることを記すに止める。

梵文断簡の範囲と「北本」十一巻以降の存否 さて、すでに知られている梵文断簡八葉を『涅槃經』の内容順に並べて、漢訳とチベット語訳との対応箇所を示すと、第1表のようになる。

これを見れば明らかのように、八葉はすべて「六巻泥洹經」の範囲に収まっている。しかも「六巻泥洹經」の全体にわたって分散している。また『宝性論』の引用も「六巻泥洹經」の範囲を出ない。「六巻泥洹經」と「北本」の前十巻、およびチベット語訳の三者は対応し、梵文断簡もあるので、この部分がインド成立であることは間違いない。では、「北本」の十一巻以降がインド成立である可能性はあるのであろうか。この点にかんして、現在、二つの相反する資料が知られている。

芳村修基博士は、カマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 740-797) の『修習次第 (Bhāvanākrama)』

37) 私はまだ「高野山写本」の実物を見ていないが、写真と高楠順次郎 (1917) の記述からすると、この写本は裏表を剝がして軸装してあるとのことである。写本用紙の裏表が剝がれるとは不思議である。しかも左右の方向に剝がして、その剝がれ目は繋がっているらしい。これが本当なら剝がれた裏表の文字は逆向きになるはずであるが、写真では両面とも同方向を向いている。恐らく、この写本は細長の用紙を左右に分けて、裏表の文字を書いているのであろう。こんなことは、インド・中央アジア系写本ではありえない。私には、中国で作成されたと見るのが自然のように思えるが、一度実物を見てみたい。私の考えが正しいなら、弘法大師自身が書写したとの伝承に一つの根拠を与えるかもしれない。

38) Bongard-Levin (1986) p. xvii では、書体からレニングラード写本を6-7世紀のものとしている。えてして研究者は自分の研究対象の写本を古く見る傾向にあるが、それは研究者の単なる思い入れの所産のようである。書体からだけでは写本の確実な年代は決して判明しないと断言できる。

39) Johnston (1950) pp. 74, l. 20-75, l. 12. および、高崎直道 (1974) pp. 129-130, 133-136, 183, 注5, 宇井伯壽 (1959) pp. 332-336 参照。

第1表

	Chapter (Ch. 40)	MMPS (Tib. P)	MMPS (Tib. D)	MMPS (Ch. 40)	MMPS (Ch. 6)
Leningrad-1	寿命品	3a8-b7	3a2-3b6	366a13-b7	852b5-24
Leningrad-2	寿命品	13b4-14b2	13a3-13b7	369a16-b17	855c14-856a6
Leningrad-3	寿命品	20b5-21b3	20a3-20b7	371b21-c20	857c12-858a5
Leningrad-4	寿命品	24b5-25b1	24a3-24b7	373c22-374a19	859c8-860a5
Leningrad-5	金剛身/名字功德品	51a5-52a5	50b7-51b6	384c24-385a21	867c10-868a5
Koyasan Ms.	如来性品	53b8-54b3	53a7-54a3	385c12-386a6	868b21-c14
Hoernle Ms.	如来性品	142a7-143a4	137b5-138b2	422b6-c23	895a2-25
Leningrad-6	一切大衆所問品	156a1-b6	150a5-151a2	428a2-b12	899b8-c23

*表中、レニングラード写本六葉については、ボンガード=レヴィン博士の示す頁数ではなく、私が再確認した頁数を示した。

第二篇の翻訳の中で、次のようなカマラシーラの引用が『涅槃經』「北本」第三十一巻に相当すると指摘された。⁴⁰⁾

それ故に、聖なる『大般涅槃經 (*Mahāparinirvāṇasūtra)』の中にも、「諸声聞は如来の性 (rigs; *gotra) を見ない。三昧大なる故に、智慧小なる故に。諸菩薩は見るけれども、明瞭には〔見〕ない。智慧大なる故に。三昧小なる故に。如来はすべて見る。止 (śamatha) と観 (vipaśyanā) を備えている故に。」と説かれている。

芳村博士は、これが次のような「北本」巻三十一の一節に対応すると言う。

善男子。十住菩薩智慧力多、三昧力少。是故不得明見仏性。声聞縁覚三昧力多、智慧力少。以是因縁不見仏性。諸仏世尊定慧等故明見仏性了了無礙。MMPS (Ch. 40) 547a12-16.

確かに両者の意味内容は一致する。異なる点は、声聞と菩薩の項の順序が入れ替わっていること、菩薩が十住菩薩となっていることぐらいである。チベットで『修習次第』第二篇を書いたカマラシーラは、何らかのルートで漢訳「北本」の内容を知っていたかもしれないが、両者

40) 芳村修基 (1974) p. 381, 382, 注20。高崎博士も注意している。高崎直道 (1974) p. 183, 注2 参照。Second Bhāvanākrama, Peking ed., No. 5311, A 49a8-49b3, sDe dge ed., No. 3916 Ki 45a5-6, Goshima (1983) pp. 19-22. // de'i phyir 'phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo las kyang nyan thos rnam kyis ni bzhin gshegs pa'i rigs mi mthong ste / ting nge 'dsin gyi shas che ba'i phyir dang / shes rab chung ba'i phyir ro // byang chub sems dpa' rnam kyis ni mthong mod kyi mi gsal te / shes rab kyi shas che ba'i phyir dang / ting nge 'dsin chung ba'i phyir ro // de bzhin gshegs pas ni thams cad gzigs te / zhi gnas dang lhag mthong mtshungs par ldan pa'i phyir ro zhes bska' stsal te /

の文章の相違はその可能性を否定する⁴¹⁾。また、漢訳重訳チベット語訳の対応箇所と——十一世紀の翻訳であるから当然のことではあるが——『修習次第』第二篇のチベット語訳とは一致しない⁴²⁾。なお高崎直道博士も指摘するように、「北本」にある仏性の語が如来性となっている点⁴³⁾は注意せねばならない。『修習次第』第二篇はチベット語訳しかないので、その原語が何であったかはっきりとは分からないが、もし *tathāgatagotra* だったとすると、「六卷泥洹經」相当分には現われない語である。これは「六卷泥洹經」以降の思想的発展を物語っているのであるうか。しかし、これは同名經典からの引用かもしれないし、『涅槃經』は自らを称するとき、必ず *Mahāparinirvāṇam mahāsūtram* と言うように「大經 (*mahāsūtra*)」という語を付けるが(下の奥書参照)、ここでは単に *Mahāparinirvāṇasūtra* とされるのみである。この引用は短かく、「北本」十一卷以降からの引用例は、他のインド製の文献には全く見出されない。

一方、次のようなチベット語訳の奥書は、『涅槃經』が「六卷泥洹經」の範囲で終わっていることを示しているのかもしれない。高崎博士もこの奥書を訳されているが⁴⁴⁾、再び紹介しておく。

『大般涅槃大經 (*Mahāparinirvāṇam mahāsūtram*)』、一切の正法 (*saddharma*) の教説 (*pravacana*) の真髓 (*sāra*) となるもの。究竟論 (*uttarataṃtra*) の如く理解し難い法蔵。一途に如来蔵 (*tathāgatarāgḥa*) を説く經典。二万五千章あるうちの「天、人、アスラ、キンナラ、持明者、羅刹等の集会所問の章」終り。MMPS (Tib. P) 156b6-8, MMPS (Tib. D) 151a1-3.

この奥書がチベット語訳独自のものでないことは、梵文断簡からも支持される。つまり、レニングラード写本の第六葉は「六卷泥洹經」の末尾、「北本」では「一切大衆所問品」の末尾に対応するが、それにはここに訳したのと同一の経末の奥書の一部が含まれ⁴⁵⁾、梵文『涅槃經』が、これに続く次の一葉の冒頭で終わっていることを暗示している。しかし、この奥書にも問題はある。それは、ここには『涅槃經』が終ったとは言われていないことである。ただ二万五千章ある『涅槃經』の一つの章が終ったと言っているのである。この長い章名が『涅槃經』全体を代表しているとも考えられるが、そうすると、次に述べるように、チベット語訳最終章の章名がなくなってしまう。とにかくこの奥書は異例である。ただ、梵文にかんしては、本書で私

41) 漢訳重訳のチベット語訳は56巻よりなるが、『デンカルマ』では「中国から翻訳されたもの」の項に『涅槃經』42巻——「北本」40巻と『後分』2巻を足した漢訳の巻数を摸したか——が記載されている(「芳村目録」No. 248, 「ラルー目録」No. 249)。恐らくこれは現行56巻本とは別本であろう(注26に示した山口論文, p. 32 参照)。とすると9世紀の始めには、現行本とは別な重訳があったことになる。カマラシーラの年代と、この重訳42巻本がどう関係するのか疑問が残る。あながちカマラシーラの典拠が漢訳「北本」にあったというのも荒唐無稽でないかもしれない。

42) Peking ed., No. 787, Nyu 157b5-7.

43) 高崎直道 (1974) p. 183, 注2 参照。

44) 高崎直道 (1974) p. 132, 高崎直道 (1987) pp. 18-19.

45) Bongard-Levin (1986) p. 36. 裏面7行目のローマ字転写を参照していただきたい。

2. 『涅槃經』の諸文献

が証定するものも含めて、すべて「六卷泥洹經」の範囲を出ない。梵文『涅槃經』は、チベット語訳や「六卷泥洹經」のように、ここで終わっていると見るのが自然かもしれない。ただこれ以外の写本も、レニングラード写本の第六葉と同じように終わっていたかどうかは定かではない。また小さなものばかりではあるが、未証定の断簡もあり、さらに別なコレクションから新たな写本が見つからないとも限らない。いずれにしろ、「北本」十一巻以降が中国での創作なのか、それとも梵文原典が存在したのか、あるいは中央アジアで行なわれたコータン語のような何らかの漢文以外の言語で作成された原典があるのか、これだけの資料では結論を留保せざるを得ない。

章構成 「六卷泥洹經」と「北本」の前十巻、およびチベット語訳の三者は、全体としてはほぼ一致するものの、細部の文章にはそれぞれ増広があり、特に章構成とその章名については第2表のように異なる。

「北本」前十巻の章分けを基準に考えると、「六卷泥洹經」の章分けは「北本」の「寿命品」と「如来性品」を細分した点異なるだけであるが、チベット語訳の章分けには問題がある。チベット語訳には「如来性品」という章は存在せず、第四章として、「菩薩四項目説法、第四章」があり、これは「六卷泥洹經」の「四法品」に内容的に完全に一致する。さらにそれから最後までは一章あるだけである。「六卷泥洹經」の「随喜品」、「北本」の「一切大衆所問品」に対応する章分けはなされていない。最終章の後には、上記のような奥書がある。奥書にある章名には「第五章」とは記されていないが、私はこれを『涅槃經』全体を指すのではなく、最終章の章名と考えたい。これが章名でなければ、では最終章の章名は何かということになってしまう。章名としては異例に長いものではあるが、「六卷泥洹經」の「四依品」から最後の「随喜品」、あるいは「北本」の「一切大衆所問品」に至る内容を表わす章名としてもおかしくはない。

では梵文『涅槃經』の章分けは、「六卷泥洹經」、「北本」、チベット語訳のいずれに一致するのであろうか、それとも独自の章分けになっているのであろうか。二つの資料がある。第一は、レニングラード写本第五葉である。この断簡は「北本」でいうと「金剛身品」と「名字功德品」にまたがり、その切目に対応する箇所は // vajrābhedyakāyo nāma: dvitiya skandhaḥ sam [āp] t [aḥ] // (金剛不壞身という第二の集成、終り。) とある。⁴⁶⁾ この部分の分章は、「六卷泥洹經」もチベット語訳も変わらないが、注意すべきは「章」の語に skandha (集成 = 蘊) が用いられていることである。私には、この語による章名はアビダルマ論書か、律蔵ぐらいしか思い浮かばないが、チベット語訳もここでは skandha (Tib. phung po) を用いている。第

46) Bongard-Levin (1986) p. 24. 表面1行目のローマ字転写を参照していただきたい。高崎博士も注意している。高崎直道 (1987) p. 7 参照。

第2表

MMPS (Ch. 6)	MMPS (Ch. 40)	MMPS (Tib.)
(1) 序品	(1) 寿命品	(1) 'tshe ba med pa'i phung po ste le'u dang po 不欺の集成, 第一章
(2) 大身菩薩品		
(3) 長者純陀品		
(4) 哀嘆品		
(5) 長寿品		
(6) 金剛身品	(2) 金剛身品	(2) rdo rje ltar mi shigs pa'i sku'i phung po zhe bya ste le'u gnyis pa 金剛の如き不壞身の集成, 第二章
(7) 受持品	(3) 名字功德品	(3) mdo'i ming gi gtan tshigs dang yon tan gyi tshul zhes bya ste le'u gsum pa 経名の命名理由と功德と尊守, 第三章
(8) 四法品	(4) 如来性品	(4) byang chub sems dpa' sna grangs bzhis chos ston pa'i le'u ste bzhi ba 菩薩四項目說法, 第四章
(9) 四依品		
(10) 分別邪正品		
(11) 四諦品		
(12) 四倒品		
(13) 如来性品		
(14) 文字品		
(15) 鳥喩品		
(16) 月喩品		
(17) 問菩薩品		
(18) 随喜品	(5) 一切大衆所問品	(5) lha dang mi dang lha ma yin dang mi'am ci dang rigs sngags 'chang dang srin po la sogs pa 'dus pas zhus pa zhes bya ba'i le'u 天, 人, アスラ, キンナラ, 持明者, 羅刹等の集会所問の章

二は、本書で紹介する断簡の中の一つで、私による整理番号 A-7, 8, 9 である。これは「北本」では「如来性品」と「一切大衆所問品」の切目を含むが、その箇所は分章されていない⁴⁷⁾。これはチベット語訳に一致する。梵文写本は数種あるので、すべてがこうなっているとは断言できないが、以上の二点からすると梵文『涅槃経』はチベット語訳の章構成に一致すると見て差し支えない。

47) 本書巻末のローマ字転写 A-7, 8, 9 の項、表面4行目のダンドの後の *atha khalu* から「一切大衆所問品」が始まるが、ダンドがあるだけで章末の奥書はなく、分章されていないと思われる。

『涅槃經』研究 いささかの新資料も混じえて、現時点で知られている『涅槃經』の諸文献を概観した。私の感想を言えば、『涅槃經』は人口に膾炙している割にはほとんど文献学上の研究対象にはなっていない。『涅槃經』について書かれたもののほとんどは通俗的なもので、チベット語訳と漢訳との対照さえまったく果たされていない。見落としがあるかもしれないが、チベット語訳も利用しての『涅槃經』研究は、私には高崎直道博士と水谷幸正博士のものしか探せなかった。⁴⁸⁾やはり僅かな断簡しか梵文テキストが存在しないことが大きいようである。

3. 新たな梵文断簡

渡辺海旭博士によるヘルンレ・コレクションに含まれる梵文断簡一葉の発見は、漢訳とチベット語訳に依らざるをえない『涅槃經』研究に新たな地平を切り開き、その後、我国の高野山とレニングラードのペトロフスキー・コレクションから七葉、計八葉の断簡が発見されるに至った。しかし、高野山写本はさておき、他の二カ所からの発見は、コレクションを精査した結果、最終的にヘルンレ写本から一葉、ペトロフスキー・コレクションから六葉の断簡が発見されたというわけではない。ペトロフスキー・コレクションの事情はよく分からないが、ヘルンレ写本については、前述のように、渡辺博士はトーマスが調査した十一葉の中から断簡一葉を発見したにすぎないのである。インド省図書館にあるヘルンレ写本の中では、十一葉はそのごく一部分にすぎないし、さらにスタイン写本もある。ヘルンレの死後、スタイン写本とヘルンレ写本は放置され、作成された写本のマイクロフィルムも極めて不十分なものであった。改めてコレクションを精査すれば、見逃されていた新たな梵文断簡が発見される可能性は十分にあり得るように思える。

調査に先立って 東洋文庫に來ているスタイン・ヘルンレ写本のマイクロフィルムは不完全なものではあるが、今回の調査の手掛りはその中から見出された。手許に取り寄せていたマイクロフィルムからの焼付写真を一覽した結果、私は、レニングラード写本六葉のうち、第二葉の失われた部分を、マイクロフィルムに含まれるスタイン写本の中に発見した。これが本書での整理番号 A-1 の断簡である。両者を足してもなお少し不足部分が残るが、一葉がほぼ二分され、一方はレニングラードに、もう一方はロンドンに保存されていたのである。私はこの発見をボンガード＝レヴィン博士に伝えたが、博士も私と同じ発見をしたとのことで、その後、東京で出版されたレニングラード写本六葉の英語版の中に補遺としてこれが付け加えられている。⁴⁹⁾

48) 高崎直道 (1974) pp. 128-190, 水谷幸正 (1960) (1961)。

49) Bongard-Levin (1986) pp. 10-12.

さらに私は、本書での整理番号 B-2 をスタイン写本から見出した。これは、一葉の八割程度は残っている。なおこの時には気付かなかったが、実際の調査では、B-2 の欠如部分を補う B-3 と B-4 の断簡も発見される。マイクロフィルムの焼付写真からさえ、このように新たな断簡が見出されたのである。コレクションの現地調査への私の期待はいやが上にも高まった。

写本調査と『涅槃経』の探索 インド省図書館では、調査のために用意された専用の一室に書庫から写本を運んでもらい、順番にすべての写本に目を通した。その結果、写本の全体像、および実際の写本とマイクロフィルムとの違いなど、最初に述べたような事実が判明した。『涅槃経』に関しては、渡辺博士証定の断簡、および出発前のマイクロフィルムに対する調査からすでに『涅槃経』と分かっていた断簡を手許に並べ、それらの断簡を基準に、それと書体、サイズ、行数等が一致する断簡を、そして当然のことながら、それらしい内容の断簡——例えば、tathāgatagarbha, icchāṃtika, Cunda 等のキーワードを持つ——を順次取り出して行った。取り出された断簡は一葉全部残っているものから、小さな破片に近いものまで、計33枚に上った。私は、ロンドンには『涅槃経』「北本」の前十巻とチベット語訳の複写を持参していたが、33枚のうち約半分はその場で『涅槃経』に証定することができた。

三種の写本 取り出された33枚は、一つの写本だけがばらばらになって出土したのではなく、書体・サイズ等から判断して三種の写本に由来することが分かる。これを本書では次のように A 写本、B 写本、C 写本と名付ける。

A 写本：サイズ 9.0×31.0 cm。行数は裏表各 7 行、基準となる断簡は渡辺博士が証定したヘルンレ写本の一葉。本書での整理番号 A-6。

B 写本：サイズ 11.0×38.0 cm。行数は裏表各 9 行。基準となる断簡は本書での整理番号 B-2, B-3, B-4 によって構成される断簡 (スタイン写本)。

C 写本：サイズ 9.3×39.0 cm。行数は裏表各 7 行。基準となる断簡は本書での整理番号 C-4 (ヘルンレ写本)。

本書では、A 写本の基準となる渡辺博士証定の一葉も改めて取り上げたので、33枚にそれを加えた計34枚のうち、A 写本は20枚、B 写本は 7 枚、C 写本は 7 枚である。この34枚について、A-1 から A-20, B-1 から B-7, C-1 から C-7 の整理番号 (Reference Number) を付けたが、まずその番号順に、(1)スタイン写本に含まれるかヘルンレ写本に含まれるかの所属コレクションの別、(2)スタインとヘルンレが付けた原番号 (Original Number)、(3)断簡が入っている箱の種類、木箱の場合は番号 (Box Number) を、ダンボール箱 (Cardboard Box) の場合はその旨を、(4)断簡を収めるプレート番号 (Plate Number)、(5)その断簡が東洋文庫にある

3. 新たな梵文断簡

マイクロフィルムに写っている場合はフィルムのカド番号 (Frame Number) を、写っていない場合はその旨 (Not Included) を、そして最後に(6)その断簡のサイズを一覧表にすると、次の通りである。

第3表

Ref. No.	Collection	Original No.	Box No.	Plate No.	Microfilm	Size (cm)
A-1	Stein	Kha. i. 89. b	45(42)	114(50)	Frame No. 100	9.0×11.0
A-2	Stein	Kha. i. 206	45(45)	114(93)	Not Included	8.0×16.4
A-3	Hoernle	143. SB. 102	23	16	Not Included	9.0×17.8
A-4	Hoernle	142. SC. 152	24	24	Not Included	9.0×12.0
A-5	Stein	Kha. 0014. b	45(45)	114(87)	Frame No. 211	9.0×18.0
A-6	Hoernle	143. SA. 4	28	5	Frame No. 118	9.0×31.0
A-7	Stein	Kha. i. 206	45(45)	114(93)	Not Included	5.5×17.0
A-8	Stein	Kha. i. 206	45(45)	114(101)	Not Included	9.0×4.0
A-9	Stein	Kha. i. 300	45(43)	115(67)	Frame No. 67	5.3×9.5
A-10	Hoernle	No Number	Cardboard Box	159	Frame No. 159	3.5×14.2
A-11	Hoernle	143. SB. 98	23	16	Not Included	7.0×19.0
A-12	Hoernle	142. SB. 69	23	11	Not Included	9.0×27.0
A-13	Stein	Kha. i. 199. a	45(45)	115(104)	Not Included	9.0×31.0
A-14	Hoernle	143. SC. 174	24	25	Not Included	9.0×6.4
A-15	Stein	Kha. i. 316	45(43)	115(69)	Frame No. 69	8.0×9.4
A-16	Hoernle	143. SC. 64	24	21	Not Included	8.3×10.4
A-17	Hoernle	No Number	Cardboard Box	159	Frame No. 159	8.0×12.0
A-18	Stein	No Number	45(43)	115(51)	Frame No. 51	4.3×12.0
A-19	Stein	Kha. i. 199. a	45(45)	115(104)	Not Included	3.0×12.2
A-20	Stein	Kha. i. 206	45(45)	114(104)	Not Included	4.0×11.0
B-1	Stein	Kha. i. 95	45(45)	113(88)	Not Included	11.0×10.0
B-2	Stein	Kha. i. 129	45(43)	113(56)	Frame No. 56	11.0×29.0
B-3	Stein	Kha. i. 94	45(43)	113(54)	Frame No. 52	5.0×8.8
B-4	Stein	Kha. i. 94	45(43)	113(54)	Frame No. 52	6.0×7.0
B-5	Stein	Kha. i. 204	45(43)	113(65)	Frame No. 65	7.0×16.5
B-6	Stein	Kha. i. 80	43	52	Frame No. 49	5.0×10.0
B-7	Hoernle	No Number	Cardboard Box	163	Frame No. 163	11.0×19.0

C-1	Stein	Kha. i. 78	45(43)	114(52)	Frame No. 49	7.5×10.5
C-2	Hoernle	143. SB. 72	23	12	Not Included	9.3×21.0
C-3	Hoernle	147. SB. 109	24	18	Not Included	9.3×30.0
C-4	Hoernle	143. SA. 6	14	1	Not Included	9.3×39.0
C-5	Hoernle	143. SB. 99	23	16	Not Included	9.3×21.2
C-6	Hoernle	143. SC. 137	24	24	Not Included	9.3×10.0
C-7	Stein	Kha. i. 206	45	101	Not Included	5.0×4.0

出土地 34枚のうち、スタイン写本は15枚、ヘルンレ写本は19枚ある。この中には原番号の付いていないものもあるが、それを除くとスタイン写本にはすべて Kha. で始まる番号が付いている。これはその断簡が西域南道、コータン (Khotan) の東70マイルにあるドモコ・オアシス (Domoko oasis) 近くのカーダリック (Khādarik, Khadarik or Khadariq) の遺跡から出土した写本であることを示している。ヘルンレ写本については、142, 143, 147で始まる原番号が付いているが、ヘルンレによると⁵⁰⁾、142と143の番号の付いた断簡はカシュガル駐在のマイルス (P. J. Miles) 中佐から、1903年から1904年にかけて、ヘルンレの許に届けられたもので、どうやらこれもカーダリックの遺跡から出土したものらしい。スタインが同遺跡を訪れたのは第二次探検中の1906年のことなので、ヘルンレ写本はスタインに先立って同遺跡を離れたことになる。三種の写本はスタイン・ヘルンレの両コレクションいずれにも含まれているが、原番号のない断簡も、また147で始まるヘルンレ写本の断簡 (C-3) もカーダリック出土と見て間違いのないであろう。同一地点から三種の写本の断簡が34枚出土したのである。

レニングラード写本について 先にレニングラード写本の第一葉から第四葉および第六葉は渡辺博士証定のヘルンレ写本と同じ写本に属し、第五葉はこれとは別な写本であると言ったが⁵¹⁾、それがここで言うA写本とB写本である。これは、次のように写本の外形からも、さらにレニングラード写本の欠如部分の一部がスタイン・ヘルンレ写本から発見されたことから断言できる (第4表)。

レニングラード写本の第二葉の欠如部分がスタイン写本に存在することは、すでに調査前に気付いていたわけであるが、これ以外に第三、第六葉の欠如部分もスタイン・ヘルンレ写本か

50) Hoernle (1916) p. 85.

51) ボンガード=レヴィン博士はレニングラード写本六葉を三種の分類番号に分けているが [Bongard-Levin (1986) p. xxii, No. 1 =SI, P/85b, No. 2 =SI, P/88a, No. 3 =SI, P/88b, No. 4 =SI, P/88c, No. 5= SI, P/89, No. 6 =SI, P/88d], ここに述べるような理由で、写本としては二種に収まると断定できる。

第4表

	所属	サイズ (cm)	行数	欠如部分	欠如部分の補足
Leningrad-1	A写本	9.0×18.0	7行	左3分の1	—
Leningrad-2	A写本	9.0×17.0	7行	右半分	A-1 (Stein Ms.)
Leningrad-3	A写本	9.0×15.0/17.0	7行	左半分	A-2 (Stein Ms.)
Leningrad-4	A写本	9.0×22.0/25.0	7行	左4分の1	—
Leningrad-5	B写本	11.0×38.0	9行	なし	—
Leningrad-6	A写本	9.0×31.0	7行	右下の1部	A-10 (Hoernle Ms.)

ら発見された。また第五葉はB写本のほとんど破損のないきれいな断簡である。ペトロフスキー・コレクションにはC写本に属する断簡は発見されていない。レニングラード写本の六葉がA写本とB写本に属するということが、これらもカードリック出土の断簡に他ならないことになる。レニングラード写本はカシュガル駐在のロシア領事、ニコライ・ペトロフスキー (N. F. Petrovsky) によって、彼が職を辞する1903年までに蒐集されたものである。恐らくカードリックの遺跡では様々な人が入り乱れて貴重な写本を漁ったに違いない。スタインが訪れた1906年には、大きな断簡はすでに掘りだされてしまった後だったのであろうか、ここで取り上げている断簡についても、ヘルンレ写本とレニングラード写本に比べ、スタイン写本には小さな断簡が多い。

用紙と書体 三種の写本はいずれも薄茶色の少し厚手の紙に書かれている。書写に用いられた文字は、西域南道における出土写本に典型的な正形グプタ文字である。最近のザンダー博士の分類に従えば「初期トルキスタン・ブラーフミー文字b型 (Early Turkestan Brāhmī type b)⁵²⁾」とされる書体である。ただ、写真を見ていただければ明らかなように、三つの写本は別々の書生によって書かれている。A写本の書体を基準にすると、B写本はそれより少し丸味をおびた柔らかな書体で、C写本は角張って均整が取れ、能書体グプタ文字に少し似た書体で書かれている。

スタイン写本の新プレート 私が見出した断簡の中で、スタイン写本が収められているプレートは、縁を両面テープで留めただけであったため、調査期間中にインド省図書館の許可を得て、断簡をプレートから取り出した。そして図書館の修理部で新たに三枚のプレートを用意してもらい、取り出した断簡をその三枚の新プレートに収めた。この三枚には SS. 113, SS. 114, SS. 115

52) Sander (1986) p. 188, Plate 15, 16, 17 に示される写本と共通する書体。

の番号を付け、Box 45 に収めた。一覧表に示したスタイン写本に属する断簡は、Box Number と Plate Number が二重に記されているが、カッコに入れた数字は、その断簡が新プレートを作成する以前に収められていた箱、およびプレート番号を示している。ただ C-6 と C-7 の二つは新プレート作成後に見出された断簡のため、そのままにして移動させていない。さらに注意していただきたいのは、SS. 113 に入れた B-2, B-3, B-4 の三つの断簡である。この三つは同一葉を構成する断簡であるので、三つは接合してプレートに収めた。従って写真で見れば一つの断簡にしか見えないかもしれないが、実際は三つの断簡からなっている。なお、ヘルンレ写本のプレートは密封されていたため、断簡を取り出すことは不可能であった。

写本別分類 一覧表に示した34枚の断簡について、現時点で私はすべての断簡を証定できたわけではない。A-14 から A-20 までのA写本7枚、C-6, C-7 のC写本2枚は未証定のままである。従って、私に証定できた断簡は、34枚から未証定の断簡9枚と渡辺博士証定の一葉を除いた24枚である。また整理番号については、一枚一枚の断簡に単純に番号を付けたものである——写本別に分け、『涅槃経』の内容に対応する順序に並べてはいるが——。従って、この34枚は34葉に割り振られる断簡というわけではない。すでにレニングラード写本の欠落部分を補う断簡、および、B-2, B-3, B-4 が同一葉に属することを述べたが、ここで各写本別に34枚がどれだけの葉数に収まり、『涅槃経』のどの部分に対応するかを説明しよう。

A写本 A写本に属する断簡は20枚見出されたが、A-14 以降の未証定断簡7枚を除く A-1 から A-13 までの13枚の中で、『涅槃経』に証定できたのは、次のような七葉に割り振られる A-1 から A-10 までの10枚の断簡(ただし A-6 は渡辺博士証定)である。A-11, A-12, A-13 の3枚については別項で説明する。

第5表

	Chapter (Ch. 40)	MMPS(Tib. P)	MMPS(Tib. D)	MMPS(Ch. 40)	MMPS(Ch. 6)
A-1	寿命品	13b4-14b2	13a3-13b7	369a16-b17	855c14-a6
A-2	寿命品	20b5-21b3	20a3-20b7	371b21-c20	857c12-858a5
A-3, 4	金剛身品	50b1-51a5	50a4-b7	384c3-24	867b17-c10
A-5	如来性品	96b5-97b5	94a6-95a6	403c5-404a6	880c20-881a14
A-6	如来性品	142a7-143a4	137b5-138b2	422b6-c23	895a2-25
A-7, 8, 9	如来性/一切大衆所問品	145b6-146b3	140b7-141b4	423c15-424a14	895c28-896a26
A-10	一切大衆所問品	156a1-b6	150a5-151a2	428a2-b12	899b8-c23

3. 新たな梵文断簡

A-3 と A-4 は同一葉に属する。さらに、A-7, A-8, A-9 はそれぞれ小さな断簡ではあるが、これらも同一葉の一部であることが判明した。先の『涅槃經』の章分けで述べたように、この一葉は、「北本」で言うと「如来性品」と「一切大衆所問品」にまたがる。しかし、その切目は分章されていない。少なくとも、梵文A写本『涅槃經』がチベット語訳の章構成に一致することを支持している。また前述のように、A-1, A-2, A-10 はレニングラード写本の欠如部分を補う、同一葉の一部である。特に、A-10 はわずかなものではあるが、レニングラード写本の第六葉の欠如部分に含まれる「一切大衆所問品」末尾の偈を補綴する重要な断簡で、高崎直道博士による第六葉の欠如部分の推定を訂正する。⁵³⁾ なお A-3, A-6, A-7 には葉番号 (Folio Number) が残っているが、これについては後述。

B写本 B写本7枚は四葉に割り振られ、次のようにすべて証定することができた。

第6表

	Chapter (Ch. 40)	MMPS(Tib. P)	MMPS(Tib. D)	MMPS(Ch. 40)	MMPS(Ch. 6)
B-1	寿命品	21a7-22a7	20b4-21b4	371c13-372b27	857c29-858a22
B-2, 3, 4	寿命品	23a6-24a6	22b3-23b4	373a20-c6	858c24-859b21
B-5, 6	金剛身品	48b8-50a2	48b4-49b5	384a8-b20	867a4-b6
B-7*	如来性品	106b3-107a4	103b7-104a7	407c8-21	883c2-8

*破損のため B-7 全体の対応箇所不明。表5行目から裏5行目までの対応を示した。

7枚のうち、ヘルンレ写本に属する断簡は B-7 だけで、他はスタイン写本である。B-3 と B-4 は小さな断簡ではあるが、八割程度残っている B-2 の欠如部分を補う同一葉の一部である。B-2 の表には22という葉番号 (Folio Number) が打たれている。ただこの三つを併せても完全にはならない。相当探したが、残された部分はスタイン・ヘルンレ写本中にはついに発見できなかった。漢訳とチベット語訳との対応から判断すると、B-1 は恐らくこれの二葉前の断簡。なおレニングラード写本第三葉の裏4行目から7行目が B-1 の表1行目から4行目に重なる。B-5 と B-6 も同一葉に属する。何故、B-6 のような小さな断簡が証定できたか不思議に思われるかもしれないが、この場合は、断簡の中に三度現れる Akṣobhya-tathāgata (阿閼如来) がキーワードになった。

C写本 C写本7枚の中で証定できたのは5枚であるが、この5枚は同一葉に属さず、次のようにそれぞれ別々の五葉に割り振られる。

53) 高崎直道 (1987) pp. 9-19 および、Bongard-Levin (1986) p. 35-40 参照。

第7表

	Chapter (Ch. 40)	MMPS (Tib. P)	MMPS (Tib. D)	MMPS (Ch. 40)	MMPS (Ch. 6)
C-1	寿命品	22b2-23b2	21b6-22b7	372c8-373a26	858b4-859a3
C-2	寿命品	43b7-45a1	43b4-44b6	382a22-b24	865b4-c9
C-3	如来性品	86a1-b8	84a2-b7	398c16-399a21	877b18-c17
C-4	如来性品	132b7-133b7	129a1-129b7	418b14-419a2	892b8-c7
C-5	如来性品	136b4-137b2	132b3-133a7	420a15-b16	893b29-c16

B写本とは異なって、この中では C-1 だけがスタイン写本である。C-1 はB写本の B-2, B-3, B-4 と一部重複する断簡。それに気付いたことがこの小さな断簡の証定を可能にした。C-4 はほぼ原形を留める断簡。内容的にも「如来性品」末の一闡提をめぐる議論にトレースできる重要なもの。ただし形はほぼ原形を留めているとはいえ、文字は相当破損している。これがC写本の基準となつて、C-1 を除く他の断簡も比較的簡単に発見できた。C-5 は、「北本」では「如法花中八千声聞得受記……MMPS (Ch. 40) 420a23-24, cf. (Tib. P) 137a1」と訳される『法華経』に言及する箇所に対応部分を含み、……Saddharmapaṇḍar [i] k(e)… (R. 5) と経名も現われている。なお、C-2, C-3, C-4 の表には、39, 78, 124という葉番号が打たれている。この葉番号から計算すると、C写本は分量的にチベット語訳と「北本」前十巻によく一致する。

A写本の葉番号 34枚の断簡の中で、写本の左端が残っているものには葉番号の読み取れる断簡がある。B写本とC写本についてはすでに述べたが、問題はA写本である。A写本のうち、A-3, A-6, A-7 およびレニングラード写本の第二葉と第六葉には、その左端に葉番号が残存している。この中、レニングラード写本の第二葉と A-3 の葉番号は、破損が激しく、残念ながら読めない。しかし、A-6 については、これを証定した渡辺博士とトーマスは162、レニングラード写本の第六葉については、ボンガード＝レヴィン博士は148と読んでいる⁵⁴⁾。A-7 については、私の読みで149である。ところで、A-6 は「如来性品」の末尾、A-7 は「如来性品」と「一切大衆所問品」にまたがり、レニングラード写本の第六葉は「一切大衆所問品」末尾の断簡である。内容的に A-6, A-7, レニングラード写本の第六葉と続く三つの断簡の葉番号が162, 149, 148というのはおかしい。三者の読みが間違っているのか、それとも写本の葉番号自体が間違っているのか、私には判断がつかない。写本における数字の解釈は難しい。第一葉から最終葉まで残っている写本は別にして、特にこのようならばばらの断簡の場合は困難を極める。識者の判断を仰ぎたい。なお、A-6 については、写真を見れば明らかのように、現在で

54) 渡辺海旭 (1908) p. 573, Hoernle (1916) p. 93, Bongard-Levin (1986) p. 35.

は葉番号は殆ど読めない。渡辺博士の解説当時にもっと鮮明であったのであろうか。⁵⁵⁾

『涅槃經』以外のA写本断簡 A写本の項では A-11, A-12, A-13 については述べなかった。インド省図書館での調査中、この三つの断簡は、最後まで私にとって頭痛の種であった。三つとも小さな断簡ではない。しかも A-13 は完璧なもので、まったく破損していない。そのためもあってか、未証定断簡にもかかわらず、スタインは A-13 の片面の写真を写本のサンプルとして探検報告書に載せているほどである。⁵⁶⁾しかし、いくら探しても、私が持参した「北本」前十巻に対応箇所を見出せない。私が、この三つをA写真に属すると見做したのは、用紙のサイズ、書体、行数、行の並び具合などがA写本の基準である A-6 によく一致するからであった。ただし、A-13 だけは表に八行、裏には二行だけ書かれている。従って A-13 には多少の不安を感じたが、用紙サイズと書体からは、これもA写本の一部に他ならないように思われた。内容的には、經典の流通分が記され、裏に書かれた二行で何らかの經典が終っているようであったが、奥書はない。しかし、その流通分では、自ら經名を *Sarvbavaitulyasamgraha* と称している。⁵⁷⁾このようなパッセージは「北本」前十巻にはまったく存在しない。さらに混乱に拍車をかけたのは、A-12 と A-13 に打たれた葉番号であった。A-12 には233, A-13 には242の葉番号が記されていたのである。これはどういうことであろうか。『涅槃經』A写本は、奥書の一部を含むレニングラード写本第六葉の次の葉で終わっていると推定されていたからである。上記の如く、一応、ボンガード＝レヴィン博士の読みが正しいとすれば、レニングラード写本の第六葉の葉番号は148である。従ってA写本『涅槃經』の最終葉の葉番号は149のはずである。ではもしかして、三つは「北本」十一巻以降に対応部分があるのか。私は、図書館の方をお願いして、「北本」四十巻を書庫から出して来ていただいた。インド省図書館には、何と黄檗版！の大蔵經がある。しかし対応箇所は見出されない。結局、この三断簡については不明のまま、ロンドンから帰らざるをえなかった。

しかし、疑問は帰国後しばらく経って解決した。実は、この三つの断簡は『涅槃經』ではなかった。A-11 は『八仏名号經 (**Aṣṭabudhakaśūtra*)』⁵⁸⁾、A-12 と A-13 は自称通り、『大乘方広総持經 (*Sarvavaipulyasamgrahasūtra*)』⁵⁹⁾の断簡であった。本書の略号表に示したように、

55) 発掘後、80年の歳月は断簡の他の部分もさらに色褪せさせているようである。本書に収めた A-6 のローマ字転写は、現在見える部分を読んだので、渡辺博士とトーマスの読み比べて、むしろ後退しているかもしれない。

56) Stein (1921) vol. IV, Plate CXLIV.

57) 本書巻末のローマ字転写 A-13 の項、表面 2, 3-4 行目。

58) 『八仏名号經』はこれまではまったく梵文が知られていなかった。A-11が他文献の引用も含めて初めての梵文テキストの一部ということになる。

59) 断簡では -vaitulya となっているが、梵語としては -vaipulya が相応しいであろう。中央アジア写本では、vaipulya は常に vaitulya となっている。例えば、Toda (1981) における『法華經』各

前者にはチベット語訳と五種の漢訳、後者にもチベット語訳と二種の漢訳が現存している。それらの対応箇所は次の通り。なお、『大乘方広総持経』は *Śikṣāsamuccaya* にも引用されている。⁶⁰⁾

A-11: ABS (Ch. 1) 72b12-c1, ABS (Ch. 2) 73b14-c8, ABS (Ch. 3) 74b25-c15?,
ABS (Ch. 4) 75b7-23, ABS (Ch. 5) 76b11-c5, ABS (Tib. P) 20a2-b5, ABS
(Tib. D) 19a5-b7.

A-12: SVSS (Ch. 1) 375c3-29, SVSS (Ch. 2) 380a7-b2, SVSS (Tib. P) 190a3-b7,
SVSS (Tib. D) 180a12-b3.

A-13: SVSS (Ch. 1) 378c26-379a12, SVSS (Ch. 2) 383a16-b9, SVSS (Tib. P) 198b2
-199a5, SVSS (Tib. D) 188a4-b6.

『八仏名号経』は東方八仏を列挙する小さな經典。A-11 は一葉の三分の一程度しか残っていないが、八仏の中で第四から第八仏の項に対応する。漢訳も五訳現存しているが、出入が激しく、対応箇所を特定することは難しい。五訳の中では、ここで漢訳名を借りた Ch. 5 によく一致する。次の『大乘方広総持経』は、釈迦牟尼仏と阿弥陀仏の因縁譚から正法誹謗、大乘への帰入などを説く。この經典は大正藏経では法華部に入っている。A-12 は因縁譚のあたり、A-13 は経末の流通分にあたる。漢訳は二訳あるが、漢訳名を借りた Ch. 2 の方に近い。

なお、その後、A-13 については真田有美博士の研究があり、すでに『大乘方広総持経』に証定されていることを知った。⁶¹⁾ ただし、博士はスタインの探検報告書所蔵の片面の写真を見てだけで、裏面は読んでいない。⁶²⁾ 資料さえ手許にあれば、この断簡の証定はたやすかったはずであるが——A-13 に出る経名をチベット大藏経の梵文典籍名索引で引けばよい——、『涅槃経』との先入観があったこと、および資料が手許になかったため——黄檗版大藏経を順番に見ようとは思わない——、調査期間中は私には証定できなかった。

では、これら三つの断簡は、同じ書写生によって、同一用紙に、同一フォームで書かれた別の写本の一部であろうか。そうではないであろう。何故なら、大正藏経の頁数で言うと、『八仏名号経』は1頁強、『大乘方広総持経』は4頁強の短経にすぎない。これではA-12の葉番号233、A-13の葉番号242を説明できない。私はこれらもA写本の一部であろうと思う。A写本の第1葉から第149葉の途中までに「六卷泥洹経」に相当する『涅槃経』が写され、それ以降は、

章末の *vaitulya* の語を見ていただきたい。 *vaipulya*, *vaitulya*, *vaidalya* は大乘 (Mahāyāna) の同義語であるとは、 *Abhidharmasamuccayabhāṣya* の記す所である (Tatia ed., p. 96, l. 3)。

60) *Āryasarvadharmavaipulyasamgrahasūtra* の名で長文が引用されている。Bendall (1897-1902) p. 95, l. 11-p. 97, l. 15. この引用は A-12, 13 とは重ならないが、これらを併せると、この經典はかなりの量の梵文が回収されることになる。

61) 真田有美 (1963) pp. 24-26 参照。

62) 注56参照。A-13 はマイクロフィルムには写っていない。

3. 新たな梵文断簡

途中のどこかに『八仏名号経』が、そして最後に『大乘方広総持経』が写され、第242葉でA写本は終るのである。従って、葉数から判断すると、A写本には、これ以外にも、いくつかの別な経典が写されていたに違いない。何如なる基準でこれらの経典は同一写本に書写されていたのであろうか。『大乘方広総持経』は『涅槃経』と同様、仏陀の死の直前に説かれる場面設定になっているが、『八仏名号経』がどう関連するか分からない。これ以外の経典も、なんらかの点で共通する経典群がまとめられていたのであろうか。なお、A-13の表には8行書かれているが、A-12からA-13に至る漢訳とチベット語訳の分量計算から推定して、A-13の葉番号242は、A-12の葉番号233に対して整合性がある。つまり、8行書かれているとはいえ、これもA写本の一部に間違いないということである。

未証定断簡 34枚の断簡の中で、A-14からA-20の7枚、C-6、C-7の2枚、計9枚はここでは未証定のまま残された。これらはいずれも小さなものなので、明確なキーワードでもない限り、証定は難しい。特にA写本の7枚は『涅槃経』ではないかもしれない。しかし、形状から、これらもA写本とC写本の一部に間違いないと思う。証定は将来に委ねたい。

まとめ インド省図書館のスタイン写本とヘルンレ写本を調査して、渡辺海旭博士が証定した一葉を含め、34枚の梵文写本断簡を私は取り出した。34枚は、書体、サイズ等によって、A写本20枚、B写本7枚、C写本7枚の三種の写本に分類され、最終的に、25枚が『涅槃経』ほか二経に証定され、9枚は未証定のまま残された。証定された25枚は、葉数としては、A写本十葉、B写本四葉、C写本五葉に分かれるが、A写本十葉の中で、『涅槃経』は七葉で、一葉は『八仏名号経』、二葉は『大乘方広総持経』の断簡であった。さらにA写本の三葉はレニングラード写本の欠如部分を補綴するものであることも判明した。

従って『涅槃経』にかんして言えば、A写本七葉、B写本四葉、C写本五葉の計十六葉から、渡辺博士証定の一葉とレニングラード写本を補綴する三葉を差し引いた十二葉が、本書に先立って知られていた八葉に付け加えられる葉数である。つまり、『涅槃経』の梵文写本は二十葉現存しているのである。ただし、二十葉といっても、中には一葉のわずかしが残存していないものがあることに留意していただきたい。

残された問題 では、これ以外に『涅槃経』の新たな断簡はまったく存在しないのか。インド省図書館にある写本にかんしては、五週間にわたって朝から晩まで調査した結果がこれである。これですべてであると言ってよいであろう。また大英図書館東洋部にある写本については十分に調査できなかったが、私の見た範囲では『涅槃経』はないようであった。ただし東洋部にはまだ私が見ていない写本があるかもしれない。

三種の写本は、いずれもカーダリックの遺跡から出土したものである。従って、この遺跡からの出土写本には『涅槃経』の含まれている可能性は高い。フランスのペリオ、およびドイツ探検隊のコレクションはトルファン写本が主で、カーダリック出土写本はないようであるが、レニングラードのペトロフスキー・コレクションには『涅槃経』がさらに眠っているかもしれない。⁶³⁾特にC写本は今回の調査でまったく新たに発見されたものなので、これを基準にペトロフスキー・コレクションを探せば『涅槃経』が見出される可能性はあろう。さらに、A、B、C以外の第四の写本、あるいは中央アジア系写本以外の、例えばネパール・チベット系写本がないとも言えないが、恐らくその可能性は高くないように思われる。

本書で取り上げた新たな断簡によっても、『涅槃経』の「北本」十一巻以降に対応する梵文写本は発見できなかった。B写本とC写本がどこで終わっているのか分からないが、同一遺跡から出土したA写本には、『涅槃経』の終わった後、別な経典が書写されている。その『涅槃経』も恐らく「六卷泥洹経」相当のものだったであろう。章構成からは、中でもチベット語訳に一致するようである。仮に「北本」十一巻以降に対応する梵文があったなら、チベット人はわざわざ漢訳から重訳などしないで、直接梵文から翻訳したに違いない。現存資料から判断して、「北本」訳出をめぐる伝承とは異なり、中央アジアに「六卷泥洹経」以上の梵文写本があった証拠はない。

63) ボンガード＝レヴィン博士から直接聞いた所では、レニングラード写本の六葉は現在までに証定されたものすべてであって、これ以外にも『涅槃経』の発見される可能性はないとは言えないとのことであった。

文 献 対 照

三種の写本を構成する34枚の断簡の中から、ここで各写本の代表的断簡を取り上げてローマ字転写し、チベット語訳と漢訳の対応箇所を示し、併せて試訳を提示しておきたい。取り上げた断簡は、A写本からは A-3 と A-4 の二つの断簡から構成される一葉、B写本からは B-2, B-3, B-4 の三つの断簡から構成される一葉、C写本からは C-4 の一葉である。

内容的には、A写本の一葉は「金剛身品」の末尾に相当し、『涅槃経』独自の持律者 (vinyadhara) 像が説明され、B写本の一葉は「寿命品」の一部で、盛者必衰のことわりが世尊の口から美しい詩頌をもって語られる。さらにC写本の一葉は「北品」の「如来性品」の後半、「六卷泥洹経」では「問菩薩品」に見られる一闍提 (icchantika) にかんする議論の一部に相当する。

これらは比較的大きな断簡であるとはいえ、読み取ることのできた文章だけでは三葉全体の復元は不可能であった。二種の漢訳とチベット語訳は細部において種々の相違がみられるが、回収される断簡の梵文から判断する限り、梵文写本はチベット語訳によく対応する。ここでは一応、写本の梵文とチベット語訳の背後に想定される梵文とが一致することを前提にして、失われた箇所はチベット語訳から補って和訳した。漢訳とチベット語訳は写本に対応する部分だけでなく、その前後の文章も示し、和訳もその部分を補った。従って、ここで提示される漢訳とチベット語訳は、新断簡の解説で示した対応箇所からは若干膨らんでいる。

なお、ここで取り上げなかった断簡については、ローマ字転写のみを本書末尾に一括して掲載しておくことにしたい。これらの断簡の文献対照、およびここで取り上げた三葉を含めての詳細な研究は将来に委ねたい。¹⁾

1) 写本に現われる語形の確認、欠落部分の復元、梵文テキストの校訂、そして翻訳等に当たっては、本書に収めた新断簡は、恐らく一つの断簡について一つの論文を必要とするであろう。ここでは、その手初めとして三葉を構成する断簡についてのみ、ごく初歩的な調査を行うにすぎないことを了解していただきたい。ローマ字転写についても、ここに取り上げた三葉だけは分かる範囲で欠落部分を補ったが、全体としては写本に書かれているままを採用し、明かに書写生の誤記と思われる点についてのみ、*sic* (原文のまま) の記号を付けて読者に注意を促すにとどめた。従って、サンディ、変形等の古典サンスクリットの文法規則から逸脱した語形は、正規形に改めるべきか、仏教梵語としてそのまま読むのか、ここでは判断を下さずにおく。

[P. 50a8, D. 50a3] 'dul ba 'dzin pa zhes bya ba ni gdul bar bya ba'i dbang gis bslab [P. 50b] pa'i gzhi de dang de dag shes te rngams chen po yang shes so // rngams chung du yang shes so // 'dul ba ma yin pa ni btsan par mi byed do // 'dul ba(P. dul ba) ni btsan par byed do // gdul bar bya ba'i dbang ji ltar shes she na / byang chub sems dpa' gdul bar bya ba'i dbang gis grong khrod du 'gro ba yod do // de(P. da) ni bud med dang / gar mkhan mo'i mdun khang dang / yugs sa mo'i khyim dang / smad 'tshong ma'i khyim(P. om.) ma gtogs par khyim gyi nang ngam 'dun kang gang du 'gro 'dod kyang rung ste / de la der 'gro ba'i dus nges pa med do // byang chub sems dpa'i dge slong gis ni lo grangs mang por yang grong khrod du rgyu bar bzod kyi nyan thos kyi dge slong gis ni mi bzod do // rngams chen po dang / rngams chud du ji ltar shes she na / rngams chen po zhes bya ba ni de bshin gshegs pas don gyi dmigs byung ba gang gzigs na ni de ltar gzigs pa'i 'og tu phas pham pa bzhi po 'di lta bu phyin chad ma byed cig / gal te khyed kis byas na rab tu 'byung(D. dbyung) du med par 'gyur ro zhes bslab pa'i gzhi 'cha' bar mdzad pa de ni rngams chen po zhes bya'o // rngams[D. 50b] chung du zhes bya ba ni 'di na la la zhig gis don gyi dmigs byung ba gcig cig byas la / bslab pa'i gzhi de dam por ma byas pa de bzhin gshegs pas lan gsun gyi bar du gzigs kyang bslab pa'i gzhi gzhan 'cha' bar mdzad de de ni phyir gso ba tshang ba zhes bya ste rngams chung du zhes bya'o // de yang lhag ma dang bcas pa'i 'dul ba ni btsan par byed do // rung ba ma yin pa'i sbyin pa'i phan yod gang las byung ba'i 'dul ba de ni btsan par mi byed do // 'dul ba la slob par byed do // tshul khriims 'chal pa ni tshul khriims spangs la chos gos rnam dang bcas shing gzhon nu(D. gzhi) chen po yin no // de ni de'i 'dul ba yang btsan par mi byed la gang 'dul ba la snang ba de la de mchog tu chog shes par [P. 51a] byed do // sangs rgyas kyi gsung rab las rkyen du 'tsham pa ston par byed do // de las btus pa de la yang 'dul ba zhes nga zer te / de ni 'dul ba 'dzin pa yin no // yi ge gcig kyang shes te / gang yi ge gcig shes pa de lta bu ni 'jig rten na 'dul ba 'dzin pa yin te / 'di ni mdo sde la 'dul ba 'dzin pa zhes bya'o // de lta na de bzhin gshegs pa'i bstan pa ni dpag tu med do // de bzhin gshegs pa ni bsam gyis mi khyab bo(P. po) //

gsol pa / bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa lta lags kyang bsam gyis mi khyab lags / rtag pa dang / brtan pa dang / ther zug dang zhi ba lags te bsam gyis mi khyab bo(P. po) zhes gzhan dag la yang bstan par 'tshal lo //

bcom ldan 'das kyiis bka' stsal pa // 'od srung chen po dang rus gcig pa legs so legs so // de bzhin gshegs pa ni rdo rje ltar mi shigs pa'i sku 'dsin pa la zhugs pa yin te / de ltar yang dag pa'i lta ba dang / bslab pa la gus par bya'o // de bzhin gshegs pa rdo rje ltar mi shigs pa'i dku dang ldan par yang dag par lta ba'i byang chub sems dpa' sems dpa' chen pos ni ji ltar me long gi ngos la rang bzhin gyi(D. gyis) gzugs brnyan snang ba de bzhin du don dam pa'i sku gsal bar mthong ngo //

rdo rje ltar mi shigs pa'i sku'i phung po zhes bya ba'i le'u ste(P. zhes bya ste le'u)
[D.51a] gnyig pa'o //

〔北本〕384c3-25.

善持律者爲欲調伏衆生故。知諸戒相若輕若重。非是律者則不證知。若是律者則便證知。云何調伏衆生故。若諸菩薩爲化衆生常入聚落不擇時節。或至寡婦姪女舍宅。與同住止經歷多年。若是聲聞所不應爲。是名調伏利益衆生。云何知重。若見如來因事制戒。汝從今日慎莫更犯。如四重禁。出家之人所不應作。而便故作。非是沙門。非釋種子。是名爲重。云何爲輕。若犯輕事如是三諫。若能捨者。是名爲輕。非律不證者。若有讚說不清淨物應受用者。不共同止。是律應證者。善學戒律不近破戒。見有所行隨順戒律心生歡喜。如是能知佛法所作善能解說。是名律師。善解一字。善持契經。亦復如是。如是善男子。佛法無量不可思議。如來亦爾不可思議。迦葉菩薩白佛言。世尊。如是如是。誠如聖教。佛法無量不可思議。如來亦爾不可思議。故知如來常住不壞無有變異。我今善學。亦當爲人廣宣是義。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。如來身者。卽是金剛不可壞身。菩薩應當如是善學正見正知。若能如是了了知見。卽是見佛金剛之身不可壞身。如於鏡中見諸色像。

〔六卷泥洹經〕867b17-c11.

持律師者善教化知時知重知輕。不斷非律亦不斷當。如法律者。云何名爲善教化知時。所教化者或是菩薩或是童蒙。若菩薩教者爲護法故。亦不觀察時非時餘無餘。若開若制隨共所應。聚落塚間自在遊止。護法心故無所違犯。唯除伎兒寡婦姪女諸童女家。學聲聞處所不應行。餘一切處護法菩薩。來往周旋終日無過。是名法師知時教化。知重者。若見如來制戒初始所因起事輕慢心犯及四重法不名出家。是名知重。知輕者。若見比丘一一緣起所犯輕戒。心亦不重或自憶念。如如來戒犯事不滿。是名知輕。不斷有餘律者。若畜奴等諸不淨物。於律有餘不應斷。當常不欲與犯戒者諍。是名非律不應斷當雖非戒律餘經中說與戒律同者。是亦名律不應斷當。隨言說者是名守文不解一字。若能解者三世諸佛所說經中心得無畏。如是佛教深廣無量能護持者。逮成如來法王不可思議。於是迦葉菩薩白佛言。唯然世尊。如來法王不可思議。如來常住非變易法。我當奉持廣爲人說。佛言。善哉善哉。迦葉。奉持金剛不壞法身。欲學等觀如來身者當修金剛不壞法觀。菩薩訶薩如是修者。便得等觀無上法身。

〔試訳〕『持律者 (vinayadhara) とは、[その人は] 教化される人々の能力 (vainayikavaśa) に応じてそれぞれの学処 (śikṣāpada) を【梵文断簡・表1行目】²⁾知ります。即ち、重い[学処] (baliyas) をも知り、軽い[学処] (durbala) をも知ります。また律でないものを根拠 (pramāṇa) と

2) この断簡に数度現われる baliyas (R. 1, 4, 6) は男性形で、durbala (R. 1, 4, 6, 7) は中性で用いられているようである。両語は śikṣāpada (中性) に係る形容詞と見たが、性の違いは整合性を欠く。

せず、律を根拠とします。

教化される人々の能力をどのように知るのでしょうか。菩薩は教化される人々の能力に応じて集落 (grāma) へ入って行きます。その場合、そこへ行く時間を決めたりしないで、彼は家の中 (antargrha), あるいは小屋 (maṇḍapa) の中へ[入ろうと]願います。ただし婦人 (patni) や踊子 (nāṭi) の小屋, 寡婦 (vidhavā) の家, 娼婦の家を除いて。³⁾菩薩比丘は多年に亘って集落の中で活動すべく堪え忍びますが、⁴⁾声聞比丘は堪え忍びません。

重い[学処]と軽い[学処]をどのように知るのでしょうか。重い[学処]とは、ことからの発生 (arthotpatti) を見してから、如来は学処を制定します (prajñāpayati)。「見られた後では、二度とこのように作すべきではありません。あなた方が繰返して四波羅夷罪 (pārājika) を犯すならば、その人は出家者 (pravrajya) ではありません。」と言うように。これが重い[学処]と言われます。

軽い[学処]とは、ある人が何らかのことからの発生を起こすとしましょう。[その人が]かの重大な (gāḍha) 学処を犯していないのであれば、如来は三度それを見してから、別な学処を制定します。これが[出家者として]再び育成すること (nisaraṇa) が完備された (sampūrṇa) と⁵⁾言われ、軽い[学処]と言われます。

【梵文断簡・裏1行目】^{6)……}[持律者は破戒の]余地のある (sāvaśeṣa) 律を根拠としていても、その中にふさわしくない布施 (ākālikadāna) の称賛が[説かれているような]律を根拠にはしないで、律を学びます。

[彼は戒を]放棄しても、袈裟 (kāśāya) を着けて破戒 (duṣṣīla) の大童子 (mahākumāra) となります。その律さえも根拠にしない人が律に対して見られますが、そこに彼の最高の満足 (paramasamtuṣṭi) があります。それ(律)と相応するものとして説いている仏陀の教説、その中から取り出したその[教え]もまた律であると私は説きましよう。以上が持律者です。

また一字 (ekākṣara) だけ知っても、一字を知るそのような人は、世間の持律者です。これが^{……6)}経典にかんする持律者と言われます。

このように如来の教え (tathāgataśāsana) は無量 (aprameya) であり、如来もまた不可思議 (acintya) です。』

3) 「北本」のみが「或至寡婦淫女舍宅。與同住止經歷多年。」(384c6-7) と逆の意味に訳している。

4) R. 3-4, bodhisatvasya bhikṣor vbā (→ vā) kṣamate…… prakkrīḍitum. とあるが、vā は取って読む。菩薩と比丘は同一対象を指している。なお、kṣamate は意味上の主語を属格で置く。

5) チベット語訳の phyr gso ba tshang ba (P. 50b6, D. 50b1) を参考に訳したが、sampūrṇam nisaraṇam (R. 7) と同格で置かれ、この訳は苦しい。これは波羅夷罪のように教団から追放される学処ではなく、再び比丘に復帰できる学処を指す律蔵の用語であろうか。

6) この部分は、断簡の初めに出る「律でないものを根拠とせず、律を根拠とします。」の一文を具体的に説明しているに違いないが、よく理解できない。この部分の訳は全く暫定的なものであることをおことわりしておきたい。

【迦葉菩薩は】言う。『世尊よ、確かに如来もまた不可思議であり、常 (nitya) であり、堅固 (dhruva) であり、永遠 (śāśvata) であり、寂靜 (śānta) であると、他の人々に私は説きましよう。』

世尊は次のように言いました。『大迦葉と同族の方よ、よろしい。よろしい。如来は金剛のような不壊身 (vajrābhedyakāya) を保持しており、このように[如来]の正見 (samyagdarśana) と学問 (śikṣā) に恭順すべきです。金剛のような不壊身を持つ如来を正しく見る菩薩大士は、例えば鏡面に[写った]自分の姿を[見る]ように[如来の]勝義身 (paramārthakāya) を明かに見るのです。』

「金剛不壊身」という第二の集成、^{……8)} 終り。

【解説】 ヘルソレ写本の別々のプレートに収められているが、A-3 と A-4 は同一葉に属する。二つを併せても、中間部分が欠落しているので一葉全体の文章は回収できないが、ローマ字転写では、分かる範囲でチベット語訳から想定して文章を補った。これは「金剛身品」の末尾に見られる持律者にかんする記述の大部分をカバーしている。断簡の裏面最終行の後半は摩耗が激しいが、おそらくこの断簡は「金剛身品」が終る直前までを含んでいる。レニングラード写本の第五葉はB写本に属するが、「金剛身品」の末尾から「名字功德品」にかけてカバーしているので、この断簡と一部重なる部分がある。上記試訳の最後の一文はレニングラード写本から補って訳した。

この断簡は、護持正法のために武器を執ることの有効性を問う迦葉菩薩に対する世尊の答えの一部で、それが裏5行目まで続いている。「金剛身品」では、持戒の人よりも正法を護持するために武器を執る人を高く評価する。従って真の持律者とは、小乗律によって受戒した声聞比丘ではなく、護持正法に生きる菩薩比丘でなくてはならぬ。この断簡に含まれる持律者の説明もそのような点から理解する必要があるように思われるが、正直に言って文章は難しい。それでも断簡の表面の文章は分からないでもない——これも小乗の律典の記述とは随分違うように思われるが——。しかし、裏面になると、5行目の迦葉菩薩の発言の前までは一体何を言おうとしているのか、一応訳してはみたが全く自信がない。この部分の漢訳は二つとも非常に簡素に訳されていて、あまり参考にはならないし、チベット語訳も、基本的には断簡の文章と共通すると思われるが、それだけ読んでもうとうてい理解できるような代物ではない。果たしてチ

7) V. 6, [ma]hākāśya[p](aikag)[o](tra). 断簡では一部の文字しか読めないが、漢訳で迦葉と訳されるだけの『涅槃經』における対告衆の一人が、梵文とチベット語訳 (P. 51a4, D. 50b6) では大迦葉 (Mahākassapa) と同じ一族の者とされている。

8) この部分は断簡の裏面の最後から、恐らく次の一葉にまたがるが、これと重複するレニングラード写本第五葉の表1行目によって失われた梵文が知られる。Bongard-Levin (1986) p. 24, (bodhisa) tvaḥ mahasatva (Read -tvaḥ or -tvo) vyaktaṃ paśyati paramārthakāyam yathādarsātale svarūpapratibīmbakam iti // vajrābhedyakāyo nāma: dvitiya skandhaḥ sam[āp]t[āh] //

ベツト訳者は梵文の原意を分かって訳したのかどうか疑問に感じる。とにかく私の訳文に種々の意味不明な点があることは訳者が一番分かっているので、もし正しい翻訳のための資料を御存じの方は是非御教示いただきたい。

2. B 写本 (B-2, B-3, B-4) ——盛者必衰のことわり——

Recto

1. =vat* durlabhā śraddhā durlabhā tathāgatasya nirnā(!) .. + + + [pa]ścimapinḍa-pātaḍ[ā]napāramitāsampat* // api (tu) cunda mā rodiḥ mā [šo]caḥ tvayā kha=
2. lu prītir utpādayitavyā prāptā maya(!) tathāgatapaścimapinḍapāda(!)dānapāramitāsampad iti / nevaṃ(!) tvayā punar api tathāgato yāci=
3. tavya(s) tiṣṭhatu bhagavāṃṇi iti / buddhānāṃ dharma[satva]m(!) anvekṣasva / anityatām avatarasva prakṛti(m) ca [saṃskārā]ṇāṃṇi avagaccheti imāṃs ca
4. gātha(!) abhāṣata // sarvbe[ṇa] ma[rta]vyam avaśyam asmi[n*] āyu(h) ṣubahv(!) apy upayāti nāśan* sampad vi[patti]pravaṇā ca sarvbā: nirā[śa=]
5. dharme(va!) hi jivalokaṃ: [ja]rā[hi] nāsty eva hi yauvana(m) sadā: rūpāraugyaṃ vyādhayaḥ u[nmūla]ya[mty aṃta]ko jivitaṃ ca .i + + +
6. nāsti sarvatra lok[e]: anityam ai[śvarya]m anityam āyu: bhramaty ajasraṃ duḥkhacakkraṇo 'yaṃ lokatraye na [dhru]va(m) [ki](m)[ci](n nāst)[i] + + + +
7. =vai gatayo bhaveṣu: na ki(m)ci [nā]stīha sukhaṃ bhaveṣu vilopadharmesv(!) avicamcaleṣu .bhayāni nityaṃ samu[padra](vanti jarāmṛti=)
8. vyādhivipatkṛtāni: bhav[ā](m) durāṃtāṃ(!) cabalān(!) asāraṇ*(!) pratyarthinidrohīno(!) viddhi sarvbā[n*] e[ṣu bhra]maṃ kle[śa]jale[na] (lokaḥ) + + +
9. =te kośako[ṭo](!) (ya)thaiva 5 // rame(n) nva(!) ko nv eṣu naro 'rtthakāmo duḥkhe ji(t) sārththa(ś ca) śucau ca kā[y]e + + + + + + + [duḥkh.] + + (vya=)

Verso

1. rtthamūla(m) ca sa(d)e[v]a(!) loke 6 kāmēṣv anitye[ṣu] ca naiti sa(m)gha: vinitarāgo yoniśo .vi[ks.] + + vir(ā) .y. + + + ta .. + (hi=)
2. tvā cchi(t)tvā mokṣ[am eva] pra[yānt]i . ahaṃ tu saṃti[rṇa]mahābhavoyau(!) duḥkhāny atito 'smi sukhaṃ prasanna: tasmād a[naṃ](ta) + + + + +
3. prāpsyāmi mokṣam sarvbasa[mghavya](pe)ta . jarā na mai(!) mṛtyurogo ca nyasta(!) sadā kṣayo nayoṣo(!) vidyate me yāśyām(i) + + + + (jva=)
4. litvā . mā sma kṣayaṃ mā pratici[nta]yadhvaṃ meruṃ yathā paśya tathāgatvatvaṃ nirvbāsyāmi tv ahaṃ samyag adya paraṃ [su](khaṃ) + .ma + + + +

5. =ṣām: tvam (mā) rudo gocaro [ʼyam] (j)i(nā)○nām iti:// atha khalu cunda(h) kar-
māram(!) putrā(!) bhagavantam etad avo[cat* evam eta]d bhagava(nn evam etat*)
6. asmākam api tāva(n) nirvbā[ṇam aci]ntyam maśakabhūtānām•aho tv aha(m) adya
bhagavan bodhisatvakumjar[ā]nām mahānāgonāmam(!) a=
7. rhatām manyuśriḥ(!) kumārakabhūtaḥ(!) pramukhānām kṣiṇāsraṇānām samatām
gataḥ(!) asmim(!): tad yathā n[ā]ma [bha]gavān*(!) anupasampanno da=
8. rhraka(!) svadaivasa(h) pravrajitaḥ saṃghe saṃgha[ga]nana(!)samavasaraṇam gac-
chati•tathāham tathāgatānubhāvena bodhisatvānām mahā=
9. satvānām gaṇanāpraveśena samavasara(ṇam gacchāmi) icchāmi tv aham bhagava-
ta(!) tathāgatasya cirasthit[i](m)•na tu nirvbāṇam vidagdhān(n)avat*

[P. 23a5, D. 22b3] de nas bcom ldan 'das kyis skul byed la bka' stsal pa / skul byed de ni de zhin no / de ni de zhin te / sangs rgyas 'byung ba ni u dum ba ra (P. u dum pa ra, D. u dum bā ra) 'i me tog bzhin du shin tu rnyed par dka'o // dad pa yang rnyed par dka'o // chos thos pa yang rnyed par dka'o // de bzhin gshegs pa yongsu mya ngan las 'da' ba'i tshe zhal zas kyi tha ma'i sbyin pa'i pha rol tu phyin pa phun sum tshogs pa yang rnyed par dka'o // skul byed gzhan yang khyod ma du mya ngan byed par bdag gis de bzhin gshegs pa la zhal zas kyi tha ma'i sbyin pa'i pha rol tu phyin pa phun sum tshogs pa thob bo snyam du dga' ba skyed cig dan / de bzhin gshegs pa la bcom ldan 'das bzhugs su gsol zhes de skad du khyod gsol ba ma 'debs shig / sangs rgyas rnams kyis chos (P. 23b) kyis de kho na nyid la rtogs shig / mi rtag pa nyid la 'jug par gyis shig / 'du byed rnams kyis rang bzhin shes par gyis shig ces bka' stsal nas tshigs su bcad pa 'di dag gsungs so /

/ tshe ni shin tu ring yang 'jig par gyur /
 / 'dir ni thams cad nges par 'chi bar 'gyur /
 / 'tsho ba'i 'jig rten 'jig pa'i chos can yin /
 / 'byor pa thams cad rgud par gzhol bar 'gyur // 1 //
 / rtag tu lang tsho rga bas nges par 'joms /
 / gzugs bzang nad med nad kyis 'jig par 'gyur /
 / srog ni 'chi bas rtsa nas [D. 23a] 'byin par byed /
 / 'jig rten kun na rtag pa ci yang med // 2 //
 / dbang phyug mi rtag tshe yang mi rtag ste /
 / skye bo sdug bsngal 'khor lor rtag tu 'khor /
 / 'jig rten gsum na brtan po ci yang med /
 / srid pa dag na 'gro kun gsog (D. srog) tu 'dug // 3 //
 / srid pa 'jig pa'i chos can rab gyo ba /
 / 'di dag na ni bde ba ci yang med /

/ rga dang 'chi dang nad dang rgud rnam ky /
 / 'jigs pas rtag tu kun nas gtse bar byed // 4 //
 / srid pa mtha' med mi brtan snying po med /
 / thams cad dgra dang 'khu bar shes par gyis /
 / de na 'khor zhing nyon mongs dra ba yis /
 / 'jig rten dkris te dar gyi srin bu bzhin // 5 //
 / 'jig rten dag na ther zug gnod pa'i gzhi /
 / rtag tu 'bras ltar sdug bsngal 'brel ba gang /
 / mi gtsang lus dang 'dod pa de dag la /
 / phan 'dod sdug bsngal bsal 'dod su zhig dga' // 6 //
 / mi rtag 'dod pa rnam la chags pa med /
 / tshul bzhin rtog pas 'dod chags 'bral bar 'gyur /
 / de nas yang dag mthong na 'dod chags 'bral /
 / de dag spangs bcad grol ba nyid du 'gyur // 7 //
 / nga ni srid pa'i chu chen legs par bgal /
 / nga ni sdug bsngal rnam 'das bde bar zhugs /
 / de phyir ngas ni mtha' yas spro med pa /
 / chags pa kun bsal thar pa thob par gyur // 8 //
 / nga la rga dang na dang 'chi ba med /
 / nga la rtag tu tshe yang zad pa med /
 / nga ni me ltar 'bar te 'gro 'gyur gyis /
 / khyod kyis nga ni med 'gyur ma sems shig // 9 //
 / de bzhin gshegs nyid lhun po 'dra bar [P. 24a] ltos /
 / nga deng yang dag mya ngan 'da' bar 'gyur /
 / bde mchog de ni nga yis chos nyid de /
 / rgyal rnam spyod yul yin gyis khyod ma du // 10 //

de nas bcom ldan 'das la mgar ba'i bu skul byed kyis 'di skad ces gsol to // bcom
 ldan 'das de ni de legs so // de ni de legs te / mya ngan las 'das pa bdag gis kyang
 bsam gyis mi khyab lags na / sbrang bu dang 'dra ba'i sems can theg pa dman pa
 [D. 23b] gzhan dag gis lta smos kyang ci 'tshal / bcom ldan 'das kye ma bdag deng
 du byang chub sems dpa' mi mchog skal ba chen po dang ldan pa / mchod par 'os pa
 'jam dpal gzhon nur gyur pa la sogs pa dang / zag pa zad pa rnam dang mnyam pa
 nyid du gyur to // bcom ldan 'das dper gsol na / gsar du bsnyen par rdzogs pa gzhon
 nu yang rab tu byung ba de nyid kyis nyin par nas dge 'dun gyi nang na dge 'dun
 du bgrang zhing yan dag par 'dus par 'gyur ba de bzhin du / bdag kyang de bzhin
 gshegs pa'i mthus byang chub sems dpa' chen po rnam kyis grangs su gtogs shing
 yang dag par 'dus lags so // bcom ldan 'das bdag ni de bzhin gshegs pa yun du bzhugs

par 'tshal gyi / kha zas tshigs pa bzhin du mya ngan las 'da' bar gshegs par mi
'tshal lags so //

「北本」373a19-c7.

佛告純陀。如是如是。如汝所說。佛出世難如優曇花。值佛生信亦復甚難。佛臨涅槃最後施食。能具足檀(波羅蜜)復倍甚難。汝今純陀。莫大愁苦應生踊躍喜自慶幸。得值最後供養如來。成就具足檀波羅蜜。不應請佛久住於世。汝今當觀諸佛境界悉皆無常。諸行性相亦復如是。即為純陀而說偈言。

- (1)一切諸世間 生者皆歸死
壽命雖無量 要必當有盡
夫盛必有衰 合會有別離
- (2)壯年不久停 盛色病所侵
命為死所吞 無有法常者
- (3)諸王得自在 勢力無等雙
一切皆遷動 壽命亦如是
衆苦輪無際 流轉無休息
- (4)三界皆無常 諸有無有樂
有道本性相 一切皆空無
可壞法流轉 常有憂患等
恐怖諸過惡 老病死衰惱
- (5)是諸無有邊 易壞怨所侵
煩惱所纏裹 猶如蠶處繭
- (6)何有智慧者 而當樂是處
此身苦所集 一切皆不淨
扼縛癰瘡等 根本無義利
上至諸天身 皆亦復如是
- (7)諸欲皆無常 故我不貪著
離欲善思惟 而證於真實
究竟斷有者 今日當涅槃
- (8)我度有彼岸 已得過諸苦

「六卷泥洹經」858c22-859b21.

爾時世尊告純陀曰。如是純陀。佛與於世甚難得值。猶如海沙一金剛粟。人身難得又復過是。具足信心亦復甚難。猶如盲龜值浮木孔。得遇如來臨般泥洹。最後所供檀波羅蜜復難於彼。如優曇鉢華時一現耳。汝今純陀。莫生憂惱應大歡喜。所以者何。當作是念。今日如來與諸大眾受我最後大施供養。以是善利故應歡喜。汝今純陀。勿請如來長住此世。當觀世間皆悉無常。一切衆行性亦如是。爾時世尊即為純陀而說偈言。

- 正使久在世 終歸會當滅
雖生長壽天 命亦要之盡
事成皆當敗 有者悉磨滅
壯為老所壞 强者病所困
人生皆有死 無常安可久
無色無強力 亦無有壽命
妻子及象馬 錢財悉復然
世間諸親戚 眷屬皆別離
三界大恐怖 乃至惡道苦
斯等悉歸滅 安可不厭患
有有生老相 所謂慚恥法
計常所侵欺 而謂為長存
清涼殊勝法 遠離於恐怖
亦得離生老 病死之大患
亂心愚癡垢 此等謂皆度
無量無有餘 妙勝之寂滅
其義實無常 亦非蔭護法
但是衆苦聚 虛偽非堅固
無堪無所忍 亦非可常保

是故於今者 純受上妙樂
 以是因緣故 證無戲論邊
 永斷諸纏縛 今日入涅槃
 (9)我無老病死 壽命不可盡
 我今入涅槃 猶如火火滅
 純陀汝不應 思量如來義
 (10)當觀如來性* 猶如須彌山
 我今入涅槃 受於第一樂
 諸佛法如是 不應復啼哭

爾時純陀白佛言。世尊。如是如是。誠如聖教。我今所有智慧微淺猶如蚊虻。何能思議如來涅槃深奧之義。世尊。我今已與諸大龍象菩薩摩訶薩。斷諸結漏文殊師利法王子等。世尊。譬如幼年初得出家。雖未受具即墮僧數。我亦如是。以佛菩薩神通力故。得在如是。大菩薩數。是故我今欲令如來久住於世不入涅槃。譬如飢人終無變吐。願使世尊亦復如是。常住於世不入涅槃。

*「如來性」は元・明・宮本による。

斯等如蠶虫 結網而自纏
 輪迴三界中 無一可樂處
 唯有生老苦 病死之大患
 知義者能見 壽命日夜流
 衰滅欺誑法 恐怖無暫歡
 疾病憂悲惱 諸非義盈滿
 欲火輪熾然 衆難競來集
 智者永不住 受斯大苦痛
 曉了五欲患 是非功德利
 離欲無所貪 明了見真實
 是爲解脫觀 捨除諸生者
 呵責害結怨 究竟乘諸有
 從此疾離一切數 猶如薪盡盛火滅
 妙色湛然常安隱 不爲衰老所滅磨
 無量疾苦不逼迫 壽命長存無終極
 無邊苦海悉已度 不隨時節劫數遷
 快哉如來超三界 生死輪迴不復惑
 汝莫觀我永滅度 猶如須彌時大海
 純陀我今當泥洹 平等正法永安樂
 諸明智者聞斯義 諦了分明不憂惑
 莫以生死危脆身 微淺智慧測量佛
 我身真實處安隱 唯是天尊能諦了

爾時純陀白佛言。善哉善哉。世尊。我等凡劣得知如來泥洹不可思議。世尊。我今便得與彼大人諸菩薩衆及諸羅漢等無有異。如文殊師利童子及阿羅漢。此等衆中若有最初受戒。即受戒曰得在僧數。我今凡劣亦復如是。蒙佛威神得同斯等大賢衆數。唯然世尊。願使如來長存於世不願泥洹如燋敗種。

B-2, 3, 4 の三枚の断簡を併せて一葉の九割ほどが回収されるが、これには誤写が多い。また十偈よりなる詩頌を含むが、欠落しているのはちょうどその詩頌の部分に重なる。この断簡についてのみ誤写を訂正し、欠落部分を可能な限りチベット語訳から補い、さらに写本の書き

癖を正規の語形に戻して、以下のように梵文を再構成した。なお、断簡に先立つ一文も梵文を想定した。翻訳はこれに基づく。ただし詩頌は難しく梵文すべては想定できなかった。チベット語訳から補って翻訳することにしたい。

Sanskrit Version Reconstructed

atha khalu bhagavāṁś cundam āmantrayām āsa / evam etat cundaivam etat /
 atidurlabhas tathāgatasyotpāda udumbarapuṣpa(R.1)vat / durlabhā śraddhā / durlabhā
 tathāgatasya nirvāṇakāle paścimapinḍapātadānapāramitāsampad // api tu cunda mā
 rodiḥ mā śocaḥ tvayā kha(R.2)lu prītir utpādayitavyā prāptā mayā tathāgatapaścima-
 pinḍapātadānapāramitāsampad iti / naivaṁ tvayā punar api tathāgato yāci(R.3)tavyas
 tiṣṭhatu bhagavān iti / buddhānām dharmatattvam anvavekṣasva / anityatām avatara-
 sva prakṛtiṁ ca saṁskārāṇām avagaccheti / imāṁś ca (R.4) gāthā abhāṣata //

sarveṇa martavyam avaśyam asmin

āyuh subahv apy upayāti nāśam /

sampad vipattipravaṇā ca sarvā

nirāśa(R.5)dharmaiva hi jivalokam // 1 //

jarāhi nāsty eva hi yauvanam sadā

rūpāraugyam vyādhaya unmūlayanti /

antako jīvitam ca + + + +

nityam kiṁcin (R.6) nāsti sarvatra loke // 2 //

anityam aiśvaryam anityam āyuh

bhramaty ajaram duḥkhacakrajano 'yam /

lokatraye dhruvam kiṁcin nāsti

+ + + (R.7) =vai gatayo bhaveṣu // 3 //

na kiṁci nāstīha sukham bhaveṣu

vilopadharmeṣv avicamcaleṣu /

bhayāni nityam samupadravanti

jarāmṛti(R.8)vyādhivipatkṛtāni // 4 //

bhavān durantāṁś capalān asārān

pratyarthinidrohīṇo viddhi sarvān /

eṣu bhraman kleśajalena lokaḥ

+ + + (R.9) =te kośakīṭo yathaiva // 5 //

ramen nu ko nv eṣu naro 'rthakāmo

duḥkhe jit sārthas ca śucau ca kāye /

+ + + + + + duḥkh. + +

+ vya(V.1)rthamūlam ca sadaiva loke // 6 //

kāmeṣv anityeṣu ca naiti saṅgaḥ
 vinitarāgā yoniśo vikṣ. +
 ++ virā .y. +++ ta .. +
 hi(V.2)tvā cchittvā mokṣam eva prayānti // 7 //
 ahaṃ tu saṃtīrṇamahābhavaugho
 duḥkhāny atīto 'smi sukhaṃ prasannaḥ /
 tasmād ananta= +++++
 (V.3) prāpsyāmi mokṣam sarvasaṅgavyapetaḥ // 8 //
 jarā na me mṛtyurogaś ca nyastaḥ
 sadā kṣayo nāyūṣo vidyate me /
 yāsyāmi +++++ jva(V.4)litvā
 mā sma kṣayaṃ mā praticintayadhvaṃ // 9 //
 meruṃ yathā paśya tathāgatatvaṃ
 nirvāsyāmi tv ahaṃ samyag adya /
 paraṃ sukhaṃ + .ma +++++ (V.5) =śāṃ
 tvaṃ mā rudo gocaro 'yaṃ jinānām // 10 //
 iti // atha khalu cundaḥ karmāraputro bhagavantam etad avocat / evam etad bhaga-
 vann evam etat / (V.6) asmākam api tāvan nirvāṇam acintyaṃ maśakabhūtānām /
 aho tv ahaṃ adya bhagavan bodhisattvakuñjarānām mahānāgānām a(V.7)rhatām
 mañjuśrīkumārakabhūtapramukhānām kṣiṇāsravāṇām samatām gato 'smi // tad yathā
 nāma bhagavan anupasaṃpanno da(V.8)hrakaḥ svadaivasah pravrajitaḥ saṃghe saṃgh-
 aḡaṇanāsamavasaraṇaṃ gacchati tathāhaṃ tathāgatānubhāvena bodhisattvānām mahā-
 (V.9)sattvānām gaṇanāpraveśena samavasaraṇaṃ gacchāmi / icchāmi tv ahaṃ bhaga-
 van tathāgatasya cirasthitim na tu nirvāṇaṃ vidagdhānavat //

【試訳】 そこで世尊はチュンダ（純陀, Cunda）に次のように言いました。『チュンダよ、それはその通りです。それはその通りです。ウドゥンバラの花（優曇花）のように、如来の誕生は極めて得難いのです。⁹⁾【梵文断簡・表1行目】信仰（śraddhā）は得難いのです。如来の涅槃の時に、最後の食事（paścimapinḍapāta）【を与えるという】布施波羅蜜の完成（dānapāramitāsāmpad）は得難いのです。だからチュンダよ、泣くことはありません。嘆くことはありません。むしろあなたは喜び（prīti）を生ずべきです。「私は如来の最後の食事【を与えるという】布施波羅蜜の完成を獲得したのだ。」というように。あなたは再び如来に求めてはなりません。「世尊よ、【この世に】とどまって下さい。」というようには。諸仏の教えの真実（dharmaṭattva）を考え

9) Tib. ではこの次に「教え（dharma）を聞くことは得難いのです。」（P. 23a6, D. 22b3-4）という一文が入っているが、梵文には欠けている。

てみなさい。無常ということ (anityatā) を分かりなさい。諸行の本性 (prakṛti) を理解しなさい。』

そして[世尊は]次のような詩頌を語りました。

(1) 寿命 (āyus) 多しといえども消失 (nāśa) に至り、すべてのもの、ここに必ず死ぬべし。繁栄 (sampad) はすべて不幸 (vipatti) に傾斜し、実に生者の世間 (jivaloka) は破滅 (nirāśa) を性質とす。

(2) 老い (jarā) は常に青春 (yauvana) を壊し、病い (vyādhi) は美貌 (rūpa) と健康 (ārogya) を根こそぎにし、死 (antaka) は脈から命 (jivita) を追出す。一切世間に常なるもの何らあることなし。

(3) 権勢 (aiśvarya) は無常にして、寿命は無常なり。人 (jana) は苦しみの輪 (duḥkhacakra) に絶えず流転す。三世間に堅固なるもの (dhruva) 何らあることなし。すべての趣 (gati) は生存 (bhava) の内に空しくとどまりぬ。

(4) ここに楽なるもの何らあることなし。喪失 (vilopa) を性質とし、動揺し続ける (avicaṃcala¹¹) 生存の中、老いと死と病いと不幸 (vipat) は恐怖 (bhaya) を作り、[恐怖は]常に[人を]襲う。

(5) 終りなき (duranta) 移ろう (capala) 不堅牢なる (asāra) 生存すべてを、敵意あるもの (pratyarthin), 怨あるもの (nidrohin) と知るべし。世間はその中に流転し、蚕 (kośakiṭa) の如く煩惱の網に捕捉さる。

(6) 義利を求め (arthakāma), 苦を征し (duḥkhe jit), 浄身 (śuci-kāya) を求むる (sārtha) 人 (nara), 誰かこれ等を楽しまん。【梵文断簡・裏1行目】世間における無益の根本 (vyarthamūla), 永遠なるものを。[因と]果の如く常に苦に相應せるものを。¹²⁾

(7) 無常なる愛欲 (kāma) に貪著 (saṅga) はなし[と], 如理に (yonīśaḥ) 観察して貪欲を離れ (vinitarāga), 尋いで正見せば、彼等離貪の者等は、捨し終り、断じ終りて、解脱¹³⁾に到達す。

10) 梵文は nāsty であるが Tib. は nge bar 'joms と訳し、梵文を naśati と見ている。ここでは nāsty を naśati の意味に取っておく。

11) avicaṃcala を Tib. は rab gyo ba とのみ訳している。一応 √cal の intensive 派生語の二重否定と理解したが、書写生の誤写かもしれない。

12) 第6偈は pāda c がほとんど欠け、内容も難しい。特に偈の後半の訳には自信がない。チベット語訳も難しい。Tib. pāda c の mi gtsang lus は、Tib. だけ見れば、不浄なる身と読んでしまうが、梵文には śucau ca kā[ye] とのみあって、否定辞はない。mi は否定辞ではなく、nara (人) の訳語と見るべきである。「北本」にも「不浄」の語が見えるが、「北本」は偈の前半を梵文通りではなく、すべての語を逆から訳していると見れば納得できる。

13) 「北本」では第7偈の主語は如来を意味する一人称単数であるが、写本では prayānti と三人称複数で書かれている。チベット語訳も一人称ではない。ここでは prayānti を取り、それに従って、写本に現れる pāda b の vinitarāgo を再構成梵文では vinitarāgā と訂正した。また pāda a の naiti は Tib. の med からすると nāsti の誤写かもしれない。

2. B写本 (B-2, B-3, B-4) ——盛者必衰のことわり——

(8) われは生存の大洪水 (mahābhavaughā¹⁴) を渡り、苦を越え、案に帰入せり。故に、われに終りなき戯論なく、すべての貪著を離れ、当に解脱を獲得せん。

(9) われに老いなく、死も病いも捨せり。われに寿命の尽きること常になし。われは[野]火の如く燃えて当に進まん。汝、われを滅尽すと思うことなかれ。

(10) スメール山[を見る]如く如来を見よ。われまさに今日涅槃に入らん。これ最高の安楽にして、わが法にかなない (dharmatā), 勝利者 (jina) 等の領域 (gocara) なり。汝、嘆くことなかれ。

そこで鍛冶屋の子チュンダは世尊に次のように言いました。『世尊よ、それはその通りです。それはその通りです。蚊 (maśaka) の如き私達にとって[如来の]涅槃は不可思議です。嗚呼、世尊よ、[あなたの教えを聞いて、] 今日私はマンジュシュリー童子を始めとする、漏を尽くし (kṣiṇāsrava), 尊敬に値する (arhat¹⁷), 大象 (mahānāga) の[如き]最上の菩薩 (bodhisattvakuñjara) たちに等しいものとなりました。例えば、世尊よ、まだ具足戒を受けていない (anupasaṃpanna¹⁸) 若者 (dahraka) でも、出家してその日から¹⁹、サンガの中で、サンガの一員に数えられます。それと同様に、私は如来の加護力 (anubhāva) によって、菩薩大士の一員となりました。しかし世尊よ、[それでもなお]私は如来が[この世に]長くとどまること (cira-sthiti) を願います。すでに消化された食物 (vidagdhāna) [を人が願わない]ように、[如来の]涅槃を[願いま]せん。』

【解説】 この一葉は「北本」では「寿命品」の中程、「六卷泥洹經」では「長者純陀品」の一部に相当する。チュンダから最後の供養を受けてまさに涅槃に入らんとする仏陀、仏陀から選ばれたことに歓喜しつつも、仏陀の入滅に根拠を与える最後の供養に躊躇し、嘆き悲しむチュンダ、仏陀は美しい詩頌をもってチュンダに世の無常を歌う。横超慧日博士の言では、この詩頌は「いわゆる盛者必衰会者定離の典拠であって、人口に膾炙する平家物語の冒頭の文に娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわすといっておごれるもの久しからざるを説いたのはこれに基づくのである」とのことである。

14) 写本では saṃti[r̥ṇa]mahābhavoyau と書かれているが、これでは読めない。Tib. には chu (水) の語があるので、不確かであるが -aughā を想定した。-toya とすれば一音節多くなる。

15) 梵文だけで判断すれば、tathāgata(m) tvam と読みたいが、Tib. は de bzhin gshegs nyid と訳している。北本も「如来性」と訳している。

16) Tib. はここに小乗云々の一文が入っているが (P. 24a2, D. 23a7-b1), この一文は梵文にも両漢訳にも存在しない。

17) Tib. は arhat を通常の dgra bcom pa ではなく、mchod par 'os pa (P. 24a3, D. 23b1) と訳している。ここでは arhat は菩薩にかかる形容詞である。

18) Tib. は「新たに具足戒を受けた」gsar bsnyen par rdsogs pa (P. 24a4, D. 23b2) と訳している。

19) svadaivasa を「その日の」という形容詞と見たが、他での用例は確認していない。

20) 横超慧日『涅槃經』(サーラ叢書26, 平楽寺書店, 1981) p. 93 参照。なお博士はこれらの詩頌の

写本から回収される梵文では、詩頌は10偈ある。写本では第5偈と第6偈の後に数字で番号が書かれている。10偈は基本的にはウパジャーティで書かれているが、随所にそれに合わない音節が見られる。2a, 8d は12音節, 10b は10音節ある等、不可解な箇所も多い。特に第2偈はウパジャーティからは掛け離れている。これらをどう処理すればよいか、唯一の写本で、誤写も多く、さらに詩頌の部分が断簡の欠落箇所にかかるとあっては、これ以上は如何ともしがたい。なお、これらの詩頌は、例えば『法華経』のそれとは異なり、全体としてはサンスクリットで理解できるが、一部にはブラークリットも見られる。²¹⁾

ところでこれらの詩頌は、チベット語訳では梵文に沿って、1パーダ9音節よりなる10偈で訳されているが、漢訳ではまったく自由に訳されていて、漢訳からでは梵文が10偈であることなどとうてい分からないであろう。上に挙げた両漢訳のうち、「北本」には梵文10偈に対応する文章に番号を入れることができたが、「六卷泥洹経」ではそれすらも困難である。

また、内容的にも漢訳には不可解な点が多々ある。例えば第9偈の「われは火の如く燃えて当に進まん。」に対する漢訳は、「北本」では「我今入涅槃 猶如火滅」と訳されているが、これでは全く意味が逆である。これら10偈の内容は、素直に読むと、前半5偈で世の無常を説き、後半5偈でその無常なる世に超然と存在する仏陀の姿を説いている。火が消えるように仏陀が死んでしまっただけではどうにもならない。仏陀にとって涅槃に入るとは、単純なる死ではなく、むしろ無常を見据えて、しかもそれを超えて進んでゆくことに他ならない。従って「北本」では、同じ9偈の「汝、われを滅尽すと思うことなかれ」をそのまま訳せば内容的に矛盾するため、「純陀汝不應 思量如来義」とぼかしている。このように言うと、漢訳の原文はこれとは異なっていたと思われる方がいるかもしれないが、10偈全体の内容構成からすればそうは言えないであろう。これは明かに漢訳者の読解力不足である。

なお、C写本の断簡 C-1 の裏5行目から7行目は、この断簡の表1行目から4行目と重複する。その部分を本書末尾のローマ字転写から再録すれば次の通り。

5. ///(=piṇḍapā)tadānapāramitāsampat* // api tu c(unda)///
6. /// naivam tvayā puna[r a]pi tathāgato yāci(tavyas)///
7. ///(gā)[thā] abhāṣata // sarvbeṇa marttavya[m a](vaśyam)///

C-1 は小さな断簡ではあるが、これを見て注意を引くのは、5行目の api tu, 6行目の naivam 7行目の (ga)[thā] と、B-2, 3, 4 では誤写されている語がいずれも正確に写されていることである。この点からでも、ここで取り上げている断簡に誤写の多いことが分かっていただけだと思う。

うち、第1偈から第8偈前半までに対応する部分を「北本」から現代語訳している。山口益編『仏教聖典』(平楽寺書店, 1974) pp. 948-950 参照。

21) jarāhi (2a) → jarābhir, kimci (4a) → kimcin etc.

とにかく、この断簡の発見によって、不完全ではあるが、『涅槃経』の中で最も著名な一連の詩頌が回収されたのである。今後は、この方面の専門家によるより完全な詩頌の復元に期待したい。

3. C写本 (C-4) — 一闡提について —

Recto

1. kṛtā [a]pi kṣi[praṃ pra] .. +++++ (maṃ)jari[vaṃ]t[i bha]vaṃ[ti] .ā .. .i ..
.aṃti vṛkṣasaṃkhy[ām] .. [gacchaṃti] [ya]di toyam la[bhaṃte]
e[va]m e=
2. veḥa (śā)sane pārājikānan(t)aryakāri[ṇaḥ] śallakīka[rṇikā]ravat* tālamastaka[cch-]
(innā) [asya] sūtrasya [śra]va[ṇ(a)]mā]treṇa alaṃ cittā [a]pi bodhau [rohaṃ=]
3. ti narakuṃjarāḥ (/) yathā khadirati○[nd]ukavṛkṣā cchinnā naiva roha[m]ti da-
gdhabijavat* evam iccha[nti]kāḥ satv[ā] bahuśo 'pīdam sūtraṃ [śru]tvā bodhau nai-
va vi=
4. rohaṃti dagdhabija[vat*] (/) yathā ○ va[rṣa]tsv api mahā[me](ghe)[ṣu] ekaghane-
na^{a)}(!) salilaṃ naivāvatiṣṭhate evam asmim sūtrameghe dharmam varṣam pravaraṣati
[bo=]
5. dhihetur icchaṃtike [n]aivāvatiṣṭhate ○ ekaghano hi sa vajravat* (//) icchaṃti-
[kāḥ ka]lyāṇakṛtaṃ na paśyata^{b)}(!): paśya^{c)}(m)ti tu pāpaṃ nidiśitum^{d)}(!) garhitum^{d)}(!)
[ca]
6. sukr(ta)[m b]o[dh]i[r] i[ty] arthaḥ (/) na vyaiti n[ā]gacchatity arthaḥ (/) [san]dheti
kalyāṇam ity arthaḥ (/) saṃndhākarmaviśiṣṭakalyāṇam kasya nāgacchati (/) bha-
drakarma icchaṃtikasya nāga[ccha=]
7. ti (/) ++++++ lam satva icchaṃtikā iti .i ++++++ [ki]m mūlā-
(m)gaṃ sūtrapratikṣepaḥ (/) [ta]smād bhetavyam sūtrapratikṣepako hi dāruṇam

Verso

1. na +++++ (paṇḍitā)ḥ dhīrā mahāpathai^{e)}(!) saṃti [saṃskā](ra) ++++++
.y. ti gacchaṃti goram^{f)}(!) ma sam tato nāsādayaṃti durmedhasaḥ [taṃ ca
muddha=]
2. raṃta.[iva] .. narā āsādayaṃti .. [paṇḍ]it[ā] dhīr[ā] na[rendra] iva mahāpathe (/)
[kaḥ] kṛtaṃ na paśyati (/) saṃsārakotyāṃ sa na paśyati (/) arthaṃ bhāṣiṣye:
[saṃkṣepa]samu=
3. ccayam tasmād bhetavy[āḥ] (pa)[ra]madāru○nā[h] (/)yadā sa[rvbasa]tvā [e]kama-

naso bhūtvā anuttarāṃ saṃmyaksaṃbodhim abhisambotsyate•tadā [i]ccham[tika-]
(ḥ pā=)

4. po 'pi sam(bo)[tsyate] dā [pa○rām] bodhi(m /) sarvba[kr](tam sa) na paśyati•
evam jāniṣva viśārada (/) kasya kṛtam na paśyati•tathāgatas[y]a (/) [yadā] sa-
[rvbasa=]
 5. tvā anuttarāṃ saṃmyaksaṃbodhim abhi○sambotsyate saṃsāra .. [tā] tadā tathā-
gatasya kṛtam na vinakṣya(ti / ta)dā [par]inirvbāyātyaṃtaparinirvbāṇe[na•ani=]
 6. [t]yo bu[ddho bhaviṣya]ti•[d]īpa ivendhana .. .ā [da]gdhir iva icchamtika-
sya pāpakarma [gar]hitam nindita(m) ca (/) ya[d api] bodhihetukam punya[m]
ta(d) [y](adi) b. . .
 7. ja[vi] + + + + + .. (u)cya[te] mahā(yāne)
[sam] ti nāma va .. .i (buddhā)[nām e] .. (dha)[rmatā]•[kṣira](m) [vā
pāpaka=]
- a) Read ekaghane. b) Read paśyanti. c) Read ninditam. d) Read garhitam.
e) Read mahāpathe. f) Read gauram.

[P. 132b7, D. 128b7] dper na shing sa la ki dang / dong ka'i shing dang / ka na ka pra
bha shing dang / shing [D. 129a] bal gyi shing dang / bal mi ki dang / kar na bal lya
dang / skan da sta ba dang / ke ta ki dang / bad tra ka dang / bi ra na dang / ro tsa na
rnams ni bcad de dum bur gtubs nas khyer te khyim du bzhag (P. gshag) kyang gal
te chu'i rlan dang phrad phan chad (P. cid, D. cad) myur du skye bar 'gyur te / lo ma
kha 'bub dang / snye ma [P. 133a] dang ldan zhing yal ga dang sdong bu dang ldan
te / shing ljon pa zhes bya ba'i grangs su gtogs par 'gyur ro // de bzhin du bstan pa
'di la yang pham pa byed pa rnams dang / mtshams med pa byed pa rnams shing ta
la'i mgo bcad pa bzhin du gyur pa las / mdo ste 'di thos ma thag tu sems bskyed pa
dgos par mi 'dzin gyis kyang mi mchog de dag ni shing sa la ki(P. li ka) dang / dong
ka'i shing la sogs pa bzhin du byang chub tu 'khrung par 'gyur ro //

dper na seng ldeng dang tin du ka'i shing ljon pa rnams ni bcad phan chad(P. D.
cad) sa bon tshig pa bzhin du skye bar mi 'gyur ba de bzhin du 'dod chen sems cad
rnams kyis kyang mdo sde 'di lan mang du thos kyang sa bon tshig pa bzhin du
byang chub tu 'khrung bar mi 'gyur ro //

dper na sprin chen po las char bab tu zin kyang sa phyogs byil bor 'dug pa la
chu mi chags pa de bzhin du mdo sde chen po'i sprin 'di las chos kyi char 'bab mod
kyi / 'dod chen pa la byang chub kyi rgyu mi chags te / de ni rdo rje bzhin du byil
bor 'dug pa'i phyir ro //

'dod chen pa rnams kyis ni dge ba byas pa ni mi mthong gi / smad pa dang /
bshung ba'i sdig pa gang yin pa ni mthong ngo // legs par byas pa ni byang chub kyi

don to // mi 'ong ba ni mi phrad pa'i don to // dgongs pa ni dge ba'i don to // dgongs
 pa las khyad par du 'phags pa'i dge ba su la mi 'ong zhe na / las bzang po ni 'dod
 chen pa la mi 'ong ngo // dge ba'i sems su la mi 'ong zhe na / 'dod chen pa zhes
 grags pa ni dge ba med pa'i sems can nga rgyal gyi dbang du gyur pa yin te / 'dod
 chen pa de la mi 'ong ngo // gzhi'i yan lag ci zhe na / mdo sde spong ba'o // de bas
 na mdo sde spong ba ni 'jigs su rung ba yin te / des 'jigs par gyis shig /

/ de yi phyir [D. 129b] na mkhas pa brtan po rnams /

/ lam po che na 'du byed yod pas 'jigs /

/ byis pa(P. byas pa) rnams ni lam chen 'jigs pa med /

/ nga rgyal dbang gyis mi bzad 'gro bar 'gyur /

/ des na blo ngan rnams kyis de mi 'thob /

/ spre'u rnams zla ba snyab(P. rnyab) par byed [P. 133b] pa bzhin /

/ mi yi dbang po lam chen zhugs pa ltar /

/ mkhas pa brtan po rnams kyis thob(P. theb) par 'gyur /

gang gis byas pa mi mthong zhe na / 'dod chen pa sdig can gyis byas pa mi mthong
 ste // des 'khor ba'i mtho'i bar gyi byas pa mi mthong ngo // ngas de'i don mdo
 bsdus te bstan gyi / mchog tu 'jigs su rung bas 'jigs par gyis zhig / gang gi tshe sems can
 thams cad sems rtse gcig tu 'thun par gyur te bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i
 byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur srid na / de'i tshe 'dod chen
 pa sdig can byang chub mchog tu mngon par rdzogs par 'tshang rgya yang srid pa
 zhig na / de ni byis ba mi mthong ba yin te / dpa' bo khyod kis de ltar shes par gyis
 shig / su'i byas pa chud mi za zhe na / de bzhin gshegs pa'i byas pa chud mi za'o //
 gang gi tshe 'khor ba na gnas pa'i sems can thams cad bla na med pa yang dag par
 rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par 'tshang rgya ba de'i tshe de bzhin
 gshegs pa'i byas pa chud za bar 'gyur te / de'i tshe gtan du yongs su mya ngan las
 'das pa yongs su mya ngan las 'das nas mar me dang shing zad pa'i me bzhin du
 sangs rgyas mi rtag par 'gyur ro // de bzhin du 'dod chen pa'i sdig pa'i las kyang
 smad pa dang bshung ba yin no // byang chub kyi rgyu'i bsod nams gang yin pa de
 gal te byang chub sems dpa' spong bar byed pa de yang theg pa chen po la smod pa
 dang bshung ba zhes bya'o // de ste mi spong na ni de ltar rdzogs pa'i sangs rgyas
 zhes bya ba'i ming thogs par 'gyur te / de ni sangs rgyas rnams kyi chos nyid do //

/ 'o ma dang ni sdig pa'i las /

/ mod la ldang bar mi 'gyur te /

/ me ni(D. na) thal bas gyogs pa la /

/ byis[D. 130a] pa song na tshig pa bzhin /

「北本」418b13-419a3

如馬齒草娑羅翅樹尼迦羅樹。雖斷枝莖續生如故。不如多羅斷已不生是諸衆生亦復如是。若得聞是大涅槃經雖犯四禁及五無間。猶故能生菩提因緣。一闍提輩則不如是。雖得聽受是妙經典而不能生菩提道因。復次善男子。如佉陀羅樹鎮頭迦樹斷已不生及諸焦種。一闍提輩亦復如是。雖得聞是大涅槃經而不能發菩提因緣猶如焦種。復次善男子譬如大雨終不住空是大涅槃微妙經典亦復如是。普雨法雨於一闍提則不能住。是一闍提周體密緻。猶如金剛不容外物。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛說偈。

不見善不作 唯見惡可作
是處可怖畏 猶如險惡道

世尊。如是所說有何等義。佛言善男子。不見者謂不見佛性。善者即是阿耨多羅三藐三菩提。不作者所謂不能親近善友。唯見者見無因果。惡者謂謗法等大乘經典。可作者謂一闍提說無方等。以是義故一闍提輩無心趣向清淨善法。何等善法謂涅槃也。趣涅槃者謂能修習賢善之行。而一闍提無賢善行。是故不能趣向涅槃。是處可畏謂謗正法。誰應怖畏所謂智者。何以故。以謗法者無有善心及方便故。險惡道者謂諸行也。迦葉復言。如佛所說。

云何見所作 云何得善法
何處不怖畏 如王夷坦道

是義何謂。佛言善男子。見所作者。發露諸惡從生死際所作諸惡悉皆發露至無至處。以是義故是處無畏。喻如人王所遊正路。其中盜賊悉皆逃走。如是發露一切諸惡悉滅無餘。復次不見所作者。謂一闍提所作衆惡而不自

「六卷泥洹經」892b8-c8

復次善男子。譬如諸樹斷其枝幹尋生如故。如是衆生作諸罪業。聞摩訶衍般泥洹經生菩提因。如多羅樹斷則不生。一闍提輩亦復如是。終不能生菩提柯葉。復次善男子。譬如空中興大雲雨而彼雨滯不住空中。此摩訶衍般泥洹經普雨法雨。於一闍提雨則不住。

不修真實亦不來 彼究竟處莫能見
謂彼諸惡不善業 則爲世間大鄙陋

其善修者謂修菩提。不來者。若自不修終不自得。真實者微密勝業。如是勝業於誰不來謂一闍提。永離善心名一闍提諸增上慢一闍提輩以何爲本。誹謗經法不善之業以是爲本。誹謗經法凶逆暴害。當知是等智者所畏。譬如險道多諸盜賊。暴慢愚夫不知恐畏肆意直往爲賊所害。大力法王遊行此路無有恐畏。不見究竟處者。永不見彼一闍提輩究竟惡業。亦不見彼無量生死究竟之處。我略說彼諸惡積聚。若具聞者甚可怖畏。假令一切衆生一時發意成無上道。此諸正覺猶不見彼一闍提輩諸惡究竟。成正覺時復於何等不見究竟。一切衆生破壞生死皆成佛道。不見諸佛無餘泥洹。無常滅盡如燈火滅。謂彼諸惡業世間大鄙陋者。一闍提輩永離菩提因緣功德。斯等名爲世間鄙陋。於此大乘最後覺悟得爲佛。名是亦鄙陋。諸佛法爾。

已作惡業者 如薩闍乳酪
愚者輕被燒 如灰覆火上

見。は一闍提憍慢心故。雖多作惡於是事中初無怖畏。以是義故不得涅槃。喻如彌猴捉水中月。善男子。假使一切無量衆生一時成於阿耨多羅三藐三菩提已。此諸如來亦復不見彼一闍提成於菩提。以是義故名不見所作。又復不見誰之所作。所謂不見如來所作。佛爲衆生說有佛性。一闍提輩流轉生死不能知見。以是義故名爲不見如來所作。又一闍提見於如來畢竟涅槃謂眞無常。猶如燈滅膏油俱盡。何以故。是人惡業不虧損故。若有菩薩所作善業迴向阿耨多羅三藐三菩提時。一闍提輩雖復毀訾破壞不信。然諸菩薩猶故施與。欲共成於無上之道。何以故。諸佛法爾。

作惡不即受 如乳即成酪
猶灰覆火上 愚者輕蹈之

【試訳】 例えば、シャッラキー樹 (śallakī), カルニカーラ樹 (karnikāra)²²⁾ ……………を切り倒し、部分に切断して運び、家に置いても、【梵文断簡・表1行目】もし水分 (toya) を得た後であれば、速に (kṣipraṃ) 芽を出して、開いた葉と花房をそなえ (mañjarivat), 枝と幹をそなえて、樹木 (vrkṣa) に数えられるものとなります。これと同様に、この教え (śāsana) においては、先端が切断された (mastakacchinna) ターラ樹のように[回復不可能な]波羅夷罪 (pārājika) や無間罪 (ānantarya) を作す人々であっても、この經典を聞くだけで、あえて心[起す]までもなく、彼等最上の人々は (narakuñjarāḥ), シャッラキー樹やカルニカーラ樹の如く、菩提に芽を出します (bodhau rohaṃti)。

例えば、切り倒されたカディラ樹 (khadira) やティンドッカ樹 (tinduka) は、焼けた種子 (dagdhabija) の如く、決して芽を出すことはありません。これと同様に、一闍提なる有情たちは (icchantikāḥ satvāḥ), 幾度 (bahuśaḥ) この經典を聞いても、焼けた種子の如く、決して菩提に芽を出すことはありません。

例えば、大雲 (mahāmegha) が雨降らせて (varṣat) いても、水は硬質な所 (ekaghana) には決して溜まりません。これと同様に、この經典の雲 (sūtramegha) の中で、教え(法)の雨を降らせても、一闍提には菩提の因は決して溜まりません。なぜなら彼(一闍提)は金剛の如

22) チベット語訳ではさらに9種の樹木名が音写語で示されているが翻訳は省略する。

く硬質なものですから。

一闍提たちは善なる所作 (kalyānakṛta) を見ません (na paśyanti)。非難 (nindita)・輕蔑 (garhita) される悪 (pāpa) を見ます。「善所作 (sukṛta)」とは「菩提 (bodhi)」を意味します。「来ない (na vyaiti)」とは「近づかない (nāgacchati)」を意味します。「密意 (sandhā)」とは「善 (kalyāna)」を意味します。密意の業 (sandhākarma) であるすぐれた善 (viśiṣṭakalyāna) は誰に近づかないのでしょうか。良い業 (bhadrakarma) は一闍提には近づきません。善心は誰に近づかないのでしょうか。一闍提というものは慢心に支配された不善な有情であり、その一闍提には近づきません。「根本の支分 (mūlāṅga)」とは何でしょうか。經典の放棄 (sūtrapratikṣepa) です。「それ故に恐れるべし (tasmād bhetyaṃ)」何故なら經典の放棄は恐ろしいこと (dāruṇa) ですから。

【梵文断簡・裏1行目】それ故、賢者 (pañḍita-dhira) 等は、大道 (mahāpatha) に行 (saṃskāra) あるを恐れるも、凡夫等は大道を恐れず。慢心に支配され悪しき処を進む。

故に、サルが[水中の]月を掴む如く、智慧なき者 (durmedhas) それを得ず。王の大道に入る如く、賢者等は[それを]得る。

誰が[善なる]所作 (kṛta) を見ないのでしょうか。^{(23……}悪なる一闍提は所作を見ません。彼は輪廻の終局 (saṃsāraḥ) に至るまで所作を見ません。私は要約を集めた (saṃkṣepasamuccaya) 意味を説くでしょう²⁴⁾ (bhāṣiṣye)。それ故に、最高に恐ろしいこと (paramadāruṇa) を恐れるべきです。^{……23)}

一切有情が一つの心を持てるものとなって、無上等正覚を悟る時、その時には、悪なる一闍提も最高の菩提を悟るかもしれませんが、彼はすべての[善なる]所作を見ないのです。畏れなき人 (viśārada) よ、あなたはこのように知りなさい。

誰の所作は尽きないのでしょうか。如来の所作は尽きません。[しかし]輪廻にとどまる一切有情が無上等正覚を悟る時、その時には、如来の所作は尽きるでしょう²⁵⁾。その時、[如来は]般涅槃し、完全な般涅槃 (atyantaparinirvāṇa) によって、あたかも灯火 (dīpa) や薪 (indhana) の尽きた火の如く、仏陀は無常なるものとなるでしょう。

同様に、一闍提の悪業も非難・誹謗されます。菩提の因となる福德 (puṇya) を、もし菩薩が捨てるなら、それはまた大乘に対する非難・誹謗者と言われます。[福德を]捨てなければ、そうであれば、完全なる仏陀という名称を持つことになるでしょう。これが諸仏の法性なので

23) 写本ではこの一文は欠落している (V. 2)。

24) saṃkṣepasamuccaya が何を意味するのか、詩頌による教説を指しているのであろうか。動詞に未来形を用いている点もよく分からない。

25) 写本では否定辞が入っているが (V. 5)、チベット語訳に従って (P. 133b5, D. 129b5)、削除して読む。

す。

乳 (kṣīra) と悪業 (pāpakarman) は瞬時に固まらず。灰に覆われた火の如く、至りて凡夫を焼く。

【解説】 この一葉は「北本」では「如来性品」の後半における、「六卷泥洹經」では「問菩薩品」における一闍提にかんする議論の一部に相当する。外形は一葉の大部分が残っているが、表面は相当摩滅し、文字は非常に読みにくい。しかし、読めた範囲で判断すると、ここで取り上げたA写本とB写本の一葉に比べて誤写は少なく、丁寧に書写されている。

内容的には、最初から三つの比喩が終る箇所までは特に問題はないが、その次、上記試訳のアステリスク記号を入れた箇所以降は、種々の疑問がある。まず、両漢訳ではここに一つの詩頌が入っているが、写本の梵文、およびチベット語訳には詩頌はない。「北本」では詩頌の前に「如仏説偈」の語があるので、漢訳者はこの詩頌を『涅槃經』に先立つ經典——恐らく阿含經——あるいは律藏にすでに説かれているものと見做しているのであろう。ここで不審なのは、梵文とチベット語訳では詩頌はないにもかかわらず、その詩頌の註釈文と見られる文章が存在することである。これは一体どう理解すればよいであろうか。一連の註釈文らしきものから判断すると、ここには「善所作 (sukṛta) を見ず、悪 (pāpa) を見る。[その人には]密意 (sandhā) は来ない (na vyaiti)。それ故に (tasmāt) 根本の支分 (mūlāṅga) を恐れるべし (bhetavya), 云々。」といった詩頌がなければならない。

この箇所の所説は、過去に説かれた詩頌の再解釈を通して一闍提の説明をしているはずである。チベット語訳しかないのであれば、何らかの事情でチベット語訳だけ詩頌が欠落しているとも考えられるが、梵文が判明し、それにも存在しないとすると、そう簡単には片付けられない。ではもともと原典に詩頌はなかったのか。しかし、それでは註釈文の存在を説明できないし、「北本」にも「六卷泥洹經」にも詩頌は訳されている。とすると、書かれていなくても、註釈に引かれる詩頌の一部を見ただけで、仏教徒であればすぐ心に浮ぶほど著名な詩頌なのであろうか。両漢訳者にとっても、この詩頌は常識的なもので、翻訳に際して付け加えたのであろうか。あるいは漢訳者は註釈文の中から詩頌を抽出したにすぎないのであろうか。

ところで、チベット語訳では、註釈文の後に漢訳にはない二つの詩頌が記されている。²⁶⁾この部分の写本は状態が悪く、断片的にしか読めないが、恐らくチベット語訳と同じと見て差し支えない。しかもこの二つは、内容的にここで私が想定した詩頌に連続するように思われる。また詩頌自体には大乘の要素もなく『涅槃經』独自の詩頌とも思えない。従って、三つの詩頌を

26) これ以降はチベット語訳と漢訳は大きく異なる。「北本」ではチベット語訳にある二つの詩頌とは異なった詩頌が一つある。また両漢訳ではこの二つの詩頌の内容が散文の中に分散・解消して含まれているようである。

記した文献がどこかにあるはずである。しかし、現時点では私はこの出典を見出すことができない。どうやら現存の阿含・律にはこの三つの詩頌は存在しないようである。

また、出典不明の現状では、この三偈の原意は明確とは言い難い。私が想定した最初の詩頌に出る「密意」「根本の支分」といった語の、『涅槃経』の解釈ではない、本来の意味は何か。さらに次の詩頌に言う「大道に行あるを恐れる」とは何か。出典が判明しない限り、これらの語の意味は理解困難である。

一方、上記諸文献の最後に出ている詩頌は、次のような『ウダーナ・ヴァルガ』K-17 に対応する。²⁷⁾

na hi pāpakṛtaṃ karma sadyaḥ kṣīraṃ iva mūrchatī /
dahan tad bālam anveti bhasmācchanna ivānalaḥ //

写本では、この詩頌は裏7行目の最後にその冒頭部分のみが読み取れる。文字が消えかかっているが、kṣīraṃ vā pāpaka(rma)と読める。しかし、この語順は『ウダーナ・ヴァルガ』のそれとはまったく異なり、また、語自体も若干相違している。しかし、梵文はこれしか残っていないが、漢訳とチベット語訳から判断すると、詩頌の意味内容は『ウダーナ・ヴァルガ』と一致する。従って、この詩頌は内容は同じではあるが、『ウダーナ・ヴァルガ』とは系統が異なることになる。²⁸⁾『涅槃経』に現われる阿含・律等からの引用詩頌の系統は何か、つまり如何なる部派の文献を引いているのか、先の出典不明の三つの詩頌と併せて注意する必要がある。少なくとも説一切有部系の阿含・律ではなさそうに思える。

付記 校正の段階で、望月良晃博士の『大乘涅槃経の研究』(春秋社 1988年1月)を入手した。入手して一週間にもならず、一部しか拝読していないが、チベット語訳も利用した研究である。同書の中で博士は『涅槃経』の一闡提資料として上記 C-4 の一葉に対応する部分も取り上げている (pp. 416-424)。若干気づいた点を述べると、417頁後から2行目「勝れたものでない彼等」の Tib. は mi mchog de dag であるが、mi は否定辞ではなく、nara の訳語。写本では narakumjara(R.3) とある。420頁後から4行目「善よりも」の Tib. は dgongs pa las, 梵文は sandhākarman(R.6) である。las は助辞ではなく karman の訳語。423頁後から2行目「[行を]作した者」について、博士はテキストを byas pa としてこう訳したが、テキストは byis pa (bāla: 凡夫) の誤り。また424頁10-11行目「完全に般涅槃した者が……」の一文は私の訳のように主語に如来を補うべきであろう。 1988年2月5日

27) F. Bernhard ed., *Udānavarga*, Band I (Göttingen, 1965) p. 175.

28) この詩頌は *Dhammapada* 71, *Patna-Dharmapada* 107 (G. Roth ed., p. 106) にも対応するが、これらも *Udānavarga* と同系統で、『涅槃経』に出るものとは異なる。*Gāndhāri-Dharmapada* の残存部分にはこの詩頌は存在しない。なお、水野弘元博士はすでにこの詩頌を *Udānavarga* 等に証定している。『法句経の研究』(春秋社 1981) pp. 110-111 参照。

A Guide for the English Reader

The present work is an introductory study on the newly identified Sanskrit fragments of the *Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra* that I discovered among the documents in the Stein / Hoernle collection of the India Office Library and Records, London. For the sake of the English reading public, I wish to make a brief introduction as to the nature of this work.

§1 Prior to the present findings, a total of eight folios of the *Mahāparinirvāṇasūtra* were known to exist: 1) one folio in the Hoernle collection, as reported by F.W. Thomas in 1916¹; 2) one folio in Koyasan, Japan, which was discovered by J. Takakusu in the same year²; and 3) six folios in the Petrovsky collection, Leningrad, as published by G.M. Bongard-Levin in 1985³.

In Chart 1 (p. 13), I have presented a list of the parallel passages from the Tibetan and Chinese translations of the *Mahāparinirvāṇasūtra* which correspond to those of the above eight folios.

§2 As a result of a thorough, firsthand examination of the Stein / Hoernle collection I found that a large number of fragments had yet to be brought to the attention of the academic world. This led me to the surprising discovery that the microfilm of the Stein / Hoernle collection which scholars had been using up to this time in fact accounted for only about one half of the entire collection. This meant that a great many unstudied documents had been stored away and were awaiting discovery for over half a century.

§3 In the present work I have selected 34 fragments from the collection, including the one folio already reported by F.W. Thomas. Judging from the size, script, and number of lines of the folios, I was able to determine that these fragments originally

1) Hoernle (1916) pp. 93-97. As Thomas explains in his paper, the discovery was made by the Japanese scholar Dr. K. Watanabe in 1908 (*see* bibliography, p. xiii). I shall, however, refer to it as the F.W. Thomas folio.

2) Yuyama (1981).

3) Bongard-Levin and Vorobyova-Desyatovskaya (1985), Bongard-Levin (1986).

derived from three different manuscripts :

Manuscript A :	9.0×31.0 cm,	7 lines per side.	20 fragments.
Manuscript B :	11.0×38.0 cm,	9 lines per side.	7 fragments.
Manuscript C :	9.3×39.0 cm,	7 lines per side.	7 fragments.

On the basis of these three manuscripts I have for convenience sake assigned new reference numbers to the fragments, labelling them as A-1 to A-20⁴, B-1 to B-7, and C-1 to C-7, as shown in Chart 3 (see pp. 19-20), which shows the location and other specifics of each fragment in the collection.

§ 4 These 34 fragments were all part of the literary find discovered at the Khādarik ruins, near the Domoko oasis along the Southern Silk Road.

I was able to identify a total of 22 fragments, that is, A-1 to A-10, B-1 to B-7, and C-1 to C-5, as being portions of the *Mahāparinirvāṇasūtra*, as shown in Charts 5 (p. 22), 6 (p. 23), and 7 (p. 24), respectively. These 22 fragments account for a total of 16 folios, since some folios are comprised of two or more fragments.

Fragments A-11 to A-13 were determined to be parts of texts other than the *Mahāparinirvāṇasūtra*. A-11 belongs to the **Aṣṭabuddhahasūtra*, and A-12 and A-13 belong to the *Sarvavaipulyasamgrahasūtra* (see p. 26). Hence, judging from the original folio numbers, these texts were done by the same scribe and appended to Manuscript A⁵.

In the present work, however, I have been unable to identify nine of the fragments, A-14 to A-20, and C-6 to C-7, although, judging from the script and so on, I am inclined to believe they belong to the manuscripts indicated.

§ 5 I also discovered that the six folios in the Petrovsky collection, which I will refer to as the Leningrad manuscript, are closely related to those in the Stein / Hoernle collection, as shown in Chart 4 (see p. 21). All of them belong to manuscript A, except for one belonging to manuscript B. Surprisingly, three of the missing portions of Leningrad manuscript A are to be found in the Stein / Hoernle collection. This clearly reveals that the Leningrad fragments were gathered from the same site in Central Asia as the other collections.

§ 6 The present work also includes the transcriptions of the Sanskrit text and photographs of the 34 fragments from the Stein / Hoernle collection. A typical sampling of three folios, one from each of the manuscript groups, are given with their

4) The F.W. Thomas folio is herein listed as A-6.

5) A-13, recto, inexplicably, has 8 lines, although I would still contend it to be part of Manuscript A.

corresponding Tibetan and Chinese versions (*see* p. 29ff.). I have also attempted a Japanese translation directly from the folios, with the missing portions of the texts being supplied from the Tibetan version. Regarding the transcription of the folio from Manuscript B, I have also included a partially reconstructed version of the passage, which contains the famous ten Upajāti verses on the impermanence of all dharmas. Aside from the difficulty of the passages themselves, I was faced with the problem of reconstructing the verses from a damaged folio, my solution to which may not be satisfactory to all scholars. Additionally, it may interest the reader to know that fragment C-1 includes a parallel passage to this folio.

§7 Transcriptions of identified fragments were made per folio, even in cases when one folio was comprised of two or more fragments.

Unidentified fragments, also transcribed, were tentatively assigned (a) and (b) sides, since it was impossible to determine front from back.

Transcriptions were done by the following system of symbols:

[] damaged letter; () restored letter; + lost letter; .. illegible letter; . single element of an illegible letter; /// folio broken off at this place; * Virāma: ○ string hole: (!) *sic*.

§8 In the future, I hope to complete the work of identifying the remaining fragments and publishing a more detailed critical study on them. As always, I remain indebted to other scholars in the field for their constant support, advice and encouragement.

A Chart of the Identified Fragments
and
The Fragments Transcribed

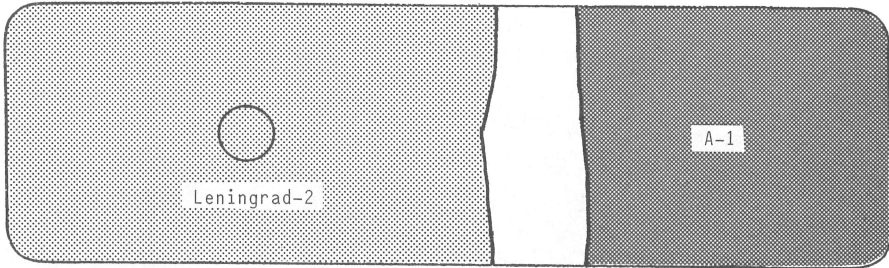
A CHART OF THE IDENTIFIED FRAGMENTS

Manuscript A: 9.0 x 31.0 cm

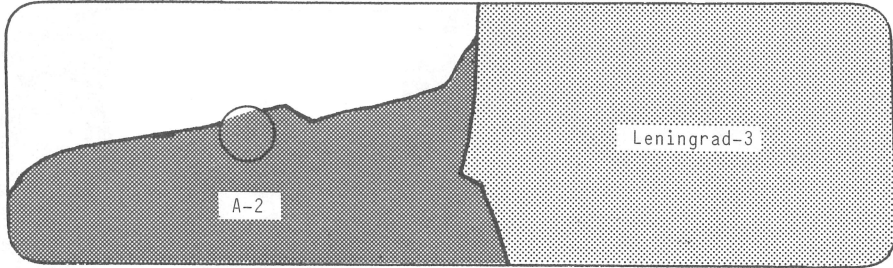
Manuscript B: 11.0 x 38.0 cm

Manuscript C: 9.3 x 39.0 cm

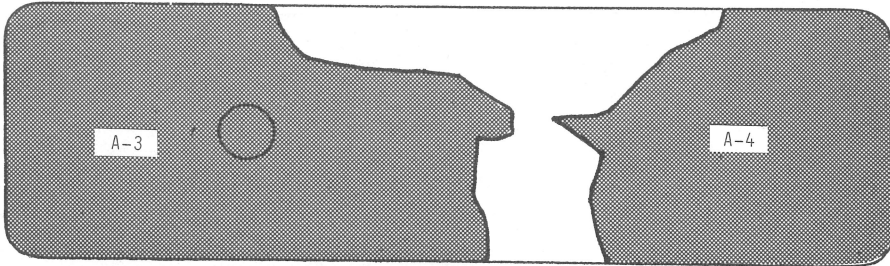
Manuscript A (MMPS)



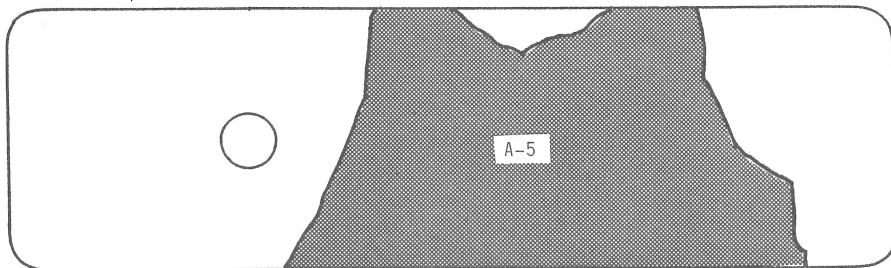
Manuscript A (MMPS)



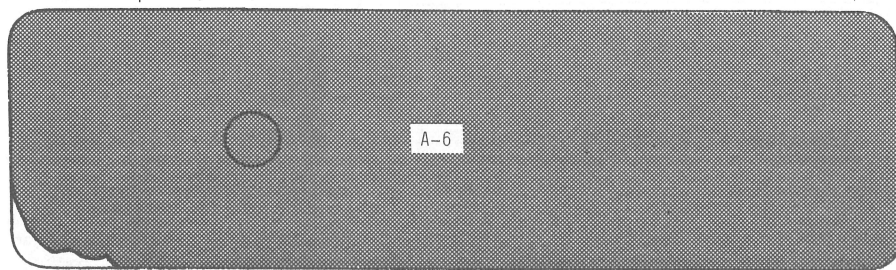
Manuscript A (MMPS)



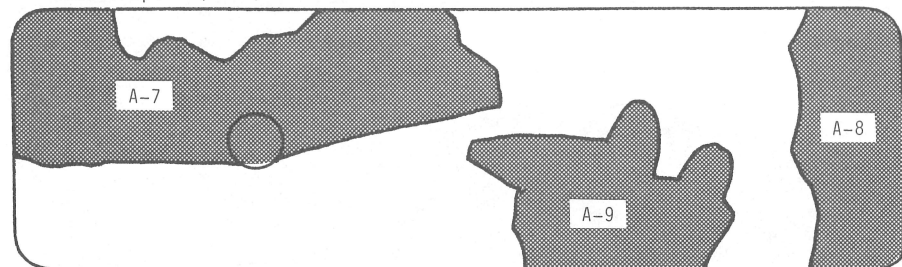
Manuscript A (MMPS)



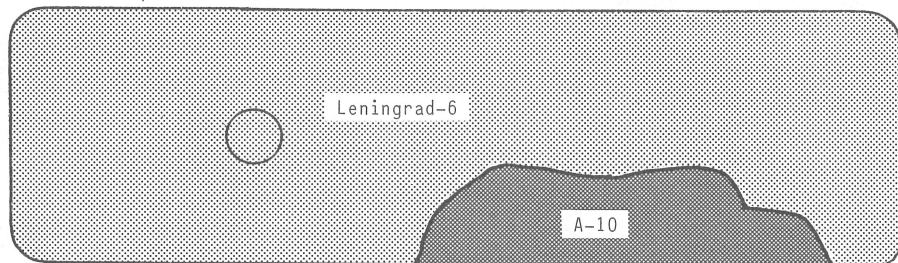
Manuscript A (MMPS)



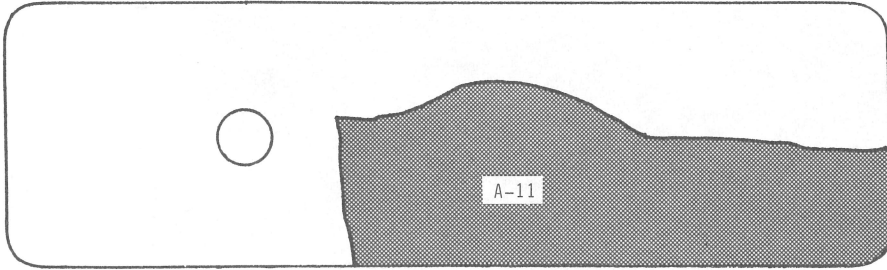
Manuscript A (MMPS)



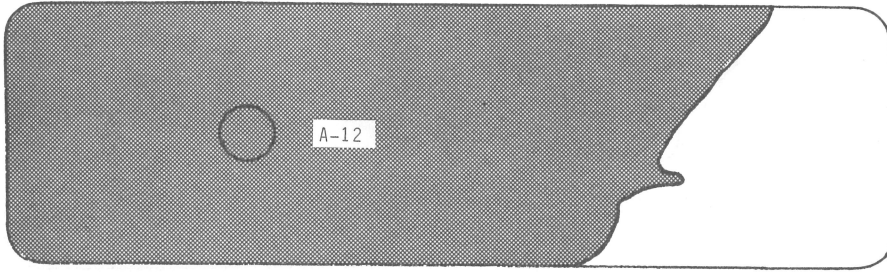
Manuscript A (MMPS)



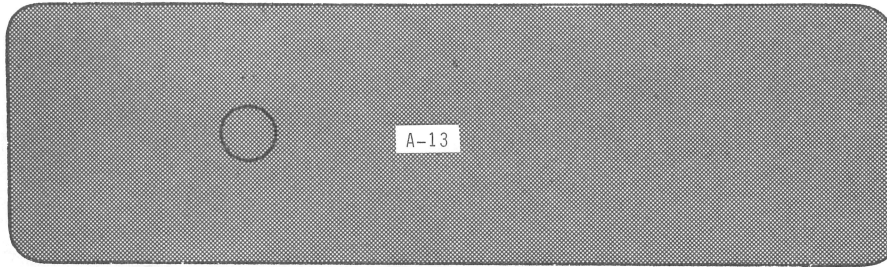
Manuscript A (ABS)



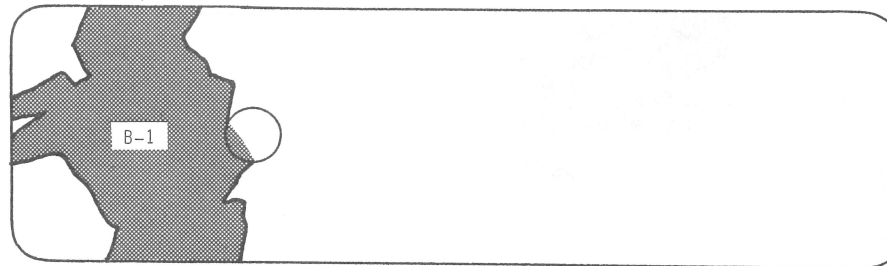
Manuscript A (SVSS)



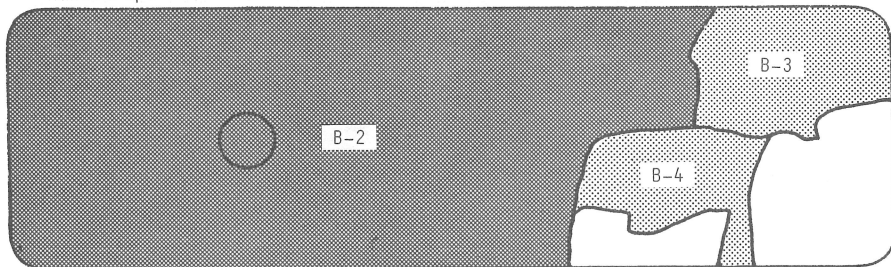
Manuscript A (SVSS)



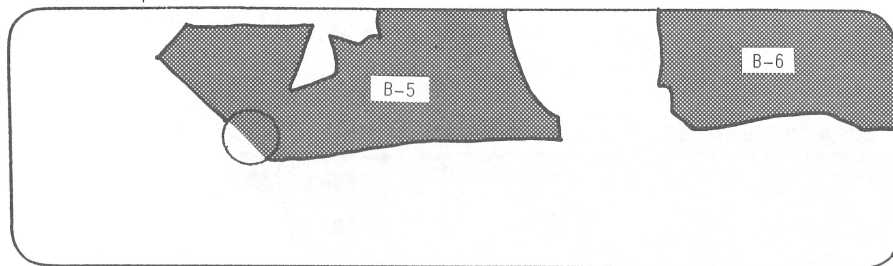
Manuscript B (MMPS)



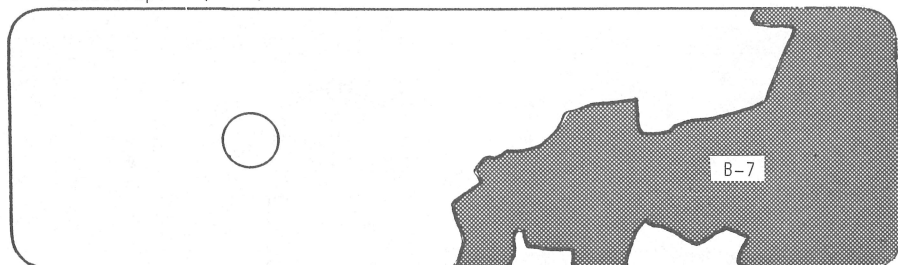
Manuscript B (MMPS)



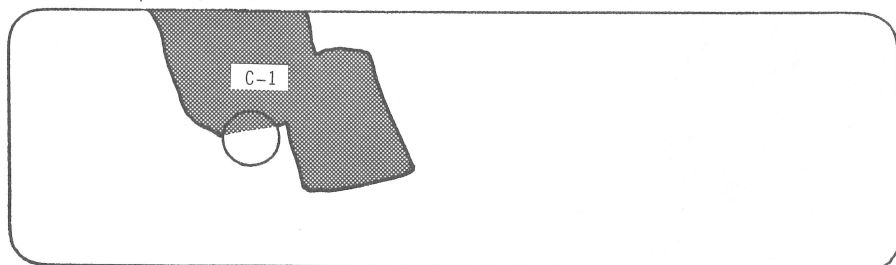
Manuscript B (MMPS)



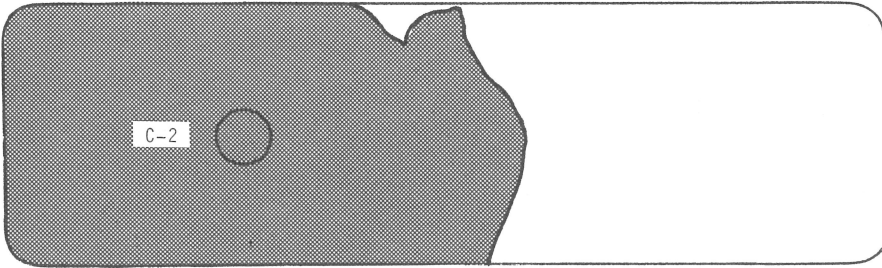
Manuscript B (MMPS)



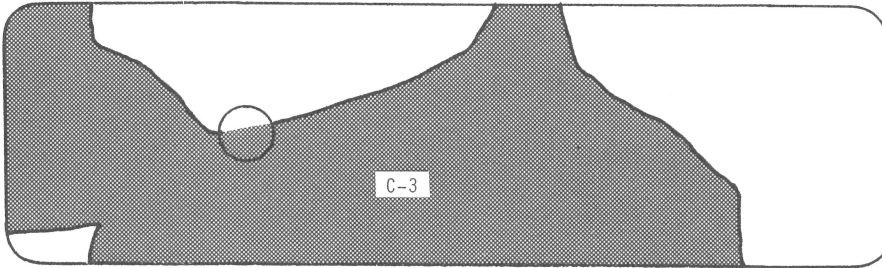
Manuscript C (MMPS)



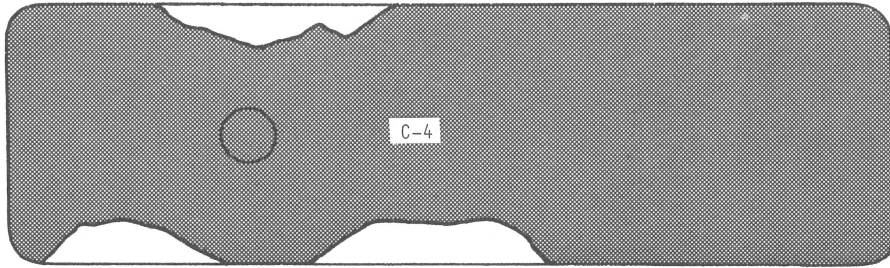
Manuscript C (MMPS)



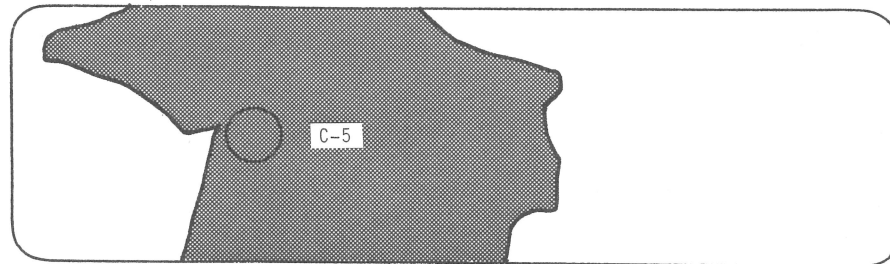
Manuscript C (MMPS)



Manuscript C (MMPS)



Manuscript C (MMPS)



THE FRAGMENTS TRANSCRIBED

1. Identified Fragments

A-1 (Recto)

1. /// mā • siṃhagarjita[pra]mukhāḥ siṃhāḥ sarvbasatvebhyo
2. /// ekānte 'tasthat* punar aparāṃ tathaiva haṃsakkroñcaca=
3. /// .. ya • gandhahastiva(!) • puṣpatphalamūlāni(!) ādā=
4. /// .. jāś ca kṣīrapūrṇodhaḥ tvaritatvaritam [ā]gamyā yama=
5. /// • tatra svayadūhatatanyudāṃsi(!) kṣīrapūrṇāni •
6. /// (a)bhijñāḥ maharṣayaḥ kṣāntivādipramukhāḥ s[v]e=
7. /// m abhivaṃdyaikānte 'sthat* yāva(ṃ)taś ca bhikṣavo bhi[kṣu=]

A-1 (Verso)

1. /// [kā]śyapapramukhaṃ bhikṣusaṃgha(ṃ) sthvirānandapramu=
2. /// .y antarikābhyāś ca sumerupramukhā • te vṛkṣalatāva=
3. /// rṇakandarāḥ tatra 'gaman* mahātapasaś ca • [ma=]
4. /// cābhivaṃdyaikāṃnte niṣīduḥ punar aparāṃ tadaivā=
5. /// [v]ā devaputrā • mahādyutayaḥ pūrvbapūjāś ca dvi=
6. /// .aḥ hiraṇyavatītoyaṃ ca svaprabhābhiḥ sarvba=
7. /// .. tasthuḥ tadā khalu tatkuśinagarīvy(!) aṃtarālaṃ haṃ=

A-2 (Recto)

1. ///
2. /// saṃ ///
3. /// .. thāt ma ///
4. /// .u • agnya○[r]cisa iva [nā]nāva(rṇa) ///
5. taḥ eva mukhe pravīśyāntardhaduḥ ○ sarvbapaṃṣatprabhās tato '(r-)
[ci=] ///
6. [mukhe] anta[rđhī]tānuvīkṣya bhayam āviśat* saṃhr̥ṣṭaromāṇas cābha ///
7. śayaṃ daśasu dikṣu kṛtyāni • parisamāptāni bhaviṣyanti • dhavam(!)
idh[ā](!) ///

A-2(Verso)

1. bata sarvbasatvām : catvā(ry)y (a)pramāṇāny
u(t)sṛṣṭāni • kiṃci ///
2. .. (dha)[r](ma)nau(ḥ) nima(ṇ)kṣyati • hā heti ^{prati-}vyalapat* teṣā(ṇ)
bhāghābhīghāna(!)saṃja .. ///
3. só[ṇi]ta[ṃ]m evo 'vapat* (atha) khalu [ta]syām eva parṣadi uāsa[ka](ḥ)
k)[au] ///
4. (karmārapu)[tr]ai(ḥ) sār[dhaṃ] utthāya ○ : sva[m Īrya]pa[tham a]vi///
5. /// ○ .i .. + + + [ja]lim upa ///
6. /// .. bhi .. ///
7. /// ṛṇ. ///

A-3,4(see p.30)

A-5(Recto)

1. /// .. datyā [lauki](ka) + + + + .ākārāyituṃ atha ///
2. /// buddhabhāṣitaṃ iti • v[e]ditavyam* ye mārabhāṣitaṃ [sū](travina-
yaṃ) ///
3. /// skandha(ḥ) kumāra(ḥ) pitā mahākātyāyanāḥ sarvbadevā ya ///
4. /// sthānaṃ vidyate • na sarvbapāṣaṇḍebhi(ḥ) pravrajati : na sarvba-
satvā ///
5. /// (dā)[sī]dāsasaṃdhivigrahasā[ma]grīkaroti • na purūṣoṣadha(!)rā-
jāmātyasamanaṃ ///
6. /// dṛṣṭir iti vaktavya : tathāga[t]o[v]āsīcandanasamakalpa • na
kas[ya]cin nigra[h](a) ///
7. /// (ta)[th]āgata iti • idam eva(ṇ)rūpaṃ mārabhāṣitaṃ samohasūtra-
vinayam iti • vedita[vyaṃ] ///

A-5(Verso)

1. /// .i • sarvbakalpād darśayati • sarvbamantravidyā(ḥ) prayojayati •
lekhasālā : saṃgīti .. ///
2. /// (kum)āryya[n]taḥ]purapaurajānapadaḥ]apatibrahmaṇāp[e]tānāthastrī-
puruṣakāyān vi[vi](dhān) ///
3. /// .. caraṇaṃ vyasanāt sarvbalokanistāraṇaṃ pratya[va]gantavyaṃ
sarvbaiṣāṃ lokānuvarta .. ///
4. /// [y]e mārabhāṣitaṃ sūtravinayaṃ pramāṇaṃ kurvanti • te mārāvarti-

na ///

5. /// .i te bodhisatvā iti vedita[vyā] * evam asmāka[ṃ] vina[y]e ///
6. /// .. kaṃ vinaye kṣama[te] * kim asmākaṃ vinayam* atikkrāmya ///
7. /// .. : [bhagavatā] kila .. + + +e : navamudrāḥ kṛ[tā] ///

A-6(Recto)

1. mahāsūtra[ṃ] tathāgatagarbhasaṃdīpakatvāt* kṣipra(ṃ) sūtrasthānam adhi-
gantukāmena kulaputreṇa vā kula_{-ddhi-}trāya(!) vā tathāgataga[rbhe]'bhi-
[y]oga(ḥ) karaṇīyaḥ
2. [āha] sma * evam evad(!) bhagavā[n*(!)] evam evad(!) bhagavā[n*(!)]
ta]thāgatagarbhabhāvanam * yādy(!) ahaṃ * pauraṣaṃ praveśitā(!) prabhā-
vita * [p]ratibodhitas cāsmi * āha
3. (s)[m](a) [s]ādhu sādhu kulapu[tra] evam eva draṣṭavya[ṃ] lokānuvṛttya(!)
āha sma * no hīdaṃ bhagavan* lokānuvartanā āha sma * sādhu sādhu k[u-]
laputra e[vaṃ]
4. [gaṃ]bhīreṇa vṛkṣapuṣpāhārabhra○maravat* dharmāhāreṇa bhavitavyam*//
punar aparāṃ kulaputra yathā [ma]śakamūtr[eṇa] ma[h]ā[pr]thivī n[aiva
tr=]
5. [pyate * atisva]lpatvāt* eva(ṃ) ma○śakamūtravat* svalpam ida(ṃ) mahā-
sūtra(ṃ) loki pracariṣyati * anāgate kāle [saddha]r[ma]vi[nāśa]pa-
[ram]e ma=
6. hāpṛthivī[ga]tam* (maśa)kamūtravat* kṣayaṃ yās[y]ati * ida(ṃ) saptamaṃ
nimittaṃ * saddharmāṃtardhānasyāśeṣāṇi sa(ṃ)[t]i nimittā[ni] jñāta(v-)
ya(ṃ) kuśalena //
7. [punar a]paraṃ [ku]laputra [yathā va]r[ṣ]āsu dhvastāsu [pra]thamo hema-
ntamāsa * śarad ity ucyate * tasyā(ṃ) śarady upāvṛttāyā(ṃ) meghā(s)
tva[r]ita(tva)[rita]m a[bh]ivṛṣyā[pra=]

A-6(Verso)

1. (eva)[m i](daṃ ma)hāsūtraṃ (tva)[rita]varṣaṇaśaran-
meghanirgamana[va](d) [da]kṣiṇā(pa)[thaṃ] praviśya [mahāpa]rinirvāṇaṃ
[sarvbe(!)sa](ndhā)[vacana](dharma=)
2. (varṣaṃ pravarṣati tataś ca) [dakṣi]ṇāpathakānā(ṃ) bodhisatvānā(ṃ) mahā-
satvānāṃ sa[ddharmavināśa]m ā[jñ]āya āsa[nnahe](mantavṛ)[ttamegha]vat*
kaśmī=
3. (raṃ pra)viśya pṛthivyā)m antardhāsyā○te sarvba[ma]hāyānasūtravaitu-

- lyaparamāmṛtasaddharmāntardhānā[ni] bhavi[ṣyaṃt]īti * tad idānīm ayaṃ
4. [sūtra]lā . . . [tathāgatā]○jñeyam āgatā saddharmāntardhānāv iti bo-
dhavyam* bodhisatvai(r) mahāsatvai(r) [narakuṃjarai * āha]
 5. (sma) [ākhyā]tu bhagav[ā]ṃs tathā○gataḥ pratyekabuddhaśrāvakabodhi-
satvadhātunirnnā[nā]karaṇaṃ viśadavispaṣṭār[tha](ṃ) [sarvbasa]tvānām
 6. su[kha]vijñānā[ya bhaga]va:_{vā} n avocat* tad yathā kulaputra gṛhapatiṃ
vbā gṛhapatiputro vā bhūtasya vrajasya [nānā]varṇānā(ṃ) gavām=
 7. svāmi(!) syat*(!) tatra ca nīlā gavāḥ syuḥ tā gā .. eko gopa[ḥ] pālayet*
bhataḥ(!) sa gṛhapati * kadācit ātmano devatānimittaṃ

A-7,8,9(Recto)

1. iva jal[p]e + + + + + + + + .. paṃ śikṣayat* tat kim* asau
tasya .i /// /// sya vaśeneti draṣṭa=
2. vyam* // āha [sma *] evam eva kulaputra tathāgato mūkavaj jalpati
sarvbam* sa(r)vb. /// /// rśayati * tat kiṃ
3. tathāgato mūka iti vakta[vya](ṃ) ○ āha sma * no hīdaṃ bhagavan
nityām(!) siṃ[ha] /// /// lokānuvṛtti=
4. r iti draṣṭavyā : // atha khalu [bha]○gavāṃs tasmiṃ samaye /// ///
.. .. t* raśmī /// /// (cun)[da]ḥ karmāraputra=
5. .. .ita .. .i ..ṃ * + + + + + + ○ .i + + ..ṃ /// ///sya pary-
aptapiṇḍapātam ānī + + .v. pari .. /// /// ho durlabhaṃ
6. /// atha vimalajāmbūnadanima[h]ī /// /// kāni ci=
7. /// pūjās ca mahatīm ādāya * ye /// /// mahā .. bhā=

A-7,8,9(Verso)

1. /// piṇḍapātaṃ muhūrtaṃ tāvata /// /// vām punar api
2. /// vat* atha sarvbe devādayo * ye ta /// /// jāṃ bhagavata=
3. /// .. [ca]t* anujānīhi bhikṣuṇā .onakā .. /// /// jñāya * a=
4. nyeryāpathā * pātrapāṇa○yaḥ prati[kṣa] /// /// .. .e [a]tha
c(unda) * karmāra(putra) + .ā /// ///varṇayituṃ *
5. sukhāvatīlokadhātuyogyā○bhūtāni * bhojanaṃ ca sadyaṃ vidāya bha[ga]///
/// vā kalpāva=
6. śeṣaṃ vā * bhagavān etad avocat* yadi cuṃda * mama cirasthitim icchasi *
kṣipraṃ p. /// /// (a)tha khalu sa=
7. rvbe devamanu(ṣy)ā(da)yaḥ (b)o(dhisa)tvā śaivam abhāṣatā * aho nu
dhanya * cuṃdo /// ///.yā * yeṣāṃm asmā=

A-10(Recto)

5. /// (devamanuṣ)[y](ās)[ur](āḥ) ///
6. /// (i)hāvātiṣṭhasva tāta yāvan naita[ḥ] kāśyapānandabh[i](kṣū) ///
7. /// (niṣṭhā)ṅgā(!) sarvbajña cchindita • saṃśayās tvam • atha
bha[gavāṃ]s t[ā]nicam(!) adhyabhāṣa(ta) ///

A-10(Verso)

1. /// (yūyaṃ) [yā]syadhve pryekṣya pādaḥ vaṃdā me • nityānityatvaṃ tena
mā kārṣa śokaṃ // atha tāḥ ///
2. /// (praṇidhā)[na]kṛṣataḥ tatra gaṃgara(!) • bibhara(!) • gaṃgāvālika-
saṃkhyāḥ satv[ā](ḥ) [c]i[ttā] ///
3. /// (ma)[h]ā[k]ās[ya]pasa[g]o[tra]ṃ (ca brāhmāṇaṃ) [mah]āsālam. ///

A-11(Recto)

3. /// .. gang(ā)na[d](ī)[vāl](i)kasamā buddhakṣetra [a]dhikkram(itvā)///
4. /// [lo]kadhātuve 4 asti śāriputra purastime disābhāge ito buddha-
kṣ(e)[tra] (ga)[n]g(ā)+ + + + +
5. /// (sa)myaksaṃbuddho śuddha[sam]..yāyāṃ lokadhātuve 5 as[t]i
(śā)r(i)[p]utra purastime disābhāge i=
6. /// ti hatabhaiṣadyastambhaśiri nāma [ta]thā(ga)to araha samyaksam-
buddho tiṣṭhati yāpayati
7. /// [i]to buddhakṣetrāto saptaganganadiv(ā)[li]kasamā buddhakṣetra
adhikkramitvā ratanapadmavikkra=

A-11(Verso)

1. /// yā[yā](ṃ) [lo](ka)dhātuve 7 asti [śā]riputra purastime disā-
bhāge ito buddhakṣetrāto a=
2. /// .. [la] nā(ma) [tathāga]to araha samya[ksaṃbuddh]o tiṣṭhati
[y]ā[pa]yati madhurasvarani(r)ghoṣāyā(ṃ)
3. /// bu[ddhakṣe]trā [apagata](pa)ñcaka(ṣ)[āyāni] • (a)pa(ga)[tap]ā(ṣa-
ṇḍ)āni • apagataśarkaraka .. lyāni •
4. /// ni • apagata[me]thunāni • apagata.e .. nāni : apagatanarakatīryag-
[y]oniyā[malo](kān)i
5. /// (śālipu)[tra] n vā kulaputro vā kuladhītarā v[ā] udgr[ḥ]ṇe .. ///
6. /// .ā .i .. ///

A-12(Recto)

1. .. mā mayā bodhivarddhaye na [nidī] .. [ṣya]nti * iha bo[dhisatve]na (śi)kṣ(i)[tavyaṃ]m iha na śikṣita[vyam iti] * [ta]i .e .. buddhaṃ a .. ///
2. .. [pra]vikṣipīṣyanti saṅghom(!) a[pavadiṣ]yanti * [te] kāyasya bhedān narakeṣū[papa]ddhyeṣyanti * te ta [bahūn]i [ka]lpe .i bhi [kalpa] ///
3. laviṣyanti * te tataḥ ca vitvā(!) yadbhūyena daridrakuleṣū(!) praty-ājāyiṣyanti * te ku .. cit ka cit. .rhato .bo(dhau) [vyā]ka[ra]ṇaṃ [la] ///
4. le vyākaraṇaṃ lapsyanti * syā○d yathāpi nāma mama etarhi cireṇa dīr- ghe[ṇā]dvā .ena pa[ṇ]cakasāda(!)k[ā]///
5. śrotavyaṃ ś[r]a[ddhayitavyaṃ] * mannyi○ṣyanti * te 'pi tāeiṃ gamiṣyanti * yathāpy ete .āā .imu .. ///
6. tīte (adhva)ni asaṃkhyete * kalpair asaṃkhyātatarai[r vyadā]jita [tena] kālena samaye[na vbīmal](ārci) ///
7. (sa)[myaksaṃbu]ddho loke mu.uvāsi(!) sa (a)[śīti](va)rṣa[nayu]tāni satvānāṃ dharmāṃ deśesi * ta[sya] pravacane pa .. ///

A-12(Verso)

1. [a]bhū[ṣī]t* [ci]trakathiko madhurakathī kalyānapratibhāno bahujana- saṃt. .. ko bahuja[nasa]mādapa[ko].. ///
2. ha[rṣano] : [sa] tena vimalārciyaśasaṃ rājena tathāgate(na) addhyeṣṭaḥ paścime kāle saddharmasa[ṇ]gra[hā] ///
3. ntārayatavyaṃ sa tasya tathāgatasya parinirvṛtasya va[rṣa]koṭīn dhar- manetrī sandhāreṣi * sa imaṃ sarvba[v]ai[tulya]saṃgra[ha] ///
4. dharman deś[e]si * [ya]thādhi[mu]kti○kānā(ṃ) satvānāṃ [ta]thā yevā(!) deśesi : * tena aśītibhir nagarasahasr[ebh](yaḥ) ///
5. [satvāḥ] san.r.itā * s te[na] bhadra ○ nāma mahānagaraṃ gatvā a[śī- tin]ā(ṃ) kulakoṭīnāṃ yathādhim[u]ktānāṃ tathā dharmā[n d](e) ///
6. to aśī[i]prāṇako(ṭa)[ya](ḥ) prāsāditā : tataḥ ekakoṭ[i bo](dhā)yām pra- tisthāpitā ekona-aśītiṃ ca koṭiyāḥ satvānāṃ śr[āva]kayā(na) ///
7. ..ḥ ataḥ sa pa(ri)[śuddhā](j)ivo bhi[kṣur da]śabhir bhikṣusahasrebhiḥ sārddha(ṃ) yena bodhis tena cārika(ṃ) prakkrāmīt* aciraprakkrā[nta-] sya [ca] .. ///

A-13(Recto)

1. tā kulaputro vā kuladuhitā vā akṣaṇo mucyate • yaś ca mannyuśiri(!)
bodhisatvo gaṃgānadīvālikasamāḥ kalpāḥ gaṃgānadīvālikasamāni buddha-
kṣetrāṇi saptara=
2. tnaparipūrṇāni kṛtvā gaṃgānadīvālikasamānāṃ buddhānā(ṃ) bhagavantā-
nāṃ ekam ekasmi(ṃ) divase dāna(ṃ) dadeyāt* yaś ca ima(ṃ) sarvbavaitu-
lyasaṃgrahadharmaparyāyaṃ li=
3. khītvā : antamaśas tat trayo vā vācceyāt* ayaṃ tata(ḥ) bahutaraṃ
puṇyaskandhaṃ prasaveyā(n) nāsti taḥ(!) dānaṃ śīlaṃ kṣānti(r) vīryaṃ
dhyānaṃ prajñā : yā iha sarvbavaitu=
4. lyasaṃgrāhe sūtre śikṣitasya bodhi○satvasya puṇyasya samasama(ṃ) syāt*
imasmiṃ khalu punar dharmaparyāye bhagavata(!) bhāṣīyamāne trīsatīnāṃ
gaṃgānadī=
5. vālikasamānāṃ bodhisatvānāṃ○m anutpattikeṣu dharmeṣu kṣāntilābhaṃ
abhūṣit*(!) saptati ca gaṃgānadīvālikasamā bodhisatvā ye avaiavartti=
6. katāyāṃ saṃprāsthītā anuttarāyāṃ samyaksambodhāyāṃ • ṣaṣṭiṃ(!) ca
koṭinayutaśatasahasrāṇi ye itas trisahasrāto imaṃ dharmaparyāyaṃ anu-
modayitvā
7. bodhāyāṃ saṃprāsthītās tebhi(ḥ) sarvbebhir aśītibhi(ḥ) kalpās(!) saṃ-
sārāto cchoritā • sarvbe ca avaiavarttikabhūmi(!) anuttarāyāṃ samyak-
sambodhim abhisambuddhyiṣyanti •
8. eva(ṃ) mahārthiko ayaṃ dharmaparyāyaṃ(!) bodhisatvānāṃ mahāsatvānāṃ
tasmi(ṃ) tarhi mannyuśiri(!) iha dharmaparyāye śikṣitavyaṃ śikṣitvā •
evaṃ paścakāle dharman dhārayi=

A-13(Verso)

1. tavyaṃ evaṃ tu sme(!) akṣano mucyiṣyantetīt*(!) atha sā sarvbāvantapari-
ṣā te ca daśadiśadharmabhānakā bhagavantam etad avocat* evaṃ bhaga-
vāṃ tathā kariṣyāmo yathā vadasi •
2. idam avacid(!) bhagavāṃ āttamanas(!) te bhikṣavas te ca bodhisatvā ca
sā ca sarvbāvantapariṣā sadevagandharvbamānuṣāsuras ca loko bhgavato
bhāṣitam abhinandiṣu: ○

B-1(Recto)

1. /// (ālo)kyaikā[m] uttarā(sa)ṃ(ghaṃ) ///
2. /// ..ya • pāda[yo] ///

3. (pa)ścima[pi]ṇḍapāda(!) prati[g]ṛ //
4. .. (pi)[ṇḍa]pāta(ṇ) paribhuttvā[ṇ](!) bhaga ///
5. gatvā dhṛtvā ya ○ ///
6. .. la sthāṇukaṇṭaka[ṇ] .ṛtvā ba.i ///
7. /// gata .. .o .. gbalava[d.] ///
8. /// .. ti pāl. yāmo va .. ///
9. /// .. .aṇ .. (bha)[gavaṇ]taṇ .i .r. ///

B-1(Verso)

1. /// (sarvba)j[ñ]o jino [ś]r(eṣṭhi)pudgala ///
2. /// (pāra)mitām iti : a(tha) ///
3. /// (ma)hādānapāramitā .i ///
4. /// ramaddanyo(!) 'si cunda karmāra(putra) ///
5. [k]e udumbarapuṣpaṇ tato durla○(bha) ///
6. ṇḍapātadānaṇ durlabhatarāṇ : [a](tha) ///
7. [a]pagatābhr[e] vimāla[ṇ]m a .. ///
8. /// piṇḍapātaṇ sa ///
9. /// (ta)thāgataputro sa ///

B-2,3,4 (see pp.35-36)

B-5,6(Recto)

1. /// .. dh. b. sy. .ā + + + + [t]i · atha sa rājā ta[s](ya) ////
/// .. tya kālaṇ kṛtvā akṣobhyasya tathā=
2. /// dyataṇ ye ca sa[tvā] + + trāntanumodanta(!) yudhya(!) te sa(r)vb[e]
/// akṣobhyasya tathāgatasya loka=
3. /// .. sa tathāgato .. + + (a)bhiratir nāma lokadhātu : buddh[a]////
/// ++ r. kālaṇ kṛtvā : akṣobhyā kāra=
4. /// (śrā)○vako 'bhūt* rājñā dvitīyaśrāvaka : eva(ṇ) saddharma ///
/// .. ddhartavya ahaṇ rā[j]ā [bhi]k[ṣu]ḥ
5. ///○vṛta evaṇm a[pra]me[ya]ṇ (saddha)r(ma) .. .ā + + .ā .e .. .i ///
6. ///○ .ā y. .. ///

B-5,6(Verso)

4. ///○ .. ś[īla]vat. ///
5. ///○ gṛhapatirājā[mā]tyānā(ṇ) [śīla]vat. [bhik]ṣu ///

6. /// .. vophavyāṃ(!) [cā] .. [ṇ]ārtham* tat paramanipuṇaṃ śīlam*
[ā](cārya) /// ///[yānasyopadiṣṭa] .. (sanya)gdarśa=
7. /// (r)ājāmātyānāṃ a + + tā dāyakānāṃ ca : lābha[h]e /// /// ra-
vādī (ī)ryyāpa(tha)saṃpannaḥ
8. /// : ayam ucyate : [ācā]rya(ḥ) śīlavān* kalyā[ṇa]dharmā /// ///
[dh]ārayan* yā .. .ākṛ[ti].o ne=
9. /// .i + + .ā + + + + + (l)ābhasatkārārtth[ā]kalpa /// /// .n.
ti : tatra saṃghaṃs trividhaḥ duḥśīla=

B-7(Recto)

1. /// ^{mi}la kāyas ta=
2. /// ..t* mā=
3. /// + + + + + ..t* nā[bhyā]ṃ udi=
4. /// ste sā nā v. va .es svas. .au ..
5. /// .. māno necchet* ha tvaṃ trada.mukho bhavet* [sā] punar e=
6. /// .. niba patrao .. .ipta babhūva tā .. māte [v]iṣaṃ a=
7. /// .. [ku]la[pu]trāhaṃ prā[g vineya]vaśena sarvbadharmā an[ā]tmā-
[na=]
8. /// + + + pari[tyaktvā] nirvb[ā](ṇa)m adhigacchaṃti
bhikṣūṇāṃ .. .[ā] ..
9. /// .y. sa[ṇ]darśa .. + + + [lo]kikātma + + + ..ṃ + + .āya nairā-
[tmabhāva=]

B-7(Verso)

1. /// pet* eva[m]. + + + + .yatā bhāva .. + + + dha(rmā a)nātmāna ity
uktavān*
2. /// .. datiṛ .. jaraṇā[ya] tau .. cau pātu[ṇ] idānī(ṇ)
pipetita=
3. /// (ta)thā[gata]ga[rbh]o 'stīti de(śayā)mi mā bhikṣavo bhaiṣṭa
bālavat* ya=
4. /// .. asmā[ka] [ta]thāgatagarbho 'stīti vimṛśya bhāva[n]āyā=
5. /// [jñāno] bhavati ajñāne paṭatvaṃ na yuj[y]ate ya=
6. /// .. ti vadā[m]i .ā + .ānena ca sa [tā]ni .ā=
7. /// .. [ṇ]ā + + + + + .. karmaviśaiṣi :
8. /// .i sā paradravya=
9. /// .. rā śṛṇu

C-1(Recto)

1. /// iva punar api to(!) jīvaṃtau dṛṣṭvā [kaś]c(i)[t p](itr) ///
2. /// lābho manuṣyalo[ka](ṃ) saphalaṃ ca janmaṃ * 1. ///
3. /// (n)ātham avāṠpya vīraṃ tīryaggater nāsti .. ///
4. ///Ṡ[ta]thāgatotpādam avāpya ///
5. /// [ka]dharmair maharṣim* prāpyo .. lī ///
6. /// .. naṃ .e + + .e . i ///

C-1(Verso)

2. /// (saṃ)ghamadyac[ār](u) ///
3. /// na mahāpradīpa : api sa .. ///
4. ///Ṡ[cu]ndam āmaṃtrayām āsa ///
5. /// (piṇḍapā)tadānapāṠramitāsampaṭ* // api tu c(unda)///
6. /// naivaṃ tvayā puna[r a]pi tathāgato yāci(tavyas)///
7. /// (gā)[thā] abhāṣata // sarvbeṇa marttavya[m a](vaśyam)///

C-2(Recto)

1. iṣiṇḍakā iva gorasasya te puna(r) brahmacaryāheto(ḥ) parad(ārakava)r-
janāheto(ḥ) ///
2. sāvaśeṣa[ṃ] t[e] mātrpitṛpūjā idṛseti na jānanti tṛśaraṇagamanam a[p]i
na jānanti * pa(ra) ///
3. mṛṣā tena [l]o(kikāḥ) [saṃj]ānanti tathāṠgataḥ anitya adhruva iti
tasmā[d a]nitya .. ///
4. kasya bhāgī (cakk)[ra]varttī rājā loke Ṡ (u)[t]padyata te ca iṣiṇḍa-
kās cakkravarttipuṇyā .. ///
5. s taṃ v(r)ajam utsṛjyāny atra g. .. [y]u * tato rājñā(ś) cakkravartti-
no gṛhapatiratnaṃ taṃ vrajaṃ pratipadyeta ///
6. gavāṃ .. dviguṇā ta .. kṣī(ra) rājñās cakkravartti[naḥ] (puṇye-)
[na] evam eva dharmacakkravarttī buddho ///
7. gata[m] evānugacchati * lokikā iṣiṇḍakā iva gatim api na prāpnuvaṃti *
buddhasābdaga ///

C-2(Verso)

1. tvānāṃm arthe dharmakṣīraṃ ca dūhate * anena kāraṇena kulaputra tathā-
gato nityo dhruvaḥ sāsva[ta] ///
2. eva(ṃ) jānīhi * evaṃ [kula]putreṇa vā kuladuhitā(!) vā nityo bhagavāṃ

buddha(ḥ) śās̄vato bhagavāṃ ///

3. eva mama gatim anūnām ana[ti]rekāṃ ya○syanti : yadā kulaputra iti dvyakṣarabhāvanāṃ .. ///
4. dharmatā • āha sma • buddhānāṃ dharma○teti • asya bhāṣitasya ko 'rthaḥ icchāmy ahaṃ c. ///
5. ma śarīratyāgaḥ śarīratyāgo nāma digvādaḥ eṣa iti jānīhi • āha sma • [śa]rīraṃ tya ///
6. cchedo 'yaṃ tad yathā nāma kulaputra asaṃjñinaṃ(!) rūpaskandhaḥ saṃjñāskandha[ḥ] sta[ḥ] taḥ(!) te satvāḥ [ka](thaṃ) ///
7. ccheyā mā bhūt* yaḥ kulaputra evaṃ prākṣīḥ kathaṃ nirdeṣṭavyā[n]i + (asaṃ)jñināṃ satvān(ā)[ṃ] ///

C-3(Recto)

1. ti śroṣya(ti) /// ///sameṣu buddhe[ṣu] ///
2. vaitulyaṃ pratikṣ(e)[psy](anti) /// /// .. na punar arthaṃ saṃ[pū] ///
3. vanteṣu bodhicittaṃ u[tpā] /// /// .y. + pratikṣepsyaṃti uddekṣyaṃti drakṣyanti .. ///
4. jñāsyanti na punar arthaṃ saṃpū ..○tsyaṃte • ye ṣaḍgaṃgānadīvālika-sameṣu buddha(!) bodhicittam utpā[da] ///
5. ṣyaṃti likhiṣyaṃti likhitvodgrhīṣyaṃ○nti • arhadvibhāgaṃ saṃbhot-syaṃte na tv arthaṃ saṃpūrṇaṃ vijñāsyanti • ye aṣṭagaṃgāna(dī) ///
6. ditaṃ te paści(m)e [kā]le vaitulyaṃ na pratikṣepsyanti • u(d)dikṣyaṃti śroṣyaṃti likhiṣyanti likhitvodgrhīṣyanti dhārayiṣyanti • vāca .. ///
7. nti iṣyaṃti prakāśayiṣya[nt]i sarvbalokānukampārthaṃ pūjā-satkāraṃ pustakānāṃ kariṣyaṃti paraiś ca kārayiṣyanti • guru ///

C-3(Verso)

1. sya(ṃ)t(e • ani)ty(o) dhruvaḥ śās̄vate(!) hy acala(ḥ) sukho bhagavāṃn iti tathāgatagarbha : sarvbasatvānām* saṃprakāśayiṣyatīti evaṃ paryu.ā ///
2. rmam uddhariṣya[ṃti] saddharmapakṣadharaś(!) ca bhaviṣyanti ye adya bodhaye cittam utpāditaṃ te paścime kāle saddharmam uddhariṣyaṃti saddharma[pa](kṣa) ///
3. nti • mā tvaṃ kulaputra evaṃ drakṣī • a○nāgatānāṃ satvānāṃ saddharma-syoddhāraṃ ye 'ddhya(!) bodhaye cittam utpā[dayi] ///
4. saddharmam uddhariṣyāmīti • [j]ā .ī ○ ye 'dya kulaputra neṣāṃ(!)

- bahirdhā na durmanasaḥ prahr̥ṣṭā[ḥ] saṃvṛttā ma[h]ā ///
5. smākaṃ lābhasatkāra .i .r. /// /// .i + [v]iṣyatīti prahr̥ṣṭa-
manasa[ḥ] buddho ///
6. dvajā : sūtraṃ pra[t]i(kṣ)e(pa) /// /// .āgatā : satvā[ḥ] te me///
7. laputrā /// /// .ākhyānāni kṣa .. ///

C-4(see pp.45-46)

C-5(Recto)

1. rvbaj[ā](ṃ)budvīpakānāṃ satvānāṃ dr̥ṣṭvādikarma(!) karttuṃ yogo nāsti
te .ū ///
2. (e)vam eva mahāyānīyānāṃ sarvbasūtrasamādhin śrutvā bhā[va]yitvā mah[ā-
par](inirvbāṇaṃ) ///
3. /// (mah)[āsū]tre saṃdhāvacaṇaṃ ○ śrutvā saddharmasthāne karmārabha-
ṃte * tataḥ ya(thā) ///
4. /// .e .aṃ (ma)[h]ā○[m]e(gha)tathā(gata)gar[bha](ma)[h]āsūtraśravaṇa-
dharmavṛ(ṣṭi) ///
5. /// * asī○tīnām iva mahāśrāvākānāṃ saddharmaṇaṃ dar[ī]k(e) [m](ahā-
sūtre) ///
6. /// (icchaṃ)tikam* tad yathā nāma kulaputra mahāv[ai]dya bhūtapra.ī-
tasya ///
7. /// ca vadati kṣīpram idam oṣadhi(ṃ) nīyatāṃ nītvā ca taṃ dupa ///

C-5(Verso)

1. /// [aha]m evāgacchā[mi mā] canaya vyasanaṃ ga[cche] ///
2. /// .. su[kh]ī [bha]vati e[vam] e(vedaṃ mahāpari)[ni]rvbāṇaṃ [ma]hā-
sū(trāṃ) ///
3. /// .. śrutvā ○ mahāvīryaṃ [mahā] (bo)dhihetur
bhava[t]i .. ///
4. /// (mahāvai)[d]y(ada)r[śa]○nā pi (bha)[vaṃ]ti bodhi-
satvā ma(hāsatvāḥ) ///
5. /// .. + .. vātayitvā vā ○ likhitvā vā śrutvā vā te kathaṃ na
bhaviṣyaṃti [b](odhisatvāḥ) ///
6. .. śṛṇonti tathāivai[cchaṃt](ika) idaṃ sūtraṃ śrotuṃ na labhate nir-
h[e]tukaḥ sa i(t)i ///
7. [d](ṛ)[ṣ](ṭv)ā [tava] mahārājaṃ mara vyādhir bhaviṣyatīti

vyākuryāt* sa ///

2.Unidentified fragments

A-14(a)

1. /// .. tra dṛśyate udake 'py ara[ṅye] ///
2. /// .. trāyaṃ sa candra : mameva ///
3. /// .āyaṃ candra iti bāla ///
4. /// .. nna .. . ○ cāśa ///
5. /// .aṃ .ijñāna ○ .ika .. ///
6. /// ti ke vasati * ///
7. /// .. . ba[dhaṃ][ā] .. [ya] .o ///

A-14(b)

1. /// .e jāmbudvīpakās saṃjānaṃ .. ///
2. /// (ca)ndra ity anye saṃjānāṃti * b. .c. ///
3. /// .ārhaṃ sa○myaksaṃ[b](uddha) ///
4. /// [kva]ci utpa○dyamā(na) ///
5. /// .āyā candravat* ○ lekhaśa ///
6. /// .t. * astaṃgatam iva parini(rvbāṇa) ///
7. /// .. .i * kecid utpannotpattiṃ * na ///

A-15(a)

2. /// * tad yathā rājā ///
3. /// .. mṛta saṃjñākalpa .. ///
4. /// .aṃ jñāna kalpayi .. ///
5. /// .y. niṣkleśo bhagavān* vividh. .. ///
6. /// ta : āha sma * asaṃkhyeyakalpako[ṭī] ///
7. /// .ā sahakāmān anusevitavān* rāhula ///

A-15(b)

1. /// putra tathāgatān arhata : samyaksambuddhan* .r. ///
2. /// .. ti mahāparinirvāṇam iti * mahānityā .. ///
3. /// bodhisatvo mahāsatva : sumeruṃ parvba[ta]///

4. ///[kā] syāt* na ca ve[dakā] .. ///
5. /// .. paphalako ge bhi ///
6. /// tra mahāparinirvā[ṇa] ///

A-16(a)

1. /// [t]ṛ ///
/// ... lapi(tr)tva(ṇ) ca ///
2. /// .yatā [śṛ]ṇ. ta .ā tyak. ///
3. /// [va du] .. ddhaṇ * tāva vi .īr[ṇa] ///
4. /// * kva vā prakṣiptā kva vānītā [i] ///
5. /// .. na svasthāne [sthā](pa)yet* evam [e](va)
6. /// [hasrama]hāsahasraṇ lokadhā=
7. /// vā pra[kṣ]iptā iti * anye satvā saṇ=

A-16(b)

1. /// ti * āha sma * sādhu bhagavan* nira=
2. /// .āta udyānaṇ nigacchet* tatra
3. /// (ta)thāgato dharmavāhīno bhaviṣya[ti]
4. /// .ā udyānaṇ praviśya prakkrīḍararati * [ta] ///
5. /// .. nānāpuṣpo dhyāne pra[v]iśya .ī ///
6. /// kleśa sa .udrā nistīrṇa tathā[ga](ta) ///
7. /// .i ..ṇ .. sā ///

A-17(a)

1. /// .. ///
2. /// (dhar)maparyāyaṇ śrutu .. ///
3. /// paryāpnuyā : .eṣāṇ ca vista[re] ///
4. /// [yāna]saṇprāsthītānāṇ satvānāṇ ma ///
5. /// .yanti * [d]eśayiṣyanti * vācayiṣyanti * paryāpa ///
6. /// .āga[tā] bhaviṣyanti acintyenātu[l]e(na) ///
7. /// [ta]t kasya heto(r) na hi .. kyaṇ su ///

A-17(b)

1. /// rayituṇ vā * deśayituṇ ///
2. /// .yane : pūjanīya sa pṛthivipra[de](śa) ///
3. /// ti : caitya sa pṛthivipradeśo bhaviṣyati ye .. ///
4. /// .uniṣ[ya]nti * te paribhūtā [bha]viṣyanti * su .. ///

5. /// eva dharme paribhūta : tayā pūrvbaj(a) ///
6. /// .ā + + [saṃ]khyeyatarai(r) dīpa .. ///
7. /// .ā [su] ///

A-18(a)

- w. ///
- x. /// .. . ta ca nāma [yakṣo 3 nā]rāyaṇabalaṃ ca nā=
- y. /// [kṣo] 6 [kum]āro ca nāma yakṣo 7 su[bā]huṃ ca nāma yakṣo 8
- z. /// .ā .. .ā .o .. .ī .e + + + .ā .i .e + + + .r. .. .ṃ [sā].[i]

A-18(b)

- w. /// .. . + + + + + + + + + + + + + + + + + ..
- x. /// nti prayuktena bhavitavya anutpādadharmapratyavekṣakena sa
- y. /// .. na dharmaparyāye bhagavato bhāṣayamāna dvātrīṣeḥi gaṃgā=
- z. /// .ā .. .ehi ca biṃba=

A-19(a)

5. /// .. + + + .. ///
6. /// .. bhūṣi anuttarāyāṃ samyaksaṃbo[dhā](yāṃ) .. .ṭ. ///
7. /// .āyāṃ prajāyāṃ anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhāyāṃ cittāṃ utpannaṃ *

A-19(b)

1. /// pūratva dada yadā na likhitva dhāritva ya puṇyaskandho tasyopa=
2. /// [tva]sya aṣṭau yakṣā himava[nta] kāna .. .e ///
3. /// .. .o : p[r]a .. + ..ṃ ///

A-20(a)

1. /// ra sandhāvācana * vividhadharmamukhanetrīpra .. ///
2. /// .. ta sahasrakṛtva : pravakṣiṇī .ṛ ///
3. /// .Im ādau .ṛ ///

A-20(b)

5. /// [ma] bo .. ///
6. /// na saṃprāsthītā : m. ///
7. ///tarayiṣyāma iti : sarvbak. ///

C-6(a)

1. /// yārditānāṃ dharmakathikathikānāṃ (dha)[rmanī]trī ///
2. /// ṭavīkāntāre vā . . .ī .ānā .e ///
3. ///itamā○ra . . .yo . . ///
4. /// [na] khalu te pāpī○.ā ///
5. /// . . m abhūt* .istrira ○ ///
6. /// [bra] . . ///
7. /// . . . jā . . . ///

C-6(b)

1. /// . . . [bhaga] . . ///
2. /// . . nn asmā ///
3. /// [da]gbhā.e ito bu○ ///
4. /// [hā] saṃmyak[sa]ṃbu○ddh(a) ///
5. /// (pa)[r]i[ni]rvbāsyati na ○ cora . . . ///
6. /// . . .e 'dya parinirvātu tathāga[to bhaga]vān (i)t(i) ///
7. /// (bodhisa)tvo mahāsatvaḥ sādṛviti * sudhitāya ta[ṃ] tathāga(ta) ///

C-7(a)

1. /// .yakāye āra . . ///
2. /// .ā dharmata[tva]ṃ sādḥ(u) sādḥu) ///
3. /// khaloṇḍiṃm aca ///
4. /// . . + . . .ā ///

C-7(b)

4. /// (e)va[ṃ].tm(a) ///
5. /// . .lā : saddhar[m](a) ///
6. /// .ir manuṣya [a]ya[m] . ///
7. /// nna : ayam eva . . ///